落ちこぼれと美鬼

The ROCK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
落ちこぼれと美鬼

【Ｎコード】
Ｎ２７６１Ｗ

【作者名】
Ｔｈｅ　ＲＯＣＫ

【あらすじ】
闇にはびこる『鬼』の討伐を生業とする『伏鬼衆』でありながら、落ちこぼれの烙印を押された少年・鈴也。
伏鬼の名門・御堂の家を飛び出したはいいが、彼を連れ戻そうとする従兄妹・貴子との追いかけっこの日々は終わらない。
ある日、鈴也は夜の公園で、人外の美貌を持つ少女・紫炎と出会う。
利害の一致と勘違いから、２人はとある契約を結ぶことになるが…

1（前書き）

どんなもんかな、と思って投稿してみました。
お目汚しですがどうぞ。

1

闇は恐怖を司る。

人知れず暗躍する異形の存在――『鬼』。彼らが蠢くのが闇の中であり、彼らの存在はまさに、人間にとって恐怖以外の何物でもない。

現世の闇にまぎれ、人を食む妖しの物。抗う術のない者はただ餌食となり、人は闇を恐れるようになった。それでも、人間に対抗手段が残されていなかったわけではない。特殊な鍛錬の末、『鬼』を討つ力を手に入れた者がいた。

彼らが持つ剣は、堅固なる『鬼』の皮膚を切り裂く事ができた。

彼らの使う術は、強大なる『鬼』の生命を削り取る事ができた。

人を守るべく鬼と戦い続けるその一族を、『伏鬼衆』といった。

闇を恐れる人々が、眠りについているであろう時刻。こんな時間に外を出歩いている人種など、1つしかない。

御堂鈴也は夜道を走っていた。そして、御堂貴子も走っていた。

鈴也が逃げて、貴子が追う。2人の距離は一向に縮まらない。

貴子が必死で走っているのに対し、鈴也にはまだまだ余力がある。

貴子が走りにくそうな巫女装束を着ているのも、この鬼ごっこが終わらない理由の1つだろうか。鈴也はTシャツにジーンズ、ジャケットという身軽さ。だが、2人の距離は広がりもしていなかった。

「待ち…なさい、鈴也！」

貴子の叫びが、夜の静寂を切り裂く。ここが公園でよかったと、鈴也は思う。住宅街なら安眠妨害になるところだ。

「もう、逃がさない、から…」

走りながら叫び続けたのだろう、貴子は息も絶え絶えだった。無

理もない、気がつけば１キロほども必死で走っていることになる。ストレートの髪が汗に濡れて、まるで黒い絹のようだ。
「おとな、しく、家に、戻って、きな、さい！」
「やだね」
鈴也は器用に、振り向いたまま走っている。諦めたのか、貴子の歩幅がみるみる縮まり、やがて草履を引きずる音が響いた。そろそろ限界だ。
「仕方、ない、でしょ、鈴也なんて、弱いん、だから…」
足を止めた貴子はもはや、肩で息をしている。今なら確実に逃げられるだろう。だが、鈴也もまた、後ろを振り向いたまま走るのをやめた。
「み、御堂の、家の、者が…下手な、『鬼』に、やられ、たら…」
鈴也の声は、自然と冷たく硬いものへと変わっていく。鈴也の両親が亡くなった時の、御堂家の反応を思い出していたからだ。
「『伏鬼衆』名門の名折れか？」
鈴也の両親は、１５年近く前、幼い鈴也を連れて本家を出ている。伏鬼衆として才能の片鱗を見せることもできない我が子に、普通の生活をさせようとしたと聞かされている。だが、名門としての体裁を守るため、落ちこぼれの鈴也を両親もろとも放逐したのだと、鈴也自身は思っている。厳しい周囲の目に、両親が耐えかねたのかもしれない。詳しいことは聞かされなかったが、本家を出た両親は「落伍者」としてひどく迫害されたはずだ。それぐらいやってもおかしくない家だった。
両親と鈴也は本家の目、そしてしがらみから逃れ、ひっそりと暮らし始めた。父は伏鬼以外の仕事を見つけ、細々としながらも平和に過ごしていた。だがその平和は、３年間しか続かなかった。小学校入学を迎えた年のある日、鈴也が鬼に目を付けられたのだ。そして、両親は鈴也を守るべく戦い、その鬼の手にかかって命を落とした。

鬼は本家の人間たちによって撃退され、幼い鈴也は本家に連れ戻された。誰一人、両親の死を悼む人間などいなかった。それどころか葬儀さえ行われず、その死は「家の恥」として隠匿された。
それが、御堂本家の出した結論だったのだ。

「そうよ…御堂の者が、鬼にやられるなんて、あってはならない、事なの！」
貴子は、少し逡巡してから言った。手にしていた白木作りの小太刀を、鞘のまま鈴也に突きつける。少しは息が整ってきたらしい。
「いくら『はぐれ伏鬼』を気取っても、鈴也がやられたら御堂の名に傷がつくわ」
鈴也は心の中で「望むところだ、傷だらけになればいい」とつぶやいた。当然、貴子に聞かれたら面倒なので声には出さない。
もったいないな、と鈴也は思った。貴子はせっかく美人に生まれたのに、御堂の家の事となると途端にヒステリックになる。名門に生まれながら、低い能力しか持たない鈴也をなじる時、あるいは自分の能力を誇らしげに語る時、彼女の顔は鈴也の苦手な顔になる。
(御堂の家の奴らと同じ顔してる…)
「何を、じろじろ、見てるのよ…？」
「…別に」
「……そう」
貴子はもはや語る言葉もない、とばかりに、手に持っていた小太刀を構える。鞘を払わないのは従兄妹としての情か、それとも刃を使うまでもないということか。いずれにせよ、貴子が本気で攻撃の意思を見せたことに、鈴也は軽い衝撃を受けていた。
(貴子も、あいつらと同じなのか…？)
両親を失い、御堂家の離れで孤独に暮らしていた10年間。その間、自分から鈴也に声をかけてきたのは貴子と、1人の使用人の女性だけ。かけてくる言葉はきつくても、自分に構ってくれる貴子の存在は、鈴也にとって救いだった。その彼女が、今は自分に武器を

向けている。鞘のままとはいえ、危険なことに変わりはない。
「これ以上、１人で伏鬼を続けるつもりなら、手加減しないわよ！！」
「っ！！」
自分の声を合図にするかのように、貴子が前へ跳んだ。鋭い踏み込みで相手の懐へ飛び込み、急所へと確実に小太刀を打ち込むのが、貴子のスタイルだ。スピードを生かすため、小太刀という小ぶりな武器を使っている。腕力のなさをハンデではなく、逆にメリットにしているのだ。
鈴也からすれば、完全に虚を突かれたというしかない。
貴子は心の中で快哉を叫ぶ。傷つけるつもりはない、ただ鳩尾に突きを打ち込み、鈴也の動きを封じるだけだ。身構える前の鈴也に一撃を加えられる、絶妙のタイミング。
（もらった！！）
ただし、貴子のコンディションが万全だったなら、の話だが。
「えっ！？」
叫んだのは、鈴也ではなく貴子だった。
鈴也との鬼ごっこで体力を使い果たしていた貴子の足は、思い通りには動いてくれなかった。踏み出した右足がふらつき、軸にしていた左足に引っかかる。つんのめる上半身。だが、それを支えるはずの右足はまだ地についていない。
さきほどまでのキリッとした表情はどこへやら。バランスを崩し、慌てふためく貴子。
「あっ……きゃあ！！」
「うわっ！！」
遅まきながら身構えようとしていた鈴也からしても、その動きは予想外。自分に攻撃してくるはずの貴子が、体ごと突っ込んでこようとは…。
どしゃ。
貴子と鈴也は、もつれあったまま地面に倒れ…。

「いって…何やってんだよ、貴子…」
もつれあって転ぶということは、1分の隙もないほど密着しているということだ。そして、鈴也が顔を起こすと、そこには巫女装束に包まれた柔らかなふくらみが。ふにょ、という感触を顔面に感じると同時に、鈴也は自分の置かれている状況を理解した。
「きゃあああ！！　何やってんのよ鈴也ぁ！！」
次の瞬間には、思い切り頬をひっぱたかれていた。
「理不尽にもほどがある…」
じんじんと痛む頬をなでさすりながら、なんとか貴子の下から這い出る鈴也。まあ、役得の代償と思えば、安いものだったかもしれない。鈴也の頬が赤いのは、決して叩かれたからだけではなかった。

「こほん」

咳払いをしたのは、鈴也か貴子か。それとも、両方だったかもしれない。
「まあ、アクシデントだ。気にするな」
鈴也は務めて冷静に言った。自分の胸元を隠すような姿勢のまま、真っ赤な顔で睨んでくる貴子から、つい、と目をそらす。
「あんたは、ちょっとくらい気にしなさいよ…」
そんな貴子のつぶやきも、鈴也には届かなかった。
「ちょっと、聞いてるの！？」
悔しいような腹立たしいような色をにじませて、貴子が続けるが、鈴也はあさっての方向を見たまま。その視線の先には、綺麗に剪定された植え込みがある。
「……貴子、あれ……」
鈴也の視線は、植え込みの奥に向いていた。そこには、すらりとした人影が。
「何よ……って、あれ、誰かいる！？」
こんな夜中に外をうろうろしているのが、ただの人間であるはず

がない。
人影が、音もなく動いた。植え込みを避けるように回り込んで、鈴也たちのいる通路に、するりと現れた。
月明かりの下、漆黒の衣に身を包んだ人影は、人外の美貌を備えていた。
腰まで届く、真っ白な長髪。透き通るような白い肌の中で、ただ唇だけが血のように赤い。いや、良く見るとその瞳も、深い紅の色を宿している。
スッ…と、静かに人影が手を上げた。精緻を極めた彫刻を思わせる、白磁のような繊手が、ゆっくりと鈴谷に向けられる。
「来い」
人影が、静かに告げる。
その声を聞いて、初めて貴子は人影が女性であることに気がついた。体型を見れば一目瞭然だったのだが、あまりに異様な美貌を前に、気が回らなかったのだ。
その直後、女の言葉が鈴也に向けられたものであることに気づき、貴子は狼狽する。
「鈴也、やめなさい！」
声に釣られるように足を踏み出した鈴谷に向かって、思わず貴子は叫んでいた。

1（後書き）

文字数の都合で、半端なところで切れました。

2

　鈴也はただ綺麗な女の子に惹かれているだけだと思っているに違いない。だが、あの女はそんな生易しい存在ではない。全身を刺すような鬼気を発しているのが、なぜ判らないのか。

「その女から、離れなさい！」

　重ねて叫ぶが、鈴也の足は止まらない。そのとき、鈴也の前に立つ女が、ゆっくりと息を吐いた。まるで、ため息をつくように。

「ああ…やっと見つけた…」

　涼やかで、大人びた声だった。血のように赤い唇からこぼれる声は、同じ女である貴子さえ、思わずゾクリとするなまめかしさを持っていた。これは、まずい。

　そう思ったときには、鈴也と女の距離が詰まっていた。

「離れて！　その女は……」

　間違えるはずもない。人並みはずれた美貌だけではなく、気配が人間のものではないのだ。鈴也はそれに気づく間もなく、女の鬼気に打たれて身動きもできなくなってしまったに違いない。

　だが次の瞬間、鈴也はこともなげに言い放った。

「鬼だろ、おまえ？」

「そうだ」

　実にあっさりしたやりとりだった。聞いている貴子が呆気にとられたほどだ。が、貴子はすぐに顔を真っ赤にして怒りをあらわにする。

「ちょっと鈴也！　何をのんびりしてるの！」

　鬼だとわかっていて、なぜ鈴也は何もしないのか？　伏鬼の名門たる御堂の者の態度ではない。少なくとも、その名に誇りを持っている貴子からすれば、鈴也の態度は見過ごせるものではなかった。

　もっとも、見過ごせない理由はそれだけではないのだが…それを声高に言うのは、貴子としては抵抗がある。

「刀を抜きなさい、鈴也！」
そう言いながら、貴子は素早く小太刀の鞘を払う。さっきはみっともなく転んでしまったが、本物の鬼が目の前にいるとなるとそうはいかない。精神力と怒りと、ほんのちょっとのモヤモヤした気持ちを活力源に、貴子は猛然と女に突進していく。
「鈴也から離れ…じゃなかった。散りなさいっ！」
もう鬼ごっこの疲労から回復したのか、貴子の足取りはしっかりしたものだった。女と鈴也の間を割るように滑り込むと、そのまま構えた小太刀を一閃する。
「あ、おい…！」
キン、と澄んだ音が辺りに響いた。
小太刀が鬼の皮膚を切り裂いた音ではない。その証拠に振り抜いた小太刀の刃は、根元からぽっきり折れていた。
「なっ…！？」
「おお、すげぇ」
「何を感心してるのよ！」
得物を折られた衝撃から、貴子は一瞬で立ち直った。間の抜けた鈴也の声が、貴子を苛立たせる。
「後にしろ」
とん、と女が貴子の肩を押す。
「きゃっ！」
それだけで、貴子は勢い良く地面に転がった。いったいこの女は、どれだけの膂力を秘めているのか。
だが鈴也は、そんな事はまったく気に留めていなかった。貴子の着物の襟元が大きく開き、胸の谷間がしっかりと見えてしまっていたからだ。いくら名門の家に生まれた伏鬼衆とはいえ、これでも鈴也は思春期の男の子なのだ。露出度ゼロの超絶美女よりも、胸元全開の幼馴染に目を奪われたとして、何の不思議があろうか。
「まだ、上があったか」
鬼が抑揚のない声でつぶやいた。

「ちょっと、ぼーっとしてないで手伝いなさいよ！　それでもあんた、御堂の…」
鈴也に遅れること十数秒、初めて貴子は気づく。何やら、自分の胸元がスースーすることに。その間、鈴也の視線がずっとそこに注がれていた事にも、遅まきながら気がついた。
「きゃあああああああああ！！！」
闇をつんざく貴子の悲鳴。次の瞬間、貴子の鋭い視線が鈴也を貫く。
「なに見てんのよ！！」
「わっ、落ち着け貴子！　相手が違うだろ！」
慌てて襟を深く合わせて立ち上がった貴子は、折れた小太刀をぶんぶん振り回しながら鈴也に突っかかっていく。が、その小太刀は、横合いからするりと伸びてきた白い手につかまれた。
「離しなさいっ！」
裂帛の気合をこめて、貴子は鬼の手を振り切ろうとする。だが、鬼は掴み取った貴子の腕を巧みにひねり上げる。痛みに顔をしかめながらも、空いた左手で拳を作り、鬼の顔面を狙う。
「このおっ！！」
「…うるさい…」
わずらわしそうに、鬼は貴子の左手をも受け止め、背後から腕ごと抱きこんでしまった。じたばたともがく貴子を軽々と持ち上げると、そのまま朱色の袴に手をかける。
「下を剥いだらどうなるのか、見せてみろ」
鬼の言葉は、鈴也に向けられていた。
「はぁ……？」
「ちょ、ちょっと！　あんた何するつもりよ！？」
不吉な予感に、貴子の血の気が引く。
鈴也はわけがわからないまま、何となくドキドキしながら事の成り行きを見守るのみ。
「見せろ、人間の男。その極上なる精の極地を」

鬼は鈴也に語りかけながら、貴子の袴をつかんだ手に力を込める。
鈴也はその段階になって初めて、鬼が何をしようとしているのかを理解した。
（こいつ、俺を欲情させようとしてやがる！！）
人間の精気は、欲情すればするほど質が高まるという。貴子の服を剥ぐことで、鈴也を興奮状態に導く事こそが、この鬼の目的だ。
鈴也自身にとっては身の危険、貴子にとっては…まあ、いろいろな危険が迫っている。にもかかわらず、鈴也は貴子の袴から目が離せない。しつこいようだが、鈴也は思春期の男の子なのだ。
「嘘でしょ！？　ちょっと…いやーっ！　やめてやめて、やだーっ！！」
袴をつかんだ鬼の手が、無造作に動いた。
びりぃぃぃっ！！
「あ」
鈴也の間抜けな声。
引き裂かれ、ぼろ布のようになって鬼の手にある朱色の袴。
なぜかはだけている貴子の着物。
そして、その隙間から覗く下半身…というか、真っ白な下着。
「きゃあああああああああああああああ！」
そして貴子の絶叫。
「見るな、見るな見るな見るなーーーっ！！」
わめきながら、じたばたともがく貴子を、鬼は無造作に投げ捨てた。
「へ？」
先ほどの鈴也よりさらに間抜けな声を出す貴子には目もくれず、鬼が鈴也に近づいていた。
「ああ…もう限界だ」
がしっ、と鬼が鈴也の顔をつかんだ。これはもう、抵抗するだけ無駄だろう。鈴也には、貴子を片手であしらうような鬼をどうにかする術はない。

「えーと…できれば死なないように、よろしく頼む」
せめて命ばかりは。
「了解した」
「ちょっと鈴也、何言ってんのよ！！」
貴子が慌てて立ち上がり、ずんずんと歩み寄ってくる。
「馳走になる」
そう言うと、鬼は鈴也に顔を近づけた。不穏な気配を感じた貴子の足が速度を上げる。
「ちょ、や、待ちなさいよぁあんた！」
だが、鬼は貴子より素早かった。貴子の手が鈴也に届く前に、その血のように赤い唇が、鈴也のそれと重なっていた。
「あーーーーーっ！！！」
絶叫したのは、鈴也ではなく貴子だった。
「何してくれてんの！　私…それ、私の…じゃなくて、離れなさい、誰に断って鈴也に……」
何やら錯乱して叫び散らしている貴子の声を、鈴也はどこか遠くに聞いていた。いや、むしろ遠ざかっているのは自分の意識か。
(う…力が抜けるなぁ…精気を抜かれるとこうなるのか…いや、しかし柔らかいな、唇…って、それどころじゃないか。そういえば、貴子って和服でもパンツはくんだな。あ、でもブラジャーはしてなかったけど…それにしてもこの鬼、美人だなぁ…)
朦朧とする中で、鈴也の思考は支離滅裂だ。
(あれ、だんだん気が遠くなってきたぞ……まぁいいか、なんか気持ちいいし、このまま寝てしまおう)
後ろでは、まだ貴子がぎゃーぎゃーとわめいている。腕を引っ張られる感覚があるので、鈴也を鬼から引き剥がそうとしているのだろう。
１０秒ほども吸われただろうか。鬼の唇が、ゆっくりと離れていく。
「ふぅ……なんとも極上な」

美女との口付けの余韻に浸る余裕もなく、今にも倒れそうな鈴也。その体を、鬼はしっかりと支えている。貴子にはその姿が、「これはもう自分のもの」と主張しているようにさえ見えた。

「鈴也！　鈴也、しっかりしなさい！」

がくんがくんと揺さぶられても、鈴也の意識はぼんやりしたままだ。そして、鬼が鈴也を離す気配もない。

（あ～…もういいや…疲れた…寝ちゃえ）

「ちょっとあんた、鈴也を離して！　返しなさいよ！　聞いてるの!?　ねえ!!」

ヒステリックな、あるいは必死な貴子の声を遠く聞きながら、鈴也は自分の意識を手放した。

3

目が覚めたとき、鈴也は自分の部屋にいた。
貴子の前で倒れてしまったのだから、御堂の本家に連れ戻されたかと思ったが、間違いなく自分の部屋だ。目の前のラックに並んだ、お気に入りのお笑いDVDを見て確信する。厳格で知られる伏鬼の名門・御堂本家の邸宅に、こんなものあるはずがない。たぶん。
ここは5年ほど前から、鈴也が住んでいるマンションの一室。2LDKで、以前は両親もいたが、今は鈴也が1人で住んでいる。ちなみに父親が買ったこの一室を、御堂本家が処分しなかった理由は知らない。
「起きたか」
「うわっ！」
なんとなく現状を把握しつつあった鈴也は、突然かけられた声に驚いて上半身を起こす。目の前にいたのは、絶世の美女だった。鈴也の記憶が正しければ、この美女は鬼だ。どうやら、昨晩のことは夢ではなかったらしい。
「えーと…名前、聞いたっけ？」
「紫炎だ、人間」
短く答える鬼。
さて、何から聞けばよいものやら。とりあえず…
「人間は俺以外にもいっぱいいるから、名前で呼んでくれ。鈴也だよ」
「理解した」
せっかく教えたんだから、呼んでみてほしかったが、それは後回しでいい。何よりも、まず状況を知りたかった。
「よし。じゃあ確認だ。あれからどうなった？」
「質問の意味がわからない」
「貴子はどうした？」

「誰だそれは」
　まともな返事が返ってこない。それにしても昨晩の出来事の中で、貴子の存在をこうまで無視するとは大胆な鬼だ。貴子の方は必死で突っかかっていたし、何より彼女は伏鬼衆。紫炎からすれば天敵といっていいはずなのに。
「まあいいか。で、どうやってここへ？」
「歩いて」
「いや、そうじゃなくて」
「？」
　小首をかしげる紫鬼。あ、かわいい…という感想は、口には出さなかった。
「何でお前がうちにいる？」
「ここが鈴也の家だから」
「いや、ちょっと意味がわからないぞ」
　紫炎の受け答えは不明瞭で、鈴也は困惑する。が、どうやら彼女は自分を家に連れ帰ってくれたようだ。だが、どうやって？　貴子が紫炎に、素直に鈴也の家を教えるとは思えない。もちろん、鬼に連れ去られる鈴也を見逃すとも思えないが、まさか…。
「昨日、俺と一緒にいた女を覚えてるか？　彼女は？」
「うるさい雌だった」
「雌って言うな。あと感想を聞いてるわけじゃない。で、どうしたんだ？」
「知らない」
「…えーと、お前が俺を連れてこようとするとき、あいつは何か言ってたか？」
　正直、めんどくさい会話だ。だが、鈴也は我慢強くたずねる。
「聞いてなかったからわからない」
「ん～…まあ、無事そうだからいいか。で、お前はなんでこの家がわかったんだ？」
　鈴也が、一番疑問だったことをたずねると、紫炎はきょとん、と

した表情を見せる。整いすぎるほどに整った顔立ちには、あまりに合わない表情だった。
「『契約者』だからだが」
抑揚のない声ではあったが、どこか呆れたような雰囲気を感じる。鈴也としては、そんな反応をされる筋合いはないのに。
「『契約者』？　鬼が人間と結ぶ、あの『契約』か？」
ろくに指導を受けていないとはいえ、鈴也も伏鬼衆のはしくれ。鬼にまつわる知識も、ある程度は持っている。自分の頭の中の引き出しをひっくり返して、『契約』に関する記憶を引っ張りだす。
鬼の中には、定期的な精気の供給を条件に、人間と共生関係を結ぶ者がいる。特定の相手の精気を鬼が気に入った場合や、相手に対して執着を示した場合、その『契約』は成立するという。
「俺、そんなの結んだ覚えないんだけど」
確か昨日は、一方的に精気を吸われて気絶しただけだ。『契約』を結んだ覚えも、何かの約束を交わした覚えもまったくない。
「確かに『契約』した」
「待て待て、ちょっと、本気で覚えがないんだ」
そもそも鬼との『契約』なんて、どうやって結ぶかも知らないのに。と、そこに思い至ったとき、鈴也の胸をいやな予感が駆け抜けた。
「紫炎…念のために聞くが、『契約』ってどうやって結ぶんだ？」
「口約束して同意の上で精気を吸う」
鈴也が思っていたより、だいぶ手軽に結べるようだ。が、どう考えても『契約』を約束した覚えはない。
「鈴也が私に『死なないように守れ』といい、私は『了解』した。その後に私は鈴也の精気を吸った。『契約』完了だ」
「ちょっと待て！」
慌てて紫炎を静止。まったく記憶にないセリフが混じっている。
鈴也は昨日自分が発した言葉を、できるだけ正確に思い出そうと頭をひねる。紫炎と自分が交わした会話は…

――えーと…できれば死なないように、よろしく頼む。
――了解した。
「…あれ？　ちょっと待てよ」
　あのセリフは、「精気は死なない程度に吸ってくれ、よろしく」という意味で言ったつもりだった。だが、言葉だけ抜き出してみると、確かに紫炎の言うように「死なないように守れ」という意味にも受け取れる。
「日本語って難しいなぁ…」
「昨日の雌も、私の知らない言葉を叫んでいた」
　紫炎が小さく頷きながらつぶやいた。感情に任せてわめきちらす貴子の言葉が聞き取れなかったのかもしれない。
「…それは覚えなくていいよ」
「『ぶらしてないのに』とか『ぱんつみられた』とか」
　ちょっとした頭痛を覚えながら、改めて鈴也は紫炎を見る。見れば見るほど美しい。が、恐らくはとんでもない力を持っているのだろう。それぐらいは、伏鬼衆の端くれである自分にでもわかる。
　ただ、自分と契約した理由まではわからないが。
「まあ、死ななかったからいいけどさ…でも、お前はよかったのか？　俺なんかと『契約』しちゃってさ」
「問題ない。ようやく、私の口に合う精気が見つかったのだ」
「どういうことだ？」
　紫炎の端的な言葉を必死で要約すると、こういうことだ。
　ものすごく大雑把に、鬼を人間に当てはめて言えば、紫炎はとんでもないグルメなのだ。それも嗜好の問題ではなく、体質的に高い質の精気しか受け付けないという。これまで人間界をうろつきながら探し回ってみたものの、彼女の眼鏡に叶う精気の持ち主はいなかったらしい。
　そんなある夜、突然とてつもない芳香が彼女の鼻孔をくすぐった。そのタイミングは、はずみで貴子と密着した鈴也が、うっかり興奮してしまった瞬間と一致していた。紫炎はすぐさま香りをたどり、

2人がいた公園までやってきて――鈴也と出会ったのだ。
鈴也の全身から沸き立つ精気を見た瞬間、紫炎は彼との『契約』を望んだという。そこへ鈴也自身から『契約』の申し込み（誤解ではあるが）があり、迷わず受諾した。
「えーと…つまりは、貴重な食料だからゆっくり大事に食べるってことか？」
なんとなく複雑な気分で、鈴也は自分の置かれている状況を整理した。
こんな美女に見初められたのは光栄といえなくもないが、男ではなく食料として、という部分が釈然としない。相手が鬼であればやむをえないのか。
「てことは何だ、これから先、俺はちょっとずつ精気を搾り取られていくわけか…」
「死なない程度なら良いと言った」
「いや、まあ、言ったけどさ」
一回きりと思ったから、という言葉を鈴也は飲み込んだ。
体がもつかな、という心配こそあるが、『契約』したこと自体については特に気にはならなかった。伏鬼衆としてのプライドなど、落ちこぼれの自分には関係のない話だし、目の前の鬼に対する恐怖もなぜか感じなかった。
と、そのとき。突然けたたましく鈴也の部屋のインターフォンが鳴り響いた。子供が連打しているかのような鳴らし方に心当たりがある。というより、この部屋を訪ねてくる人間など、他にいないのだが。
「げ……やっぱ来やがった」
『鈴也、いるんでしょ！？　開けなさい！！』
インターフォンだけでなく、ドンドンとドアを叩く音まで響きだす。近所迷惑になることを恐れ、鈴也は重い腰を上げた。

4（前書き）

ちょっと短め。

ここでしばらく様子を見て、続きを書いてみたいと思います。

4

「おい、ちょっと静かにしてくれよ。周りに迷惑だろ…借金取りじゃあるまいし」

　ぶつぶつ言いながら、鈴也は玄関のカギを開ける。その瞬間、ドアを引っぺがすかの勢いで開けて、貴子が玄関になだれ込んできた。手には風呂敷に包んだ重箱を持っている。

「鈴也、無事なのね！？」

　貴子は鈴也の顔を見るなり、その襟首をつかみ、顔を近づけてくる。無事じゃなかったら、２人して後ろに倒れてしまうほどの勢いだ。こういう時は、鈴也も貴子が自分を心配してくれているのではないかと思う。

「おかげさんでな。どうしたんだよ、珍しくうちまで来るなんて」

　不思議なことに、貴子が突っかかってくるのも、御堂の家に連れ戻そうとするのも、鈴也が伏鬼に関わろうとしたときだけなのだ。自宅や学校にいる時、さらには刀を持っていないときには、特に干渉してはこない。

「あんたねえ…自分の従兄妹が鬼に連れ去られたのよ！？　気にして様子を見に来るのは当然でしょうが！！」

「ん…それもそうか」

「あと、ついでに…はいこれ」

　ぐい、と鈴也に重箱を突きつける貴子。どうやら中身はお弁当のようだ。

「どうせロクなもの食べてないんでしょ」

　慌てたようにまくし立てる貴子。何やら顔が赤い。まあ、普段悪し様に言っている鈴也を心配している事に対して、照れ隠しのようなものだと鈴也は認識する。

　いずれにせよ、口ではいろいろ言いながら、何かと世話を焼くのが貴子という従兄妹の性分だ。これだから鈴也も、御堂家の一員と

はいえ貴子を突き放すことができない。
と、そこへ。
「鈴也」
玄関から一向に戻らない鈴也の様子を伺うように、紫炎がぴょこんと顔を出す。『契約』自体が誤解とはいえ、彼女には鈴也を守る義務がある。一方、貴子は紫炎の顔を見るなり、つかみかからんばかりの勢いで、彼女に歩み寄っていく。
「あ、あんた！　なんでここに！！」
「敵襲か、鈴也？」
「ちょっと、無視するんじゃないわよ！」
どうせこれから、貴子には状況を説明しなければならないのだろう。鈴也は、どう話せば自分への被害を減らすことができるのか、それだけを考えながら、リビングへと戻っていった。

「はあ！？　『契約』したぁ！？」
リビングルームに、貴子の声が響き渡る。１０畳ほどのスペースで、家具がほとんどないせいか、妙に音が反響する。驚きと怒りで言えば、７：３で驚きが勝っている。というより、まだ怒りの方向に意識がシフトしていないだけだろう。
「うん、そうらしい」
貴子が持ってきた弁当をかきこみながら、鈴也はこともなげに頷いた。いろいろ考えてみたが、事実だけを端的に述べることにした。紫炎は貴子にも弁当にも興味がないらしく、鈴也に寄り添ったまま黙って座っている。
「そうらしいって、あんたねぇ…！」
じょじょに怒りのボルテージが上がってきた気配を感じる。気のせいか、貴子の長い髪がざわざわと揺れているようにさえ見える。
「そんなつもりはなかったんだけど、成立しちゃったらしいし…あ、これうまい」
「ほんと？　それはちょっと自信あり……ってちがう！！」

「忙しい奴だな。しちゃったものはしょうがないだろ」
「しょうがなくない！！」
ドン、とテーブルを叩き、貴子は鈴也に詰め寄った。
「いい？　いくらへなちょこでも、鈴也は伏鬼衆なの。それが鬼と『契約』するなんて、漁師が熱帯魚を飼うようなものでしょ！」
「それは別に個人の自由じゃないか？」
ポツリとつぶやく鈴也。貴子も自分のたとえがおかしいことに気づいているのか、うっすらと頬が紅潮しているものの、気にせず続ける事にする。
「そんな事はいいの！　鈴也、仮にも御堂家に生まれた伏鬼衆の一員が、鬼と『契約』だなんて恥ずかしくないの？　昨日だって、あんな、キ、キスとかしちゃって！」
思い出して苛立ちが募ったのか、貴子はだん、だん、と机を叩く。
「いや…あれはただ、精気を吸うための手段だろ？」
「この女はそうでも、鈴也はどうなのよ！　デレデレしちゃってたんでしょ、どうせ！」
「う……」
鬼とはいえ、これだけの美人とキスをしたのだ。鈴也としても心中穏やかではないが、それを素直に口に出すのは危険な気がした。
「待てよ、論点がずれてる。要するに、お前は俺が紫炎と戦わなかったことを責めてるんだろ？」
「あと、鬼にデレデレしてたことも責めてるわ」
「それは誤解…というか、冤罪だ」
話が進まないので、いったん言葉を切って仕切りなおす。
「戦ってどうにかなるとは、とても思えなかったんでな。お前を片手であしらうようなやつに、俺がどうこうできるわけないだろ」
ちらり、と鈴也は自分に寄り添う紫炎を見る。つられてそちらを見た貴子の眉が、きゅっと吊り上った。
「じゃあ何で、そんなにべったりくっついてるのよ、その女は」
「なんで、と言われてもな…おい、お前も何とか言えよ」

鈴也の言葉を受けて、紫炎はやっと目を開ける。めんどくさそうに眉をしかめたままではあったが。そして、ようやく口を開いたかと思うと、鈴也と貴子の思いもよらぬ言葉を吐き出した。
「私は鈴也なしでは生きていけない体になったんだ」
「はああああ!?」
貴子の声が、またしてもリビングに響く。叫んだ後、呆然と鈴也を見ると、こちらはげんなりとうなだれている。
「なんでよりによって、そこだけ言うかな…」
「ちょっと鈴也、どういうことよ!! まさか…」
「鈴也ほどの精気、初めてだ」
「性器って、あ、あ、あんた…」
「待て、何か2人のニュアンスが違ってる!」
会話の流れが怪しくなってきたので、慌てて鈴也が割って入った。

4（後書き）

少しは読んでもらえているようなので、
もう少し続けてみようかと思います。

5（前書き）

主人公が動かない…ヒロインも動かない…

あ、ヒロインって貴子のことじゃないですよ。

5

「話はわかったわ」
貴子はお茶を一すすりしてから、ため息とともに言った。お茶は自分で淹れた。勝手知ったる鈴也の家、というやつだ。あえて紫炎の分は用意しなかったのだが、元よりお茶など必要としない紫炎にとっては、何の意味もないらしい。
嫌がらせが功を奏しなかったからなのか、貴子の表情は、納得という言葉からは程遠いが、とりあえずは誤解が解けただけでもよしとしよう。と、鈴也は小さく息を吐く。
「でも！」
だん、と貴子がテーブルを叩いた。気を抜きかけていた鈴也は、反射的に背筋を伸ばす。
「私はぜんっぜん納得なんかしてないんだからね！！」
「まあ…そうだろうな」
本来、鬼を討伐する立場である伏鬼衆が、こともあろうに鬼の契約者になる。それだけでも異例中の異例であり、特に名門といわれる御堂家ではありえない。他の伏鬼衆に知られれば、笑いものになるどころではすまないだろう。
「ほんとに、どこまで御堂の名を貶めれば気が済むのよ…」
目の前にいるのが、貴子以外の御堂家の者なら、その言葉の後に「お前たち親子は」と続くところだ。だが、貴子は鈴也の両親を悪く言ったことは一度もない。あくまで彼女が攻撃的なのは鈴也相手のみ。それも、伏鬼に関わるときのみだ。
要は、才能のない自分が伏鬼に関わることで、御堂の名が汚れることを恐れているのだと、鈴也は解釈している。
「そんなに言うなら、俺を御堂から追放すりゃいいじゃん」
鈴也はめんどくさそうにつぶやいた。
そもそも、本家を飛び出した時点で鈴也は御堂の名を捨てようと

思っていた。もともと御堂の家に未練はないし、そのネームバリューに頼る気もない。適当に母方の旧姓でも名乗ればいいと考えていたのだが、何故かそれは許されなかった。

「それは…名家には名家の体裁ってものがあるのよ。へなちょこだからって放り出したりすれば、それはそれで家の名前に傷がつくの」

言い分もわからないではないが、どこか言い訳がましい。

何せ、鈴也に御堂の名を捨てさせなかったのは、貴子自身なのだ。本家の後継者としての権限をフル活用して、居並ぶ御堂家の面々を説得（だと鈴也は聞いている。それ以上のことは知らない）した。

もちろん、その理由は鈴也に伝えていない。伝えられるわけないでしょ、と思っている。

「だから！　御堂家の次期頭首として、私はあんたを本家に連れ戻さなきゃいけないの」

まるで自分に言い聞かせるように、貴子は高らかに宣言する。その剣幕に、これまで閉じていた紫炎の切れ長の目が、すぅ、と細く開いた。

「な…何よ」

警戒心もあらわに、貴子が身構える。睨まれただけで、体が強張るのがわかった。

「お前…うるさい」

紫炎はそれだけ告げると、鈴也の顔を掴み、自分の方に向けた。

文字通り人間離れした美貌の思わぬ接近に、鈴也も心臓の鼓動が抑えられない。

ドギマギしつつも身動きがとれない……とらない鈴也が、若干の期待を込めて紫炎の真っ赤な唇を見つめている。だが、この先に起こる出来事を予測していたのは、鈴也だけではなかった。

「すとーーっぷ！！」

するり、と2人の唇の間に滑り込んだのは、貴子の右の手の平だった。鬼の挙動に対してインターセプトを成功させるあたり、貴子の反射神経もかなりのものだ。もっとも、その行為をなしえたのは

反射神経だけではなかったのかもしれないが。
「んむ」
紫炎の不満そうな声と共に、ぶちゅ、と貴子の手の平と手の甲に、柔らかい感触が触れる。手の平が紫炎で、手の甲が鈴也の唇だ。
「！！！」
自分でやっておいて、慌てて手を引っ込める貴子。うっすらと頬を染めながら、ぼうっと手の甲を見つめている。ちょっと残念そうな鈴也の顔は、視界に入っていないらしい。
「何をする」
「何をする、じゃないわよ！！　鈴也も何をされるがままになってんの！？」
我に返った貴子が叫ぶ。そんな状況でも、鈴也の唇が触れた手の甲を、そっと左手で押さえたりしているのだが、鈴也からはテーブルが邪魔で見えない。
「だから言ってるじゃん、俺の力で、こいつに逆らえるわけないいんだって」
鈴也のどこかあきらめきった物の言い方に、貴子はカチンとくる。
「嘘言いなさい！　この鬼とまたキスできると思って、鼻の下伸ばしてたのは誰よ！？」
貴子の言葉に「無実だ」といえるだけの根拠が、鈴也にはなかった。なので、抗弁はするだけ無駄と判断する。
「ま、まあそれはそれとして、だ…」
鈴也にできるのは、話題の転換ぐらいのものだ。このままでは一向に話が進まないのも事実。というより、元から平行線を辿っているわけだが。
「俺としては、損な取引じゃないんだよなぁ」
頭の後ろで手を組んで、こともなげに言う鈴也。カッと見開かれた貴子の目に怯えつつも、おずおずと言葉を続ける。
「ぶっちゃけ、俺って貴子の言う通りへなちょこだからさ、一人で伏鬼の仕事やるっつっても、やっぱ無理があるわけよ」

「そうね。だから本家に戻って、闘わないで生きればいいじゃない」
鈴也と貴子の間で、これまで何度も繰り返されてきたやりとりだ。
御堂の家にも、直接伏鬼の仕事に携わらない者がいる。アタッカーとしての適正を認められない者、あるいはその力量が伏鬼衆として未熟だと判断された者は、裏方として前線を補佐する役目に就くのが普通だ。情報収集、作戦立案、あるいは政治的な駆け引きなど、直接的に鬼と戦わなくても、できることは山ほどある。
「でも、それじゃアイツに復讐できないだろ」
さらり、と鈴也は告げた。
「忌野童子のこと…まだ諦めてないのね」
忌野童子……それは、かつて鈴也を狙った鬼の名だった。幼く、そして今以上に何の力も持っていなかった鈴也を襲い、両親を殺した仇敵である。貴子は、鈴也がその鬼を追い求めて、伏鬼衆であり続けていることを知っている。だからこそ、どんなに拒まれても鈴也を本家に連れ戻す必要があるのだ。
鈴也の行動が、あまりに危ういがゆえに。
「何度も言ってるけど…私情で鬼に関わるのはやめなさい」
これまでになく真剣な声音で、貴子が告げる。
鬼は、人間の精気を糧としている。そして人間の精気は、感情によって大きく左右される。ちょっとした感情の動きが、鬼に強大な力を与えてしまうこともあるのだ。忌野童子に対して、鈴也の両親がそうであったように。
「感情を昂ぶらせて鬼と闘うことは、悲惨な結果を生むことになるのよ」
貴子は、心から鈴也を心配しているのだろう。腕利きの伏鬼衆だった両親を倒すほどの鬼に挑んだところで、鈴也に勝ち目はない。
「だから、紫炎の力を借りるんだよ、貴子」
まっすぐに貴子の目を見つめながら、鈴也は静かな声で言った。

5（後書き）

またしてもちょっと短いですかね。
感覚がつかめてないです。

6（前書き）

回想です。短いです。

6

その鬼は、突然目の前に現れた。

小学校入学に備えて買ってもらったランドセルが嬉しくて、思わず背負ったまま家を飛び出した時のことだ。背中に感じるずっしりとした重みが、なんとなく大人っぽいような気がして、誇らしげに街中を歩いていた。浮かれた気分が、鈴也の足をいつもより、ほんの少し遠くまで運ばせていた。母親と一緒に行くいつものスーパーの数百メートル先でしかないが、幼稚園児である鈴也の行動範囲からはわずかに外れていた。

「やあ、ぼうや」

突然背後からかけられた声に振り向くと、そこに痩せぎすの中年男がいた。うすよごれたコートを身にまとい、ぼさぼさの長髪がいかにも怪しげ。もし、鈴也が御堂家に相応しい力を備えていたなら、その男が放つ異様な鬼気に気づいたのだろう。だが、その時の鈴也には、単なる中年男にしか見えなかった。

「こんにちは」

礼儀正しく挨拶する鈴也を見て、その鬼はにやぁ…とべたついた笑みを浮かべた。うっすらと覗く歯が、まるで絵本で見たワニのようだったのを覚えている。

「ぼうや、いい匂いだねぇ…いい匂い過ぎて、胸焼けしそうだ」

鈴也には、男の言葉の意味がさっぱりわからなかった。だが、男の口がゆっくりと、笑いをかたどったまま、耳まで裂けていくのを見て、やっと理解したのだ。目の前にいるのが、人間ではないことに。

がぱぁ、と開いた口が、鈴也に近づいた。むせ返るような悪臭が、男の口内から漂ってきた。

（にげなきゃ…たべられる…）

頭で理解していても、足が動かなかった。両親によって徹底的に鬼から遠ざけられていた鈴也は、鬼を見るのも鬼気に当てられるのも初めての経験だったのだ。
「鈴也ぁっ！！」
声の主が誰なのかを確認するより早く、ランドセルが、物凄い勢いで引っ張られた。次の瞬間、鈴也の小さな体は母親によって抱きすくめられていた。
「鈴也、無事かっ！？」
父の声がした。だが、母親の胸にかき抱かれている鈴也からは、その姿は見えなかった。
「くくくく…ようやく整った…」
鬼の声がする。
金属を打ち合うような音が、何度も響く。
父の苦しげな声がする。
母のうめくような声がする。
何が起こっているのか、鈴也には一切見えなかった。
「おかあさん、くるし…」
自分を抱く母の腕は、まるで万力のように固く、びくともしなかった。

びしゃっ。

鈴也の頭に水を掛けられたような感触が伝わった。それが額を伝い、地面にぼたぼたと落ちたとき、鈴也は息を呑んだ。その水が、真っ赤だったからだ。
どさり、と、自分の体が母親ごと地面に倒れこんだ。ぴくりとも動かない母親の脇腹ごしに、さっきの中年男が立っているのが見えた。にぃ…と、耳まで裂けた口が笑っていた。
「ぼうやぁ…やぁっと食べごろの臭いになってきたねぇ…」
父親が、中年男の腕に力なくぶら下がっていた。

「おとうさ…おか…さ…」
かすれるような声が、自分の喉からもれた。
「ん〜…いいねえ…絶望に彩られ、生きる気力を失った子供の精気は。我ながら悪食だとは思うが…やめられないねぇ…」
鈴也の耳には、その声がどこか遠く聞こえていた。何が起こっているのか、まったくわからなかった。
「おいで、ぼうやぁ…」
男は鈴也の体を、母親の腕から引き剥がそうとしていた。鈴也は抵抗することも忘れ、ずるずると母親の体の下から引きずり出された。
母親の背中には、拳大の穴が開いていた。無造作に放り出された父親は、首が千切れかけていた。それでも鈴也には、両親に何が起こったのかを理解できなかった。

男に引きずられたまま、鈴也はぼんやりと動かなくなった両親を見ていた。遠くから駆け寄ってくる、和服姿の一団にも全く目を向けず。
男と和服姿の一団が争い始め、自分自身が地面に放り出されても、鈴也はじっと両親を見ていた。

それから和服姿の一団によって、御堂の本家に連れて行かれるまでの間のことを、鈴也は一切覚えていなかった。
鈴也を襲った鬼の名が『忌野童子』だと知ったのは、それから5年後のことだった。

7（前書き）

ちょっとでも読んでくれる人がいると嬉しいです。

7

リビングルームを、静寂が包み込む。ひく…と、自分の喉がなるのを貴子は感じた。怒り、不安、焦燥…様々な感情が、自分の肉体を思うように動かしてくれない。
「両親の仇を討つのに、仇である鬼を利用しようっていうの？」
貴子は鋭い目つきで、正面から鈴也を見据えた。射すくめるような視線にも、だが鈴也の態度は揺るがなかった。
先ほどから鈴也に背中を預け、暇そうにしている紫炎も、貴子の言葉になんら反応を示さない。
「他に誰か、俺に力を貸してくれる人がいるのか？」
両親を失った鈴也を引き取ったのは御堂本家だが、彼らにできたのは忌野童子を現場から追い払うことだけだった。彼の鬼の行方を追ったわけでも、追撃をかけたわけでもない。
御堂本家が何をしてくれるというんだ。そう鈴也は言外に告げている。
「それは……」
本家での鈴也の扱いを考えれば、貴子が鈴也に返せる言葉はない。
引き取られた鈴也に対する本家の態度は、徹底した『無視』だった。
御堂の家に鈴也などという少年はおらず、忌野童子などという鬼に殺された夫婦もいないものとして扱われた。鈴也は屋敷の離れに放り込まれ、半ば軟禁に近い状態で、１４歳までの時を過ごしたのだ。
目の前にいる貴子と、鈴也の身の回りの世話をしてくれた、ただ一人の使用人を除いては、彼に一瞥さえくれるものはいなかった。
「いいんだ、別に今更、恨んじゃいない」
鈴也の言葉には、まったく感情がこもっていなかった。
「俺はただ…アイツを殺してやりたいだけだよ、貴子」
鈴也の悲壮な決意――それは以前から知っていた。彼の能力を考えると、自殺行為としかいえないその悲願を、貴子もできることな

ら手助けしたいと思う。だが、御堂家の総意として「関わらない」と決定した以上、次期当主とはいえ覆す事はできない。
鈴也が御堂の名を名乗るかどうかとは、議論の次元が違うのだ。
「まあ、簡単には死なないだろ。紫炎が守ってくれるらしいし。そうだろ？」
鈴也が、自分と背中合わせに座っている美女を振り返る。
「話は終わったのか」
感情が希薄なせいでわかり辛いが、どうやら待ちかねていたらしい。紫炎はいそいそと鈴也の正面に移動し、その顔を両手でつかんで、自らの顔を近づけ……
「むぅ…」
「だから待てってつってんのよ！！」
再び貴子の手の平に阻まれた。
ぷく、とわずかに紫炎の頬が膨らんだ。
（やべ、かわいい）
すんでのところで言葉を飲み込む鈴也。
「本当はすごくすごく、すっっっっっっっっっごく納得いかないけど…契約のことは仕方ないわ」
すっ、と手の平を引っ込めて、ややうつむき加減に貴子は言った。
「いや、そもそも貴子の許可って必要ないんじゃ…」
「とにかく！！」
鈴也の反論を、ばん！　と机を叩くことで一刀両断する。
「紫炎とか言ったわね…あんた！！　契約した以上は、ちゃんと鈴也のこと、守るんでしょうね！？」
びしっ、と指を突きつける貴子。だが、紫炎はぷい、とその指から顔をそらす。食事をたびたび邪魔されて、拗ねているのだろうか。
「いちいちムカつく鬼ねぇ！！」
「まぁまぁ。紫炎だって、悪気はないんだって…たぶん」
そもそも、悪気という概念すらないような気もするが、いろいろ怖いのでとりなしておくことにする鈴也。

「あんたも！！」
今度は鈴也にびしっと指を突きつける。
「へ？　俺？」
「この女にとって、キ…キスなんてただの食事なんだから！！　変な勘違いしてんじゃないわよ。わかってんの！？」
「キスぐらい、どもらずに言えるようになれよ」
「うるさいのよっ！！　それより、わかったの！？」
「へいへい」
「それならいいのよ。じゃあ、私は帰るから」
言いたいことだけ言うと、貴子は空になった重箱を引っつかんだ。感情的になっても、きっちり風呂敷に包み直す几帳面さに、鈴也は思わず苦笑をもらすのだった。

鈴也の住むマンションを出たところで、貴子は大きくため息をついた。
御堂家の者が鬼の契約者となった。これは決して小さな出来事ではないし、両親に知れたら大変な騒ぎになるだろう。貴子がこうして時々鈴也の様子を伺うことすら、決していい顔はされていない。「鈴也が御堂の名を汚さないか見張る」という名目で、かろうじて見逃されているに過ぎないのだ。
(まあ、でも…)
どうやら、貴子にとっての懸案事項は、非常に業腹ではあるけれど、あの憎らしい鬼が取り除いてくれるだろう。
貴子が鈴也の伏鬼を……特に、忌野童子への復讐を思い留まらせようとする理由はただ一つ。鈴也の身を案じているからだ。
彼の両親は優れた伏鬼衆だった。その2人が、鈴也をかばいながらとはいえ、なす術もなく殺されるような相手と闘えば、鈴也は間違いなく死ぬ。彼がそれだけの技量しか備えていないことは、昔からわかっていた。元々才能に乏しい上に、ろくな修行も積ませてもらえなかったのだから、当たり前だ。

鈴也が復讐にこだわるのも無理はないと思う。伏鬼という忌まわしい世界を抜け、親子３人で掴んだ小さな幸せを、踏みにじられたのだ。本家に戻りさえしなければ、鈴也がいわれなき迫害を受けることもなかっただろう。

それでも、貴子は鈴也に死んでほしくなかったのだ。鈴也にとって本家は居心地が悪かろう。だが、自分が当主になりさえすれば、そんな空気はなくしてみせる。

そう思って、御堂家次期当主に選ばれるため、全てを投げ打って修行してきたのだから。

(だから…鈴也が無事でいてくれるなら…)

それでいい。と、思おうとしたのだが…。

(あの鬼とは、いずれ決着をつけなきゃいけないわね)

やっぱり、気に食わないものは気に食わないのであった。

7（後書き）

まだお話が進んでいないのでアレですが、
ご意見、ご感想など頂けると嬉しいです。

8（前書き）

気の抜けたアクションシーンをお届けします。

8

　鬼と伏鬼衆という、本来ならば決して相容れない2人が、寂れた裏通りを並んで歩いている。
　鈴也はいつものジーンズとジャケット姿で、手には白木の鞘に収まった刀を提げている。かつて父が使っていて、父の死後、御堂家に保管されていたところを、鈴也が勝手に持ち出した物だ。一方の紫炎は、闇を切り取ったかのような黒い衣をまとっているのみ。
　午後11時。闘う術もなく、闇を恐れるだけの無力な人間は、家に閉じこもっている時間だ。もっとも、家のセキュリティーをどれだけ厳重にしたところで、鬼に対抗できるというわけではないが。単に人間は、「鬼に目をつけられないため」だけに閉じこもるのだ。
「いないなぁ、鬼…」
　ぽつり、と鈴也がつぶやいた。
　仇敵である忌野童子の手がかりをつかむため、あるいはおびき寄せるため、鈴也はフリーの伏鬼衆として活動を続けている。かれこれ3年ぐらいになるが、その間に倒した鬼の数は、優秀な伏鬼衆――それこそ貴子あたりが聞いたら、鼻で笑われそうな数だ。それも、大した力を持たない小物ばかり。
　まず、鈴也には鬼の存在を感知する術がない。ただ闇雲に夜道を歩き、出会った鬼と闘うという、非常に効率の悪い方法をとっている。もちろん、好きでそんな作戦を取っているわけではないが。
　次に、力の強い鬼を倒すほどの技量もない。闘ってみて、敵わないな、と思ったら防御に徹し、隙をついて逃げる。そうやって、これまで生き延びてきた。
　貴子が口を開くたびに「伏鬼をやめろ」というのも、無理からぬへなちょこぶりだ。
「鈴也は無力に加えて、変だ」
　紫炎が、呆れたように言葉を紡ぐ。高級な鈴でも鳴っているかの

ような声だった。それだけに、地味に傷つく。
「言葉はもう少しオブラートに包んでくれ。それに、異常偏食者に言われたくないぞ」
「おぶらーと、とはなんだ？　形のない言葉をどうやって包む？」
これ以上ないくらい真剣に問い返され、鈴也は大きくため息をついた。万事がこの調子なのだから、意思の疎通が取れているのかも怪しいものだ。
「…それよりさぁ、お前、他の鬼の気配を感じたりできないの？」
めんどくさくなって、話題を転換。
「この付近に二人いるが」
「できるのかよ。で、どっち？」
すい…と、ほっそりした白い指を、後方に向ける紫炎。
「さっき通り過ぎた」
「早く言えよ！！　戻るぞ」
くだらないやりとり。それでも、一人ではできないことだ。奇妙な充足感を胸に、鈴也は紫炎の示す方向へと走った。

目的地は、古びたビルが立ち並ぶオフィス街だった。獣のような臭いが充満しており、いかに感知能力の低い鈴也とて、ここまで近づけば異常に気がついただろう。
「何だあれ…熊？」
二人の視線の先にいたのは、鈴也の言うように熊に似た鬼だった。ただ、体毛はなく全身が鱗のようなものに覆われているので、一目で熊ではないとわかる。人間より一回り大きな体躯と、鋭い爪。額からは鬼の象徴たる角が、ちょこん、と生えている。
（あれ？　そういえば、紫炎って、角ないじゃん…って、そんな場合じゃないか。後で聞いてみよう）
改めて、鈴也は意識を鬼に向ける。鬼はこちらに背中を向け、うずくまっている。時々頭が動くのは、恐らく何かを食べているからだろう。

「鬼って、人間の肉、食べるんだっけ？」
その場に似つかわしくない、呑気な口調で鈴也がたずねる。
「私は食べない」
「いや、お前の話じゃなくて…まぁ、お前も鬼だけど…なんていうか、一般論として？」
「だから、私は食べない」
「食べる奴もいるってことか？」
こくん、と紫炎が黙って頷いた。どうやら、その鬼の食事風景に嫌悪感を示しているらしいことが、気配でわかった。紫炎から見れば、一心不乱にゲテモノを貪っているようにでも見えるのだろう。
「とりあえず、やってみっか」
すらり、と刀を抜き放ち、鈴也は無造作に鬼に向かって歩いていった。
「せいっ！！」
隙だらけの鬼の背中に、上段から袈裟懸けに斬りつける。だが、見た目どおりに硬い鱗に阻まれて、ろくに傷つけることもできなかった。
これが、鈴也が伏鬼衆としての才能がないと言われる所以である。たとえばこれが貴子なら、刃に霊力を流しこむことで、やすやすと鱗ごと鬼を切り裂いたに違いない。たとえ得物が錆びた包丁であったとしても、だ。
だが、鈴也の攻撃には霊力がほとんど込められていない。これは、鈴也に霊力がないというよりも、効率的な霊力の流し方がわからないからだ。元来センスがない上に、優秀な指導者もいなかったので、当然といえば当然だ。
じっと見ていた紫炎からすれば、刀が折れなかったのが不思議なくらいだった。
「かってぇ…」
情けない表情で振り返る鈴也に、紫炎の口元がほんのかすかに動いた。どうやら、笑ったらしい。

「笑うなよ、こっちは一生懸命なんだぞ」
あまり一生懸命に見えない様子で、鈴也がつぶやいた。
「そんな芥のような鬼、斬らない方が難しい」
紫炎の言葉には遠慮がないが、しょげている場合でもない。さすがに鈍い下級の鬼といえども、いきなり背後から斬りつけられれば、敵の存在に気がつくというものだ。
のそり、とした動きで、体ごと鈴也の方を向く鬼。どうやら、食べていたのは野良猫のようだった。
ぐるる…と獣めいたうなり声をもらし、攻撃態勢に入る。どうやら、この鬼には知性のかけらも見られない。
「う〜ん、こいつもハズレか。とてもアイツの居場所を知ってるとは思えないな」
この鬼が忌野童子と関係あるにせよ無いにせよ、情報を聞きだすのは不可能だろう。
「右腕」
紫炎が、ぼそりとつぶやいた。その直後、鬼の右腕がうなりをあげて、鈴也に向かって振り下ろされる。
「おっと」
鈴也は軽く身をひねると、鬼の攻撃を紙一重でかわしてみせる。
「うお〜、当たったらただじゃ済まねえな」
「左腕」
紫炎の宣言どおり、今度は左腕が横殴りにに振られた。その攻撃も、鈴也は体を“く”の字に曲げることで、軽々と避ける。
「よく避ける……右腕」
鬼の攻撃をことごとく予想し、鈴也に告げている紫炎。だが、その助言も必要ないほどに、鈴也の体捌きは巧みだった。
何を隠そう、鈴也が他の伏鬼衆に勝っているのは、「避けること」だけなのだ。鬼に対する攻撃も防御も、霊力を使いこなす技量——もっと言えば、天性の才能と、適切な指導の下でのたゆまぬ努力が

不可欠だ。だが、その全てを鈴也は与えられなかった。だが、避けるだけならば、一人でも訓練できた。動体視力と反射神経、あとは体を鍛えればよかった。御堂の離れにいた数年間、それだけをただ鍛錬し続けた結果、鈴也は人並み外れた「回避能力」だけを身に付けることができたのだ。
「があああああっ！！！！」
ひょいひょいと自分の攻撃をかわし続ける鈴也に苛立ったのか、鬼が咆哮をあげた。
「隙あり…てい」
咆哮を終え、鬼の顔が再び鈴也の方を向いた刹那。無造作に突き出した鈴也の刀が、鬼の右の眼球を貫いていた。
「ぐあうっ！！」
「おおっと、あぶね」
激痛のあまり、鬼が振り回した腕を、飛び退って避ける鈴也。が、その手に刀は握られていなかった。唯一の得物が、鬼の目に突き刺さったままだったのだ。
「ありゃ…しまった。どうしようかな…」
「鈴也…どいてくれ」
黙って見守っていた紫炎が、すい、と進み出た。
「永らく生きてきたが、これほど苛立つ戦いは初めて見た」
鈴也のあまりにちまちました闘い方は、感情の希薄な紫炎をして、苛立たしめたようだ。業を煮やしたように鈴也を押しのけ、鬼の前に立つ。
「ぐるるぅ…」
鬼の方は、新たな敵の出現に警戒しているのか、それとも紫炎のただならぬ鬼気を感じ、萎縮しているのか。低いうなり声を上げたきり、動こうとしない。
「散れ」
紫炎の手が、引っかくような形で鬼の体をなでる。
「うわっ！！」

驚いたのは鈴也だ。紫炎が軽くなでただけに見えたのに、それだけで鬼の体は無数の肉片と化し、バラバラになって崩れ落ちたのだ。

「南〇水鳥拳みたいだな」

鈴也は、子供の頃に読んだ漫画を思い出し、素直に感嘆するのだった。

8（後書き）

主人公の無能振りが、私自身の予想を上回り始めました。
いや、予想じゃなくて、予定を。

9（前書き）

短いですが、ちょっとキリのいいところまで上げておきます。

よかったら感想ください。

9

「すまんね」
肉片となった鬼の頭部から刀を引き抜きながら、鈴也が告げる。
それに対する紫炎の返答は、きょとん、とした鈴也お気に入りの表情。鈴也の言葉の意味するところが、理解できなかったのだろう。
「お前が俺と結んだ契約は、俺を守ることだけだろ。なのに結果的に、お前に同族殺しをさせることになっちまったからさ」
きゅ、と紫炎の細い眉根が寄った。ほんのわずかに。
「なんで怒るんだよ…？」
「心外だ。私はあんな芥と同族ではない」
「何かよくわからんが、鬼にもいろいろあるんだな」
ぎゅ、と、さらに深く紫炎の眉間にしわがよった。
「名誉を傷つけられた。謝罪を要求する」
「そんなにか!？　わかったよ、どうすりゃいいんだ？」
「代価を支払うのが妥当」
がしっ、と紫炎の手が、鈴也の顎を掴む。
「ちょっ…おま…ほんとは怒ってないだろ!？　ただ精気が欲しいだけじゃねえか!!」
「正当な代価」
ぐい、と引き寄せられた鈴也は、そのまま紫炎に唇を奪われた。厳密に言うと、唇を介して精気を、だが。
「……ふ……」
ようやく離れていった紫炎の唇から、かすかな吐息が漏れる。たとえようもなく妖艶ではあるが、正直その光景を楽しむ余裕など、鈴也には残されていない。
「うぅ……吸いすぎだ、馬鹿……」
かすむ視界の中で、にっ、と紫炎が笑ったように見えたが、鈴也は気のせいだと思うことにした。

「あと…よろしく……」
意識が途切れる寸前の鈴也にできたのは、それを紫炎に伝えることだけだった。

「起きたか」
鈴也が目を開けると同時に、紫炎から声をかけられた。
「おぉ…既視観満点の挨拶、ご苦労さん」
そういえば初めて紫炎に精気を吸われた時も、こんな展開だったなーと、鈴也はぼんやりと思い出していた。といっても、一昨日のことだが。紫炎によって精気を吸われ、意識を失った鈴也は、今と同じように自宅のベッドに寝かされていたのだ。
「もう朝か…結局、一晩中眠っちまったんだな、俺…」
「いや」
紫炎が小さく首を振る。
「ん？　まさか２４時間以上寝てたのか？」
「いや。鈴也は夜中に一度、目を覚ました」
「え、マジか？」
と、言われても、鈴也にはまるで覚えがない。
「“まじ”…とは何だ？」
「それはいいから。んで、またすぐ寝ちまったんだっけ？」
こくん、とうなずく紫炎。
「起きたところで食事をしたら、また寝てしまった」
「え〜？　飯なんか食ったっけ、俺？」
ふるふる、と今度は首を横に振る紫炎。
「食べたのは私」
「お前かよ！！　また吸ったのかよ！？　俺を殺す気か！？」
思いのほか旺盛な紫炎の食欲に対して、さすがに身の危険を感じる。
「人は精気を吸いすぎると死ぬ……のか？」
「いや、聞かれても困るんだけどさ…死ぬんじゃね？」

鈴也の答えは、あくまで推測である。鬼についても伏鬼についても、極端な勉強不足である鈴也には、わからないことがあまりに多い。

ただ、今の勢いで精気を吸われ続けると、恐らくは近いうちに限界が来る、という予感はあった。限界の先にあるのが、死なのか生殖不能になるのかは、わからないが。

とりあえず、詳しい事は今度、貴子に聞いてみよう、と決めた。

9（後書き）

現状、書いてあるところまで公開しときます。

一応、この先もプロットはできてますが

間が埋まってないので、ちょい更新に時間がかかるかもしれません。

よろしく。

１０（前書き）

少し短いですが続きです

10

鈴也と紫炎が、『契約』という名の同棲生活を始めて3日目の朝。
その間に、訪ねてきた貴子と紫炎の間で諍いが起こること3回（つまり1日1回以上）、紫炎がうっかり加減を間違えて精気を吸いすぎ、鈴也が気絶すること2回（つまり毎日）。
テレビに興味を持った紫炎が、ボタンを押そうとしてリモコンを握りつぶしてしまうこと1回。デリバリーピザの配達員が、おもむろにドアを開けた紫炎の美貌に固まってしまい、ピザが冷めること1回（配達員は何故か、お金も受け取らずに帰っていった）。
トラブル続きではあるものの、それらはどれも鈴也の予想を大きく上回るほどのことは起こらなかった。そう、3日目の朝を迎えるまでは。

「――はぁ？」
いつものように「起きたか、鈴也」という呼びかけを受けて、ベッド脇にいる紫炎に寝ぼけ眼を向けた鈴也は、そこに存在していたものを見て間の抜けた声を上げる。
ぺたり、と崩した正座で座り込んでいるのは、間違いなく紫炎だ。いつものように無表情に、赤い瞳で鈴也を見つめている。だが、その格好がいつも通りではなかった。
彼女が見に着けているのは、いつだったか、貴子が夕飯を作りに来たときに持ってきて、強引に置いていった白いエプロン。そしてその下は――全裸だった。
「わぁっ！！　な、なにやってんだおまえ！？」
エプロンよりなお白い肌は、思わず喉がなるほど艶かしく、いつもの黒衣ではわかりづらかった胸のふくらみや腰の曲線までがはっきりと見て取れる。健康な青少年である鈴也には、あまりにも刺激の強い姿であった。

「作戦は成功」
紫炎は、希薄ながらはっきりと、満足そうに頷いた。
「な…なんだよ作戦って……って、お前その本…！？」
裸エプロンという凶器の前に気づくのが遅れたが、紫炎の手には一冊の雑誌が握られている。たまに訪れる貴子の目を逃れるために、押入れの天袋の奥にしまっておいたはずの、鈴也秘蔵の一冊だった。
「人のエロ本、漁ってんじゃねえよ！　返せ！！」
今すぐにベッドに穴を掘って入りたい気持ちを何とか抑え込み、鈴也は逆ギレでその場をしのごうとするが、目の前の鬼はそんな作戦が通用する相手ではなかった。
「大事な研究資料だ、まだ渡すわけにはいかん」
平然と言い返されては、鈴也としても轟沈するほかない。そもそも、今の紫炎の格好は鈴也の超弩級ストライクなのだ。強く出られるはずもない。
「なんの研究だ、なんの！？」
「愚問だ。鈴也を欲情させるための研究に決まっている」
「バカ野郎、欲情云々の前に、刺激が強すぎるわ！！」
「いいから、早く」
問答無用で、唇を突き出してくる紫炎。せっかく研究と準備を重ねて、鈴也を自分で欲情させることができた——食材を美味しく調理した、というべきか——のだから、味が劣化しないうちにご馳走になろう、という魂胆だ。
いずれにせよ、超絶美女がどストライクの格好で唇を突き出しているのだ。そんな状況を見逃せるような男がいようはずもない。鈴也は苛立ち半分、喜び半分の複雑な気分ながら、紫炎と唇を重ねるのだった。
だが、鈴也の予想に反して、精気を吸われている時間は短かった。
「…ん？　どうした？」
すっ…と離れていく唇を、少しだけ名残惜しく思いながら、鈴也は訊ねる。朝から気絶するほど吸われても困るが、今のはずいぶん

と軽い食事だったのではないだろうか。
「吸いすぎると危険…なら、質を高めればいい」
そういえば先日、「精気を一気に吸いすぎるな」と紫炎に注意したのだった。どうやらこの鬼は、鈴也を自ら欲情させることで精気の質を高め、効率よく摂取する方法を思いついたようだ。そのためには鈴也が欲情しやすい状況を把握する必要があり、その資料として、隠していた秘蔵本が必要だった、ということだ。
「アホみたいな作戦だが…乗ってしまった以上は文句も言えないな…それにしても、どうやって見つけやがったんだ」
あんなに念入りに隠しておいたのに…とは、鈴也の心の声である。
「『契約者』の思考を読むぐらい、造作もない」
そう言われて、初めて紫炎と出会った晩のことを思い出す。意識を失った鈴也を、彼女はこの家まで連れ帰っているのだ。行ったこともない家がわかるくらいなのだから、秘蔵本の隠し場所がわかってもおかしくはない……ような気がしないでもない。
「いやいや、ちょっと待て」
「?」
「だったら何も、エロ本を引っ張り出してくることないだろ？　直接、俺の頭から情報を読めばよかったんじゃねえか」
「……あ」
紫炎も、自分がずいぶんと回りくどいことをしていたことに、遅まきながら気がついたようだった。
「なんだよ、エロ本は暴き出されるわ、自分の性的嗜好はさらされるわ、どんな羞恥プレイだよ朝っぱらから…」
げんなりと頭を垂れる鈴也。だがその反面、紫炎が自分の健康を気遣っていることに、喜びを感じる、思春期真っ盛りの青少年であった。

そのビルの周囲は、真っ黒な瘴気に澱んでいた。
ある一点を中心に禍々しい気配が渦巻き、建物の外にまで漏れ出している。
ビルの扉は取り外され、窓ガラスも大半が割れ落ちているので、その瘴気をさえぎるのはひび割れたコンクリートの壁ぐらいの物だ。
瓦礫が乱れるフロアの中心に、男は静かに座っていた。ボロボロになったオフィス用の椅子に、力なくもたれかかるような姿勢だった。
「まったく…困ったもんだねぇ…」
粘ついた声が、その口元からこぼれ出る。
「せっかく…食いごろになってきたと思ったのに……」
その様子を誰かが見ていたなら、男が人間でない事にすぐ気がついただろう。薄く開いた男の口には、鋭い牙がびっしりと並んでいた。
「何だかおかしなヤツがくっついてやがる…一緒に食っちまってもいいんだがねぇ…」
べろり、と異様に長い舌が、口の周りを嘗め回した。
「放っておいて、味が悪くなっちゃ元も子もないしねえ…」
ぎっ。
椅子が嫌な音をたててきしむ。男がゆっくりと立ち上がったのだ。
「今の内に、ひっぺがしちまうか…その方が、もっと美味しくなるだろうしねえ…」
男はゆっくりと歩き出す。不思議な事に、足音は一切しない。
「待ってなよ、御堂のぼうやぁ……」
男は音も無くビルを出て、そのまま闇の中に消えて行った。

１０（後書き）

ご意見くださった方、読んで下っている方

いつもありがとうございます

１１（前書き）

少し難産気味で、更新が遅れております。
もし続きを待ってくださっている方がいたら、
申し訳ありません

１１

「さて、それじゃあ今夜も張り切っていきますか…」
まるで張り切っていない口調で、鈴也が紫炎に告げた。
いつものジーンズにジャケット、無造作に刀をひっつかみ、散歩にでも出かけるような様子だが、目的はもちろん散歩ではない。命を危険にさらす——仕事である。
厳密に言えば、仕事ではない。なぜなら、鈴也は伏鬼による収入をほぼ得ていないからだ。ただ両親の仇である鬼を探し歩き、見つけた鬼を倒す…依頼人のいない伏鬼の仕事に、報酬はない。わずかばかりの賃金が、定期的に御堂本家から振り込まれるのみだ。
それ以外は、両親の残してくれたお金を食いつぶしながら生きている。つまり、張り切ったところであまり意味はないという事になる。
「何となく鬼がいそうなところを、探ってくれると助かるんだが？」
ちらり、と紫炎に目を向ける。
「……いやな匂いがする」
紫炎は、ベランダ方面に目を向け、わずかに鼻を引くつかせると、いまいましげに眉をひそめた。
「いやな匂い？　鬼じゃなくてか？」
紫炎にしてはハッキリしない物言いに、鈴也が首をかしげていると、玄関からインターホンの音が響く。
「誰だよ、こんな時間に……って、貴子！？」
玄関の前で憮然とした表情を浮かべるのは、巫女装束に身を包んだ御堂貴子であった。
カギを開けると、ドアを引っぺがすかのような勢いで室内に入ってくる。
「やっぱり…これから出かけるところだったようね…」
「いや、まあそうだけど…いつもの事ながら、止めてもムダだぞ？」

いくら紫炎と契約して、危険が減ったとはいえ、貴子は鈴也が伏鬼の仕事を続けることには反対している。仕事は自分がやるから、鈴也はおとなしくしていろ、とでも言いにきたのだろうと鈴也は思った。

「別に止めに来たわけじゃないわ。今日は、私があんた達に同行するのよ」

貴子の言葉は、鈴也の予想に反するものだった。

「はぁ!? 何でだよ?」

「い…いいでしょ! あの鬼の力がどんなものか、確認したいだけよ!」

「そんなもん、初日に思い知ってるじゃねえか…」

鈴也達が紫炎と初めて会った晩。貴子は紫炎の真っ向から挑み、苦もなく文字通り片手で捻られている。

「う…うるさいわね…あの鬼が暴走したりしないか、監視するのよ…」

「何かコロコロ理由が変わってる気がするが…まあいいか。おーい、紫炎…」

玄関先で論争していても始まらない。鈴也は紫炎を呼び、出発しようとする。

「紫炎……何やってんだ、お前?」

紫炎は、リビングからひょこり、と顔を出して鈴也と貴子のやりとりを見ていた。なぜか、その形のよい鼻をつまんだままで。

「いやな匂いの元がいる」

「いやな匂い? ああ…さっき言ってたな。何だったんだ、結局?」

紫炎の白い指が、ぴっ、と貴子をさした。

「その雌の匂い」

その言葉を聞いた瞬間、貴子の顔が真っ赤に染まる。

「ちょっとあんた! 鈴也の前で何て事言うのよ!」

「いや…俺の前とかそういう問題じゃないと思うんだが…」

「だって、ありえないでしょう! 私は伏鬼の前には必ずお風呂で

略式の禊をしてるし、香だって炊いてるわ。変な匂いなんてするわけないじゃない！」
貴子が真っ赤なのは怒りなのか、羞恥なのか。恐らく前者だと鈴也は思った。それにしては、貴子の目にわずかな涙が滲んでいるような気がしたが。
「嘘だと思うなら、嗅いでみればいいじゃない！　ほら！」
「待て待て貴子、勢いでおかしな事言ってるぞ！」
ぐいぐいと身を押し付けてくる貴子から、鈴也はのけぞるように身を遠ざける。
「な、何で逃げるのよ、まさか鈴也まで……」
「いや、だからそうじゃなくて…」
誤解を解こうにも、うまい言葉が浮かばない。
もちろん、鈴也が逃げたのは貴子が臭いからではない。先日の一件で、貴子が巫女装束の下にブラジャーを着けないと知ってしまった鈴也にとって、この密着は危険きわまりないのだ。さらに、下手に欲情すると一発で紫炎にばれる。
(うう…なんかいい匂いがする…)
「鈴也」
いつの間にか、紫炎は鈴也の背後まで歩み寄っていた。
「な、なんだよ……」
「わずかだが、精気の質が上がっている」
やっぱばれてる。鈴也の額を冷や汗が流れ落ちた。
「こう…すればいいのか」
むぎゅ、と背後から紫炎が抱きついてくる。前からは貴子がぐいぐいと。
「ちょっとあんた、何やってるのよ…？」
「お前が鈴也を欲情させられるなら、私にできないはずがない」
紫炎は眉間にしわを1本刻んだ表情のまま、貴子同様にぐいぐい体を押し付けてくる。前後から柔らかいものに挟まれて、幸せなのやら不幸なのやら、もはや鈴也自身にも判断がつかない。

「なあ…頼むから、早く出かけようぜ…」
いろいろと限界を迎えつつあった鈴也は、それだけを切り出すのが精一杯だった。

(疲れた……)
出がけの騒動を思い出し、鈴也は大きくため息をつく。
家を出てからも貴子からは「どう？　私…臭くないよね？」とか、紫炎からは「せっかく質が上がったのに、なぜ吸わせてくれない」などと問い詰められた。
「貴子は臭くないし、いい匂いだ。紫炎、精気は仕事が終わってからな」
そう言って何とか2人をなだめすかし、夜の街に出てきたのだ。
それ以降、なぜだか貴子は機嫌がすこぶる良くなり、紫炎は無表情。どことなく、憮然とした雰囲気さえ感じられるが、鈴也は気にしないことにした。
「…で、鈴也。一応聞くだけ聞いておくけど、何かあてはあるの？」
貴子の疑問はもっともだ。だが、今更でもある。これまで鈴也の伏鬼活動に、あてがあった事など一度も無いのだ。
「いや、特にない。鬼の気配なら、紫炎が感知できるけど…特定の相手となるとな」
「そうね…私もある程度の感知はできるけど…」
紫炎に張り合うように言ってはみたものの、貴子には忌野童子の気配を探る事はできない。なぜなら、彼女は忌野童子に会った事がないからだ。
「今のところ、この近くに鬼の気配は感じないわね」
「へえ…やっぱ貴子ってすげぇな」
「そ、そうでもないわよ…ちゃんと修行すれば、鈴也だってできるようになるわ」
実力が認められたのが嬉しいのか、貴子がやや頬を赤らめる。

「それに、上級の鬼は気配を人間に紛れさせてるから…こんな大雑把な感知じゃ、大物は見つけられないかもしれないし…」
一口に鬼といっても、いろいろな鬼がいる。知性のない獣のような鬼、知性も理性も併せ持ち、人間と共存しようとする鬼。そして人間社会に紛れ込み、背後から人を襲う狡猾な鬼。最も危険度が高いのが、人間に紛れている鬼だといえる。探し出すのが困難な上に、そういった鬼は力も強いケースが多いのだ。
そして鈴也の探す忌野童子は、間違いなく危険な鬼だ。約１０年もの間、数々の伏鬼衆の目から逃れ、あるいは退け続けているのだから。
「まあ、いつも通りブラつくしか……ん？」
気がつくと、紫炎が鈴也のジャケットの袖をつんつんと引っ張っていた。
「なんだ、どうかしたのか？」
「私の方がすごい」
「は？　何が？」
「鬼の気配を探るのは、私の方がすごい。この雌よりも」
どうやら、紫炎は鈴也が貴子をほめた事が気に入らないらしい。
「あ、ああ…そうか…うん、そうかもな…えーと…」
(何なんだよこの流れは、もういい加減にしてくれよ…めんどくせえな…)
そんな心の声を押し隠し、事態の収束を試みる鈴也。
「すごいな、紫炎」
そう言いながら、真っ白な髪をぐりぐりと撫でる。
「……ふっ」
撫でられながら、紫炎がちらり、と貴子を見た。口元が、ほんのわずかに笑いに彩られている。貴子には、それが優越感によるものだと直感できた。
「こっ、この……わ、私も……じゃなくてっ……」
自分も撫でろ、と言うには、貴子はややプライドが高すぎた。

「あんた！　いい加減に『この雌』呼ばわりは止めなさいよ！」
そう怒鳴るのが精一杯だった。

そんな時だった。

『やぁ、久しぶりだねぇ…ぼうやぁ……』
貴子と紫炎の声の隙間を縫うようにして、そんな声が響いてきたのは――。

１１（後書き）

そろそろ話を動かさないと…

１２

　その鬼は、かつて鈴也が見た時と同じ姿をしていた。
しわだらけでヨレヨレの、薄汚れたベージュのトレンチコートも、
血色の悪いやせぎすの体も、ボサボサの髪も。そして、口内にびっ
しり並んだギザギザの牙も。
「っ……………」
　忌野童子――鈴也が捜し求めてきた両親の仇。
「な…なんなの、こいつ…」
　伏鬼において、鈴也の遥か上をいくはずの貴子さえ、思わず息を
呑むほどの、不気味な鬼気が辺りを埋め尽くしていた。
「あいかわらず…極上の気だなぁ…へひひひ…」
　にたぁ…と笑う不気味な表情を見た瞬間、鈴也の体から力が抜け
そうになる。必死の思いで手に力を込め、刀を取り落とす事だけは
まぬがれた。
「う…あぁ…」
　怒りと恐怖が、鈴也の胸中でせめぎ合っていた。
　目の前に、憎い仇がいる。
　鈴也から両親を奪い、御堂の家に閉じ込める原因となった存在。
鈴也が幼い頃から孤独を味わい、周りの人間に対して絶望を抱くよ
うになったのは、この鬼のせいだと思って生きてきた。この鬼を倒
せば、自分の中の劣等感が捨てられる。そして御堂の家に対する意
地も、貴子に対するわだかまりも消え、御堂本家も自分の力を認め
るはず。それだけを求め、探し続けた鬼だ。
　だが、鈴也の足は動かなかった。指一本すら、自由には動かない。
右手に握った刀が、まるで鉄の塊のように重い。
　相手は鬼だ。自分よりはるかに能力の高かった両親でさえ、なす
すべなく殺された。怒りと恐怖に捕われた今の鈴也が、叶う相手で
はない。

「ほうほう、ずいぶんとしなびた精気になったものだぁ…」
鬼が、ほくそ笑むように言った。神経を逆なでするような、甲高い声で。
「待ってたんだよぉ、坊やの精気がそんな風に、腐っていくのをさあぁ…」
「……」
くくく…という細い笑い声が、鬼の喉からこぼれた。言葉も出ない鈴也に対し、まるで、笑いをこらえようとして、失敗しているかのようだ。
「どうにも俺の味覚は変わっていてなぁ…他の鬼が涎をたらすような、極上の精気は受け付けないのさぁ…だからあの時は坊やの両親を殺したんだけどなぁ…ひひひ」
両親を殺された絶望から、鈴也の精気は生命力を失い、劣化するはずだった。いや、実際にしたのだろう。それを吸う直前に、忌野童子は御堂本家によって撃退されたのだ。
「口惜しいったらなかったぜぇ？ …でも、俺は待ったんだ。再びお前に見え、その腐りきった精気を啜る日をなぁ」
じゅるり、といやな音がした。目の前の鬼が舌なめずりしたのだと理解するのに、しばらく時間がかかった。
「鈴也…鈴也！」
貴子が自分の肩を掴み、必死で呼んでいる。だが、その声も鈴也の耳には届かない。貴子は鈴也を後ろに下がらせ、忌野童子の前に進み出た。
「あんたが忌野童子ね…叔父様達を殺して、鈴也からすべてを奪った…！」
「いやいやぁ…ちがうよ、お嬢ちゃん…まだすべては奪ってないよぉ…」
粘ついたしゃべり方に、貴子は眉をしかめる。これほどまでに不快感を感じる鬼を、彼女は見た事がなかった。
「まだ坊やの精気は吸ってないからねぇ…絶望に染まりきった、腐

った精気をさぁ…」
「…あんた…本気で最っ低な鬼ね…！」
すらり、と貴子が逆手に持った小太刀を抜き放つ。
「あぁ…お嬢ちゃんの精気もなかなかだなぁ…どうすれば絶望してくれるかなぁ…？」
べろり、と忌野童子が舌なめずりを見せる。
「坊やが死んだら…かなぁ？」
その言葉が終わらぬうちに、貴子は駆け出していた。一瞬で忌野童子の懐に飛び込み、喉元めがけて小太刀を振るう。だが、忌野童子はその鋭い一撃を、のけぞってかわした。
「おぉ…怖い怖い…触れただけでも火傷しそうな法力だねぇ…」
かわされたと知るや、貴子は素早く間合いを離し、身構えている。
「でもねぇ…坊やの精気の方が、美味そうだなぁ…お嬢ちゃんが死んだら、もっと美味くなるんだろうねぇ…」
ぞくり、と貴子の背筋が粟だった。
「坊やの周りの存在をぜぇんぶ殺したら、どれだけいい味になるかねえ？」
ちろり、と舌を覗かせながら、忌野童子が再び鈴也に視線を移す。
鈴也の口元からは、細い血の筋が流れていた。
「あああああああああああっ！！」
鈴也の絶叫。恐怖を払拭するため、自ら唇を噛み切った。震える全身に力を込め、刀を構える。
「くたばれえええっ！！」
鈴也が忌野童子に向かって飛び込んでいく。タイミングも姿勢もあったものではない、最悪の切り込みだった。元もとの実力不足に加え、感情に任せた攻撃だ。
「鈴也、無茶よ！」
がぎん、という鈍い音。肉を切った手ごたえなどまるでない。貴子の予測どおり、鈴也の刀は、鬼の皮膚一枚たりとも傷つける事はできなかった。

「ひはははぁはは！　非力だなぁ、坊やぁ！　法力もない、技術もない、坊やにはなぁ〜んにもないからなぁ！」
おかしくて仕方がない、と言いたげに、忌野童子は笑い出す。それは、鈴也に対する嘲笑のようでもあった。鈴也を、無力感と絶望の淵に叩き込もうとしているかのようだ。
「うわあああああっ！！」
鈴也はめちゃくちゃに刀を振り回し、忌野童子を切りつける。だが、切れるのはよれよれのトレンチコートだけで、憎き鬼は涼しい顔をして鈴也を見下ろしていた。
「ざぁんねんでしたぁ〜、坊やじゃ無理だねぇ…？」
いつの間にか、鈴也のでたらめな攻撃は止まっていた。忌野童子の右手が、鈴也の刀をしっかり掴んでいる。
「思い上がった坊やには、ちょっと痛い目にあってもらおう……」
忌野童子が、大きく手を振りかぶる。母の心臓を貫いた一撃を思い返し、鈴也が戦慄する。
「鈴也、離れて！！」
貴子が叫ぶが、鈴也の体はもはやいう事を聞かない。
その時。
「……おい」
今までずっと黙っていた紫炎が、初めて声を出した。その言葉は、忌野童子に向けられたものであるらしい。
「あぁ？　なんだぁお前…？」
忌野童子の問いには答えずに、紫炎はつかつかと鈴也に歩み寄り、その腕をぐい、と引っ張った。脱力した鈴也の体が、ぽすん、と紫炎に抱きとめられる。
「何するんだぁ、べっぴんさんよぉ…？」
「これは私のだ」
ぎゅ、と紫炎の眉間に深いしわが寄っている。
「せっかくの味が落ちたらどうしてくれる」
「…へぇ…あんたも鬼かぁ…同じ餌を狙う、ライバルってとこかぁ

？」
その言葉に、紫炎の眉間のしわがより深くなった。
「らいばる……意味はわからないが、不快だ」
鈴也を掴んだ手と逆の手が、すっ、と忌野童子の方へ伸びた。
「おおっと！」
貴子の斬撃をかわした時より遥かに焦った様子で、忌野童子が大きく跳び退る。
「危ないねぇ…いきなり心臓を狙ってくるなんて…」
紫炎の手は、さっきまで忌野童子の心臓があった空間にある。一撃で心臓を貫こうとしたらしい。
「私の食事を邪魔するなら…消す」
「へひひ…こっちも１０年前から狙ってるんだ、諦められないねぇ…」
黙ってにらみ合う2人の鬼。だが、静寂を破ったのは忌野童子だった。
「まぁ、今日のところはおとなしく引き下がろうか…続きはまた今度にしようよ、坊や…」
それだけ言い残すと、忌野童子は音もなく闇にまぎれて消えた。
「鈴也…大丈夫？」
貴子が、慌てて紫炎の腕の中にいる鈴也に駆け寄った。
「……んだ……」
かすれるような鈴也の声。
「何で俺には…力がないんだ…なんで…」
暗く淀んだ瞳で、鈴也は誰にともなくつぶやいていた

１３

「ねえ鈴也…やっぱりやめた方がいいわ」
忌野童子が立ち去ってしばらくした頃、不意に貴子が言った。ようやく鈴也も自分の足で歩けるようになっていたが、暗い表情は変わらない。紫炎は、当面の敵がいなくなった事もあってか、鈴也の体を解放し、その後ろに付き従っている。
「あいつは…忌野童子は、鈴也の手には負えない相手よ」
鈴也の攻撃を涼しい顔で受けていたのはともかく、貴子の必殺の一撃でさえ、軽々とかわしてみせた。あの攻撃は、仮に刃を避けても、刀身に込めた法力により少なからずダメージを与えるはずだったのだ。だが、忌野童子はその法力が及ぶ範囲まで正確に見切り、紙一重でかわした。伏鬼のエリート御堂家の次期当主である貴子をして、強敵と言わざるを得ない。
「……だから諦めろっていうのか…？」
「…だって見たでしょ？　鈴也の攻撃は……通用しなかったのよ？」
貴子の言葉に、鈴也は刀の柄をぎりっ、と握りしめる。攻撃の通用しない相手を、鈴谷が倒せるはずがない。貴子はそう言っているのだ。
「あの鬼は、いずれ御堂本家が責任を持って伏滅するわ。だから鈴也は…」
「家でおとなしく待ってろって？」
ぎろり、と鈴也が貴子を睨みつける。この淀んだ瞳を、貴子は見たことがあった。両親を失い、御堂本家に連れてこられた当初の鈴也は、ずっとこんな目をしていた。
「冗談じゃねえ！　これまで御堂が何をしてくれた!?　俺を閉じ込めて、臭い物に蓋をしてきただけだろうが！」
鈴也に対する処置を決定したのは、現当主である貴子の父だ。その決定に反対するだけの発言力が、当時の貴子にはなかった。鈴也

が背負ってきた境遇に関して、貴子には何の責任もないのだ。
それでも、貴子に対する激情は留めようがなかった。貴子の言い分は正論であり、理性では理解できる。だが、感情がそれを許さなかった。
「ただ力がないっていうだけで俺達親子を放り出して、鬼に狙われても助けてくれやしなかった！　父さんや母さんが殺されたってのに、無かった事にされたんだ！」
「それは……」
「責任を持って伏滅だと！？　じゃあなぜ今まで責任を果たそうとしなかったんだ！」
鈴也は貴子の両肩を掴み、揺さぶるように問う。
「御堂は面倒事から目を逸らしたんだろう！　俺からも、父さん達の死からも、忌野童子からも！　大事な大事な、伏鬼名門の名を守るためにな！」
「鈴也…お願い、聞いて…」
「うるさい！　御堂がやらないから、俺がやるんだ！　貴子みたいな才能がなくても、やらなきゃいけないんだよ！」
もはや、それは八つ当たりと言っていい感情だった。御堂の家に対する恨み辛みを、貴子にぶつけるのはが筋違いだということも、鈴也にはわかっている。本当の怒りは、自分の無力さに向けられているという事も。
御堂の家を恨んでいないと言ったのも、才能ある貴子に対するゆがんだ感情も、押し隠すことができなくなっていた。こ忌野童子との再会をきっかけに、心の堤防が決壊したかのようにあふれ出してしまう。
「……このまま奴に挑んでも、負けは見えてるわ」
努めて冷静に、貴子は言った。鈴也の神経を逆撫でする結果になったとしても、言わなければならない事だと思ったから。
「わかってるさ…さっき、嫌ってほどに思い知らされたからな…」
鈴也がうつむいてつぶやく。その表情は貴子からは見えないが、

鈴也の声音には何か危険な響きが潜んでいるような気がした。
「もう…ほっといてくれよ…俺がどうなろうと、御堂には関係ないんだろ？」
ゆっくりと、鈴也が顔を上げた。うつろな表情が張り付いている。
貴子は鈴也の本心に気がつき、大きく息を呑んだ。
「鈴也……あなたまさか……」
「それ以上言わなくていい。貴子…俺にはもう関わるな」
自分の考えを口にしようとしたところを、鈴也は制止するように言葉をつなぐ。口をつぐんだ貴子に背を向けて、ゆっくりと歩き出す鈴也。
「うるさい、帰れ！」
「待って、鈴也！」
はっきりとした拒絶の言葉。貴子は、鈴也のそんな態度を初めて見た。御堂本家にいた頃でさえ、鈴也は本気で貴子を遠ざけようとした事などなかったのだ。
「鈴也……」
遠ざかっていく鈴也の背中。その視界が、じんわりとにじんでいく。
もう、鈴也には自分の声が届かないのだろうか。鈴也に刻まれた絶望は、それほどまでに深いのか。
気がつけば、ぼろぼろと涙がこぼれていた。
頑なな鈴也の心が悲しかった。
鈴也の閉ざされた心を開けない自分が悲しかった。
鈴也を失いたくないのに、止められない事が悲しかった。
そして何より悲しいのが、鈴也が両親の元に行きたがっている事だった。

立ち去った鈴也を追ってくるのは、紫炎だけだった。貴子は、別れた場所から一歩も動いていない。よほどショックだったのだろう。
恐らくは、怒っているのではないと、鈴也は気がついていた。

「ごめんな、貴子……」
言わないつもりだった事まで、感情の爆発に任せて言ってしまった。貴子のせいではないことまで、全部彼女に押し付けてしまった。
それでも、鈴也には貴子を遠ざけなければいけない理由があった。
「俺の周りにいると…奴に狙われる…父さんや母さんみたいに…」
忌野童子の目的は、鈴也の精気を自分好みの味に変えて吸い尽くす事。そのためには、鈴也の心が絶望に突き落とされなければならない。鈴也の周囲にいる存在、心の拠り所となる者を殺すのが、最も手っ取り早いとあの鬼は考えている。
このままそばにいれば、忌野童子は確実に貴子を狙う。それだけは避けたかった。
貴子は御堂の人間であり、御堂の考え方に染まっている。それでも、針のむしろのような御堂家での生活において、1人の人間として自分に接してくれた、かけがえのない存在なのだから。

「今日からここで暮らせ。勝手に外に出る事は許さん」
目の前で両親を失い、放心状態だった鈴也は、自宅から私物を持ち出す暇も無く、御堂家の伏鬼衆に連れられ、本家へとやってきた。そのまま屋敷の離れに当たる小屋に連行され、突き飛ばされるように放り込まれた。
突き飛ばしたのは、父の兄にあたる御堂家当主・御堂錦三。状況を説明されることもなく、自分がいる場所がどこかもわからないままだった。
どうやら自分はこの家で生まれたらしいが、両親は鈴也が物心つくまえに出奔しているため、鈴谷に御堂家に関する記憶はなかった。
「ここはどこですか…？　お父さんとお母さんは…？」
鈴也の質問に、解答代わりに返ってきたのは怒号だった。
「黙れ！」
これまで怒鳴られた事など一度もなかった鈴也にとって、それは

異常なまでの威圧感を持った声だった。
「この際だから言っておく。我が御堂家にとって、貴様の存在そのものが恥なのだ。鬼に遅れをとり、命を落とした貴様の両親もな。これ以上御堂家の名を汚すような事があれば、ただではすまんぞ。わかったら、この中で大人しくしていろ。当主として、最低限の事はしてやる」
錦三はそれだけ言うと、鈴也に背中を向けた。そしてそのままの姿勢で告げる。
「わかってると思うが、本家の敷居をまたぐ事も、本家の人間に気安く話しかける事も許さん」
錦三は鈴也の返事を聞く事もなく、勢いよく障子を閉めて立ち去っていった。それはまるで、鈴也と同じ空気を吸うのも嫌だ、といわんばかりだった。

それからの鈴也の生活は、軟禁とも言えるものだった。1人の家政婦だけがつけられ、勉強もすべて彼女から教わり、学校に通う事も許されなかった。鈴也の存在は世間から完全に秘匿されていたのだ。
毎日同じ時間に目覚め、同じ時間に食事を取り、勉強をして、同じ時間に眠る。そんな生活が1ヶ月続いていた。
そんなある日、鈴也は離れの庭に見慣れない人物を見つけた。自分と同じくらいの歳の女の子だった。綺麗に切りそろえられたストレートの黒髪に、巫女装束が妙に似合っている、可愛らしい女の子だった。
本家からこの離れを訪れる者は、これまで1人もいなかったので、不審に思っていると、
その子は自分を見て、にっ、と笑いかけてきた。
「あなたが、鈴也?」
「………」
鈴也は返事に窮していた。錦三に言われた言葉を忠実に守ってい

たからだ。
「返事くらいしたらどう？」
女の子は、きっ、と眉毛を吊り上げて口調を強めた。
「…本家の人に話しかけちゃ駄目だって言われてるから…」
「私から話しかけてるんだからいいのよ。鈴也は返事してるだけなの」
「なにそれ…」
複雑な表情を浮かべる鈴也の前で、女の子は悪戯っぽく笑って見せた。
それが、鈴也と貴子の出会いだった。

14（前書き）

貴子がメインヒロインみたいになってきました…

違うんです…

貴子がウザ過ぎるって意見があったので、

ちょっと掘り下げてみただけなんです…

14

「私は御堂貴子。将来は御堂家の当主になるのよ」
初めて会った時、貴子は鈴也に向かって胸を張って言った。それだけで、彼女が『御堂』という名にプライドを持っている事が見て取れたが、鈴也はそんな事にはまったく興味がなかった。御堂家がどれほどの名家で、伏鬼衆の中でいかに力を持っているかを、知らなかったせいでもある。何より、自分や両親を『恥』だと言い切るような家を、好きになれるはずもない。
だから、毎日のように離れを訪れる貴子を、最初は少しわずらわしく思っていた。彼女は何かというと『御堂家』の話をするからだ。
それでも、変わり映えのしない日々の生活において、貴子の訪問は鈴也の密かな楽しみとなっていった。鈴也が、唯一対等に付き合える存在が、貴子だったのだ。

だが、いつの頃からか、2人の関係は対等ではなくなっていく。
鈴也の記憶によると、12歳ごろだっただろうか、貴子が離れを訪れる頻度が徐々に減っていったのだ。毎日だったのが3日に1度になり、週に1度に、そして月に1度に。
「ねえ早紀さん。最近、貴子来ないね…」
ある雨の日、鈴也は何気なく鈴也付きの家政婦に言った。
「そうですね…貴子様は本格的に伏鬼の修行に入られましたから…お忙しいのでしょう」
少し迷ってから、早紀は貴子が来なくなった理由を、そう鈴也に告げた。
「ふっき？」
「特別な力を使って鬼を倒す業のことです。御堂家は伏鬼の名門で、貴子様は次期当主とも目される資質をお持ちですから…錦三様も熱心に指導してらっしゃるそうですよ」

「その力があれば、鬼を倒せるの…？」
「……素質次第では可能ですが……」
「……じゃあ、僕はだめなんだね」
鈴也は嘆息した。何かにつけて周囲から「力がない」「素質が無い」「落ちこぼれ」と言われ続けてきたのだ。今までは何の素質かわからなかったが、これで納得がいった。
「鈴也ぼっちゃま……」
「早紀さんも、伏鬼衆なの…？」
「……もともとはそうですね。今は仕事から遠ざかっておりますが」
「そっか、早紀さんも才能があるんだね」
鈴也は早紀の方を見る事なく、窓の外を見ている。
「いいなぁ、貴子は才能があって…」
「鈴也ぼっちゃまは、伏鬼衆になりたいのですか？」
鈴也はぼんやりと降りしきる雨を見ながら、ふるふると首を振った。
「別に…なりたくないよ」
「では、なぜ貴子様を羨むのですか？」
「だって……」
空を見ていた視線を地面に落とし、鈴也が小さくつぶやく。
「才能があれば…いらない人間じゃなくなるんでしょ」
自分は伏鬼の才能が無いから、親子ともども本家を出奔せざるを得なかった。そして、御堂家に戻ってきた自分に居場所がないのも、才能のなさゆえだ。自分に貴子のような才能があれば、こんな境遇に陥る事もなかったし、両親も失わずに済んだかもしれない。
日陰者として後ろ指をさされ続けた鈴也と、次期当主と期待される才能の持ち主である貴子。２人の距離は、その頃から自然と遠のいていった。

そして鈴也と貴子が１４歳になったある日。３ヶ月ぶりに離れを訪れた貴子は愕然とする事になる。

鈴也の姿が、御堂家から忽然と消えていたのだ。
御堂家を飛び出した鈴也は、早紀から教わったわずかばかりの知識を元に、フリーの伏鬼衆となった。両親の仇をとるためでもあり、自分の存在意義を探すためでもあった。他の道は、考えられなかった。学校へも通わず生きてきた鈴也にとって、知っている職業は伏鬼衆しかなかったのだ。
実力のない、伏鬼衆としての生活には、何の希望もなかった。ただ盲目的に、親の仇を討つ事だけを考えながら過ごしていた。何よりも、貴子と同じ空間にいるのが辛かった。
貴子を妬み、才能のなさを恨む自分が許せなかった。
それでも、貴子と早紀の存在は、鈴也の人生において数少ない救いだったのだ。
(貴子を巻き込むわけにはいかない…)
忌野童子の力を見せ付けられた今、鈴也が考えられるのはそれだけだった。

自分の部屋に戻った鈴也は、疲弊した体を投げ出すようにベッドに横たわった。紫炎は、音も無くその傍らに腰かける。
切れ長の目が物問いたげに、じっと鈴也の顔を見つめている。
「なんだよ…何か言いたい事でもあるのか？」
鈴也は自分でも、心がささくれ立っているのを感じながら言った。
まだ、忌野童子に対する恐怖が体に染み付いているようだ。
その恐怖を見透かしているかのように、目の前の美しい鬼は言った。
「鈴也があの鬼に勝つのは無理だ」
言われるまでもない事だが、今の鈴也には厳しすぎる一言。
「だったらどうだって言うんだ？」
「……困る」

「何が？」
「鈴也が死んだら、私が困る」
「食料として、だろ。いいさ、吸いたいんだろ？」
こくり、とうなづき、紫炎が口を近づけてくる。いつもなら、少なからずドキドキする瞬間ではあるのだが、今の鈴也はそれどころではなかった。
少しひんやりとした、柔らかい唇が重なっても、鈴也の意識は別のところにあった。
「……？」
すぐに唇を離し、紫炎が首を傾げる。
「どうした？」
「……味が落ちている」
「え？」
一度顔を離し、紫炎は横たわる鈴也に覆いかぶさってきた。
「お、おい……」
慌てる鈴也を無視するように、紫炎はその豊かな胸を、ぎゅっと鈴也の胸に押し付けてくる。
「な、何やってんだよ！？」
「……」
紫炎は黙ったまま、ぐりぐりと胸をすりつけてくる。どうやら、鈴也の精気の質を上げようとしているらしい。
「……だめだ」
紫炎が、わずかに眉尻を下げた。残念がっているようだが、鈴也としてはため息しかでない。長年の宿敵と再会し、力の差を痛感させられた直後なのだ。さすがにこの程度で欲情するほど、鈴也も単純ではない。
「悪いけど、今はそんな気分にはとてもなれないよ…」
「むぅ…」
鈴也の反応に不満なのか、紫炎は体を離し、腕を組む。
「気に入らないんなら、無理に吸わなくていいぞ。俺はもう寝るか

らな」
鈴也はふてくされたように枕に顔をうずめ、部屋の電気を消した。
疲れているせいか、睡魔はすぐに襲ってきた。

ややあって、鈴也が寝息を立て始める。だが、それはとても安らかとは言えなかった。
「う……うぅ……」
しきりに寝返りをうち、うなされるように声を上げ続ける鈴也。
苦しげに眉をひそめ、食いしばった歯がぎりぎりと音を立てる。
そんな鈴也を見つめる紫炎の赤い瞳が、わずかに揺らめいている。
「あ……ああ……あぁ……！」
鈴也が助けを求めるように、手を伸ばしてきた。
「……？」
鈴也に何が起こっているのか、紫炎には理解できなかった。紫炎は『契約者』として鈴也の思考を読む事ができるが、そこに渦巻く感情までは理解できなかったのだ。
ただわかるのは、鈴也が苦しんでいる事だけ。
(嫌な気持ち…どうすればなくなる…？)
考えを巡らせていた紫炎が、ふと何かを思いついたような表情を見せた。
(鈴也が私にした事…嫌な気分が消えた…)
紫炎の白い繊手が、ゆっくりと鈴也の頭に伸びる。そのまま、ゆっくりとその髪をなで始めた。
鈴也が自分の前で貴子を褒め、何となく気分が悪かった時、鈴也は自分の頭を撫でた。その時、何となく嫌な気分が薄れていったのを、紫炎は覚えていたのだ。
「うぅ……」
紫炎は、そのまま朝まで、うなされる鈴也の頭を撫で続けた。

１４（後書き）

うざくならずに「持たざる者」の
心境を書くのは難しいですね…

１５（前書き）

ちょっとずつ更新です。
ご意見、ご感想等あればお願いします。

１５

目が覚めると、頭がだいぶすっきりしている事に、鈴也は気がついた。忌野童子と再会し、ささくれ立っていた気分がやや静まり、落ち着いているような気がする。
「嫌な夢を見ていた気がするんだけどな…」
不思議に思いながらも頭を軽く振って、意識を覚醒させる。さらに伸びをしてから、もう一度頭を枕に預ける。
「あれ…？」
枕の感触が、いつもと違っていた。ざりっとしたソバガラの感触はなく、柔らかいクッションのような、心地よい感触だった。
「起きたか、鈴也」
「わあっ！」
寝転んだままの鈴也の視界いっぱいに、世にも美しい顔がある。紫炎が、真上から鈴也の顔を覗き込んでいた。
「え…なんで紫炎が膝枕してるんだ…？」
柔らかいクッション…それは、紫炎の太ももだった。自分はずっと、ここで眠っていたようだ。いつもと感触が違うのも当然といえる。
ちなみに着ているのはいつもの黒衣。裸エプロンでないのが、安心するような、残念なような。もっとも、もし裸エプロンなら紫炎が精気を狙わないはずがないのだが。
「鈴也の願望だから」
「え…もしかして、思考を読んだのか？」
紫炎はこくん、とうなづいた。
「幼い鈴也が、誰かにこうされているのが見えた」
「うわぁ…」
幼い頃…母親してもらった膝枕でも、夢に見ていたのだろうか。だんだん気恥ずかしくなって、鈴也は慌てて頭を起こす。

「重かっただろ…」
「これで精気の質が上がるなら、何ほどの事もない」
「お前、そればっかだよな…」
さらり、と抑揚のない声で返されて、思わず鈴也がうなだれた。
(そりゃそうだよな…俺は何を期待してるんだよ…紫炎にとって、俺は食料なんだ…貴子もそう言ってたじゃないか)
自分に無償の愛を捧げてくれる存在など、もういない。そんな事は、当たり前の事だ。特殊な環境で育てられてきた鈴也が、そう思うのは無理からぬ事だった。
貴子が自分に構うのは、御堂家の面子のため。紫炎が自分を守るのは、質のよい精気を得るため。それ以上でもそれ以下でもない。そうじゃないと思いたい気持ちを抑え、鈴也は大きく息を吐いた。
「鈴也」
気持ちが沈み込みそうになったところで、紫炎が突然呼びかけてきた。
「ん…なんだ？　精気か？」
「今はいい」
ふるふると首を振る紫炎。
鈴也が了承しているにも関わらず、食指を動かさないとは、珍しい事もあるものだ。鈴也は首を傾げて続きの言葉を待つ。
「外出を希望する」
「へ？　外へ行きたいのか？」
こくり、とうなづく紫炎。突然の要求に、鈴也は戸惑いを隠せない。これまで、紫炎が鈴也に大して精気以外の要求をしてきた事はない。
「なんで急に？」
「気分転換…？」
「何で疑問系なんだ…というか、そもそもお前、何か気分を悪くする事でもあったのか？」
「私の気分は外出したぐらいで変わらない」

再びふるふると首を振りながら、平然と紫炎が言い放つ。
「転換すべきは鈴也の気分」
「俺の…？」
「そうだ」
「何でそうなる？」
紫炎の思考には、相変わらずついていけない。鈴也は首をひねった。さらに、『契約』によって思考が読めるのは、紫炎だけ、というのも微妙に納得がいかないのではあるが。
「非常に由々しき問題だ」
「えーと…何が？」
「鈴也の精気の質が、昨日から明らかに低下している」
紫炎に言われ、昨日の事を思い出す。誰よりも憎い両親の仇に出会いながら、何もできなかった絶望感。貴子にも紫炎にも、忌野童子には勝てないから諦めろ、と言われた無力感。恐らく、それが精気の質を落としているのだろう。
「だから…何だって言うんだよ…」
「……外で気分転換」
外出して、気を紛らわせようという事だろうか。紫炎にしては、まっとうな提案のように思えた。鈴也は腕を組み、しばし考え込む。
「それぐらいで気分が変わるとは思えないけどな…まぁ、いいか」
このまま部屋で悶々としていたところで、事態が好転するわけでもない。紫炎を人目に晒し続けるのは少し気になるが、ここは紫炎の提案に乗ってみるのもいいかもしれない。
「わかった…シャワー浴びてくるから、ちょっと待ってろ」
鈴也の言葉に、紫炎は黙ってうなづいた。

「…で…何をしてるんだ、紫炎」
家を出て5分ほどたった頃、鈴也は我慢の限界を迎えて紫炎に訊ねた。

鈴也はいつものジーンズとジャケットスタイルだが、刀は持っていない。貴子辺りに見られたら、伏鬼衆としての心構えをこんこんと説かれるところだろうが…鈴也は伏鬼に出る時以外、武器は持ち歩かない。貴子の小太刀のように、おいそれと隠せる代物ではない、という事も理由の1つだ。

「気分…転換？」

紫炎は、家を出てから今まで、ずっと鈴也の頭を撫で続けていた。

「だから疑問系はやめろって。そもそも、気分転換と撫でるのと、何の関係があるんだよ？」

「私にもよくわからない」

女性にしては長身の紫炎は、鈴也とほぼ身長が変わらない。頭を撫でながら歩いても、歩きにくそうな気配はなかった。

「だが…撫でられると気分が落ち着く」

「……それは時と場合によりけりだろ」

「今はだめなのか？」

「だめっていうか…そういう問題じゃない」

奇妙なやりとりを続けながら歩く2人。いつしか、人通りの多い商店街にさしかかっていた。道行く人々はみな、紫炎の異様とも言える美貌に目を奪われ、足を止めているようだが、鈴也は気にしない事にした。

「………なら」

紫炎は一旦手を下ろし、鈴也の右手首を取る。

「な…何をする気だ？」

「……こう」

紫炎は鈴也の手首を掴んだまま、その手を自分の胸の膨らみへと運んで行く。

「待てぇっ！！」

「……？」

必死に抵抗する鈴也。きょとん、とした表情を浮かべる紫炎だが、さすがに鈴也もその表情を楽しむ余裕がなかった。

「公衆の面前で何をする気だお前は！」
「気分転換」
「わかるように言え、わかるように！」
「女の胸を触って気分転換」
そう言いながらも、紫炎はぐいぐいと鈴也の手を引っ張ろうとしている。
「バカかお前は！　俺が捕まるわ！！」
「私の胸では効果がないのか？」
ないわけがない。ありすぎるほどあるだけに、鈴也は必死で抵抗しているのだ。
「そういう問題じゃねえ！　お前の言う気分転換ってのは、欲情の事か！？」
「……違うのか？」
言い争う2人の姿は、周囲からどんな目で見られているのか。
ある者はただ紫炎の美しさに見とれ…
ある者は紫炎の胸を触ろうとしている（ように見える）鈴也を羨み…
ある者は道端で不埒な行動に及ばんとする（ように見える）鈴也に眉をひそめる。
「違う！　違わないかもしれないけど…今は違うと思いたい！　あと、周囲の目が痛い！」
「…周りの人間を消せばいいのか？」
「アホか！」
今度こそ、鈴也は力いっぱい手を引いて、紫炎の手を振り払う。
「む…」
きゅ、とわずかに紫炎の眉が寄った。恐らく、機嫌を損ねたに違いない。
「あ～…いいか？　言っとくけど、勝手に人を殺すな」
今更ではあるが、鈴也は紫炎が人間ではないという事を、改めて思い知っていた。鬼の価値観において、人間の命など大した意味を

持っていないからこそ、「周囲の人間を消す」などという発想が出るのだろう。鈴也は鬼と人間の間にある価値観のずれを、今まで言及してこなかった事を後悔していた。
「…それは『契約』の範囲外だが」
鈴也と紫炎の間において交わされた契約は『死なないように守る代わりに精気を提供する』というものだ。つまり、紫炎が鈴也の指示に従う必要性はない。
「あえて殺すほどの事もなし。良いだろう」
「本当だろうな？」
「あくまで鈴也の命を優先した上でならばな」
「……まあ、とりあえずはそれでいいよ…」
多分に諦めを含んだ声色ながら、鈴也はそう言ってうなづいた。

設定資料（前書き）

キャラクターと用語のまとめを入れときます。

一番重要なのは、名前の「読み」…ですかね。
「貴子」は「たかこ」じゃなかったんです、実は。

ルビを入れると携帯で見たときにズレるので、
入れなかったんですが…そして今更ですが。

ちなみに読まなくても別に不都合はないです。
「貴子」を「たかこ」と読んだところで問題ないし、
ここを読まなくてもわかるように
本編を書いていくつもりではありますので…

物語の進行具合によって度々更新します。
あと、第２部以降の人物も随時追加します。
ネタバレが嫌な方は、本編を読んでから見てください。

設定資料

【人物】

御堂鈴也（みどうすずや）

年齢：１７歳　身長：１７５センチ　体重：６４キロ

まともに術も使えず、剣術も微妙な「伏鬼衆」の一員。伏鬼衆の名門御堂家次男を父に持つも、両親ともに出奔。隠遁生活中に両親と死別している。両親の死後は御堂本家の離れで、専属の家政婦と暮らしていたが、１４歳の時に本家を出奔し、以後はフリーとして活動。だが特に目立った功績はない。精気の質がケタ外れに高く、紫炎に目を付けられた挙句、意図せずに共生関係を持ちかけて『契約者』となる。

剣術は攻撃が苦手なので御堂家から落ちこぼれ扱いされているが、実は防御に関しては自己流の修行により完璧に近い。ただ、攻撃できない伏鬼衆など意味がないので、落ちこぼれであることには変わらない。

本来は感情の起伏はあまり激しくないが、無感動なのではなく溜め込むタイプなだけ。

御堂本家により存在を秘匿されていたため、小学校以降学校には通った事がない。

紫炎（しえん）

年齢：不詳　身長：１７２センチ　体重：測定不能

Ｂ　８８ｃｍ　・　Ｗ　５８ｃｍ　・　Ｈ　８８ｃｍ（推定）

夜の公園で鈴也の精気に惹きつけられ、現れた『鬼』の女性。本来ならば『鬼』の中でも飛び抜けた力を持つが、その反面、質の高い

精気しか受け付けない体質。精気吸収に関しては口移し。相手を性的な興奮状態にさせると、より純度の高い精気が吸収できるが、そのための技術は持っていない。
感情の起伏が少なく、現在の所は鈴也以外の人間にはまったく興味がない。外見的には大人っぽい高校生〜瑞々しい２０代前半の超絶美女。髪も肌も真っ白だが瞳と唇だけ血のように赤く、ゆったりとした漆黒の衣装に身を包んでいる。

御堂貴子（みどうたかね）
年齢：１７歳　身長：１６５センチ　体重：実測５０キロ
Ｂ　８４ｃｍ・Ｗ　５５ｃｍ・Ｈ　８５ｃｍ

御堂家当主・御堂錦三（鈴也の父の兄）の１人娘で、鈴也にとっては従兄妹にあたる少女。術も剣技も鈴也をはるかにしのぐ実力の持ち主で、次期当主と目されている。御堂家の指令に反して己の一存（わがままともいえる）で鈴也を連れ戻そうとするが、現状実現の見通しは立っていない。その理由は実力のない鈴也が「御堂家」に恥をかかせないため（と本人は言い張っている）。
鈴也に対する執着から、彼と『契約』を果たした紫炎を目の敵にしている。
貴子が当主を目指す最大の理由は、自らが当主となり、御堂一族による鈴也への不当な扱いを改めさせるため。
御堂家を背負って立つという気概がきつい態度をとらせているが、伏鬼と鈴也に関する事以外ではごく普通の少女。

御堂錦三（みどうきんぞう）
年齢：４８歳　身長１７０センチ　体重７５キロ

御堂家先代当主の長男であり、現当主。伏鬼の名門一族である御堂家を取りまとめ、その名を守る事を第一と考えている。そのため、

鬼に敗れた鈴也の両親や、伏鬼の才能を持たない鈴也を「恥」と言い切り、家名を守るためにその存在を徹底的に秘匿。鈴也を離れに軟禁し、醜聞が他家に知れ渡らないように計らった張本人。高い技量を持つ伏鬼衆だが、自分以上の才能を持つ貴子に英才教育を施し、跡目を継がせようと思っている。娘の貴子がしばしば鈴也と接触している事が悩みの種。親馬鹿。

桐原早紀（きりはらさき）
年齢：25歳　身長168センチ　体重54キロ
B　90cm・W　56cm・H　87cm
両親を失った鈴也が御堂家に引き取られた時、専属の家政婦として付きっ切りで面倒を見ていた女性。伏鬼衆としても高い実力を持っていたが、修行に嫌気がさして鈴也の世話役を買って出た。
怜悧な美貌を持ち、一見冷たそうだが、自他共に認める病的なまでの「鈴也コンプレックス」を患っており、彼に対して常軌を逸した愛情を注ぐ。ただし鈴也以外の人間には基本的に興味がない。
生きがいは鈴也の世話で、好物は鈴也の笑顔。趣味は無表情で行う、鈴也への言葉によるセクハラ。
常にメイド服を身にまとっており、そのスカートの内側には愛用の折り畳み式薙刀が収納されている。

忌野童子（いまわのどうじ）
年齢：不詳　身長：188センチ　体重：測定不能
強大な力を持ちながら、卑怯な手段を好んで使う『鬼』。10年前（厳密には11年）、鈴也の上質の精気に目をつける。人間の絶望感に満ちた精気を好む、人間で言う「悪食家」であるため、鈴也の精気を貶めるためだけに両親を殺害した。人の心のスキにつけいる手段を特に好む。

第1部において、紫炎に頭部を握りつぶされて死亡。

【用語】

［鬼］

いつからともなく、人の世の闇に潜み蠢く異形の生物。物理的な食事は必要とせず、人の精気を吸って生きる事ができる。だが、一度人間の肉の味を知ってしまった『鬼』は、それ以後も人を襲い続ける事もある。外見は様々で、えてして巨体と強力を誇る。

［伏鬼衆］

鬼を殺す事を生業とする人々の総称。法力（一般的には霊力）と呼ばれる力を駆使し、強靭な鬼に対抗する業を身に付けている。中でも御堂一族は強力な伏鬼衆を数多く排出してきた名門であり、伏鬼衆の世界では高い名声と信頼を集めている。ただし、その業は特に人間に対して効果はない。（武器は本物なのでケガはする）

［契約］

定期的な精気の供給や、友好関係・恋愛関係といった理由から、共生契約を結んだ『鬼』と人間の関係を指す。大半の場合は需要と供給のバランスが合わず、人間が衰弱死するか鬼が弱体化、あるいは暴走するケースが多い。

より効率的に精気を吸収するために、『鬼』は契約した相手の好みや思考、性的嗜好をあるていど把握できるようになる。

多くの鬼にとって契約は「誇りを捨てる行為」として忌み嫌っており、契約を結んだ鬼に対して他の鬼は攻撃的であったり蔑視するようにになる。

設定資料（後書き）

せっかく決めておいたので、
一応のせとこうと思っただけなんです。

ちなみに伏鬼衆の業や術に関しては
詳しい設定はありません。
さして重要な事ではないので考えませんでした。

16（前書き）

ちょっと短めで…

１６

２人がぶらぶらと町を歩き始めて、３０分ほどもたっただろうか。
気がつくと鈴也は、公園のベンチに紫炎と並んで腰かけるという、ちょっと変わった状況に陥っていた。
元々目的があったわけでもないし、３０分も歩けば少しは休憩したくなる。さらに言えば、目的もなく歩き続けるなど苦痛以外の何物でもない。
少し休憩しようと、通りかかった公園のベンチに腰かけると、紫炎は黙ってその隣に腰かけたのだ。
「あのさ…」
黙ったまま座り続けるのに耐えられなくなった鈴也はが口を開く。
「何だ？」
これまで言うに言えなかった事を、ようやく鈴也は口にした。
「…なんか、異様に疲れたんだが…」
「ただ歩いただけだが」
不思議そうに首を傾げる紫炎に、鈴也は「お前のせいだ！」と叫びたいのを必死で我慢した。
２人で歩くだけで異様に疲れた理由――それは、あまりにも紫炎が目立つからだった。
声をかけてくる者はさすがにいなかったものの、通りすがりに紫炎の美貌を直視してしまい、呆けてしまった男がいた。紫炎の全身から漏れ出す鬼気に気づき、泣き出す子供もいた（余談だが、それだけ敏感なら、伏鬼の素質は鈴也より上かもしれない）。さらに、向かってくる信号無視の車を紫炎が睨みつけ、運転手がハンドル操作を誤るという、一歩間違えば大惨事になるような事もあった。
出かける前までは、軽いデート気分だった鈴也も、さすがにそれどころではないと考え直すしかなかった。
「だが…」

まじまじと、紫炎が鈴也の顔を覗きこむ。
「少し持ち直したようだ」
紫炎が言うのは、精気の質の事だろうか。
それはそうに違いない。ここに来るまでにあった数々の騒動の中では、忌野童子の事を考える余裕など微塵もなかったのだ。
「そりゃ…何よりだったな」
「うむ」
鈴也の気のない言葉にうなづくと、紫炎はおもむろに鈴也の右手を掴む。思わずぎょっとする鈴也。紫炎が、掴んだ手を自分の胸の膨らみに運ぼうとしたのは、つい先ほどの事。鈴也が警戒するのも無理はない。
「ま…待て…そういうのは、家に帰ってから…」
慌てて言い募るが、紫炎は鈴也の手を握ったまま、それ以上動かそうとはしなかった。
「違う」
紫炎は静かに言った。
「私には鈴也の望みが見える」
「え…？」
紫炎の言わんとする事が、鈴也には理解できない。
「なぜこの行為を望むのかはわからないが」
不思議そうに、紫炎は？いだ手を見る。
「鈴也がこの手を『離されたくない』と感じているのはわかる」
「そうか…」
紫炎は、鈴也が頭の中で望んでいる事を、具体的に知る事ができる。2人が結んだ『契約』のもたらす効果によって。しかし、紫炎は人間ではなく『鬼』。人間ではないがゆえに、人間の感情を理解する事もできないし、同調する事もできない。つまり、鈴也の本当の望みや胸の内までは、理解する事ができない。
鈴也は両親が死んで以降、誰かに何かを期待する、という行為を

止めてしまった。誰も自分を見ない、誰も自分には興味を持たない、自分に何かを望んでいる人間もいない。そう思い込む事で、御堂本家での軟禁生活を乗り越えたのだ。
それは、貴子が離れに遊びに来なくなった事で、決定的になった。無論、貴子には貴子の事情があった事はわかっている。だが、それ以上に思い知ったのは、貴子と自分の立場の違いだった。
鈴也が望んだのは、伸ばした手を掴んでくれる存在であり、その手を離さないでいてくれる絆だ。御堂本家では望むべくもなかったものであり、学校にすら通わなかった鈴也が、これまでに手に入れる事が叶わなかったものだった。

紫炎はそんな鈴也の意識を、表面上でしか理解できない。だから、その望みを叶えるために彼女ができるのは、物理的に?いだ手を、離さないでいる事だけだった。
「…これも…絆って言えるのかね…」
鈴也は苦笑いしながら、紫炎の手を握り返した。
2人が結んだ『契約』の内容によれば、紫炎が鈴也の望みを叶える必要などない。死なないように守れば良いだけなのだから。にも関わらず、手を握ってくれる紫炎の存在が、鈴也にはありがたい。貴子と距離を置いてしまった今となっては、なおさらの事だった。
「ありがとな、紫炎」
「礼の言葉はいい」
「え？」
「それより…頭を撫でるがいい」
「頭って…お前のか？」
黙ってうなづく紫炎。話の流れが理解できない鈴也だったが、とりあえずは言うとおりにしてみる事にした。
(まあ、感謝してるのは確かだしな)
鈴也は空いた手で、紫炎の白い髪を撫でた。
「む…」

「何だよ…言うとおりにしたのに、不満そうだな」
「不満ではない」
紫炎はそう言ったが、形のよい眉はわずかにひそめられている。
「が…満足感が予想より低い」
「何だそりゃ？」
「前回との違いはなんだというのか…？」
ぶつぶつとつぶやき始める紫炎。鈴也には、彼女の言っている事が1割も理解できなかった。だが、鈴也自身の行動を通して、人間とのコミュニケーションをを学ぼうとしているのだと、好意的に理解する事にした。

17

鈴也が異変に気づいたのは、忌野童子との邂逅から一週間ほどたった夜だった。

隙あらば鈴也の精気を吸おうとしていた紫炎が、妙に大人しいのだ。今までのように強引に精気を奪おうとも、鈴也を欲情させようともしてこない。ただ、何かの拍子にかすめとるように唇を合わせるだけで、以前のように鈴也が身の危険を感じるような事はなくなった。もちろん、無駄に性癖を暴かれるような事もない。

(腹…減らないのかな…？)

鈴也としては好都合…というより安心だが、気にはなる。鬼にとって精気を吸うのは、人間で言う食事と同義なのだ。

(ダイエット…なわけないよな)

それと同時に、紫炎があまり動かなくなった。元々少なかった口数はさらに減り、目を閉じてじっとしている事が多くなったのだ。

「おい、紫炎…」

鈴也が声をかけても、紫炎は気だるげに片目を開けるだけで、特に返事をするでもない。

「お前…体の調子でも悪いのか？」

「節約」

めんどくさそうに、それだけを告げる紫炎。

鈴也から見れば、体調が悪くてまともに話せない状態にしか見えない。もっとも、顔色に関しては元が白すぎるので、よくわからないが。

「節約ってなんだ…？　体力を温存してるってことか？」

小さなうなづき。

「要するに…腹が減るからできるだけ動かないようにしてるって事だよな？　だったら…精気を吸えばいいだろ。吸いすぎなければ問

題ないんだし」
一気に吸いすぎるな、とは言ったが、一切吸うなとは鈴也は言っていない。日常生活に支障がない程度なら、別に構わないと思っているのだ。
「重要な事実が発覚した」
どこか、重々しい口調だった。いつになく真剣――と言っても、鈴也にしかわからない程度の違いではあるが――な雰囲気に、鈴也の喉がゴクリと鳴った。
「鈴也はどうやら、精気が変質しにくい」
「…わかりやすく言ってくれ」
戸惑いを隠せずに、鈴也が早口で言う。
「なかなか質が上がらない」
「……」
人間の感情や状態によって、精気の質が変化することは、鈴也でも知っていた。精気とはそもそも、生命の根源ともいえるものだ。だからこそ、生命力に直結する性的興奮状態にある時の精気こそが、最も良質で鬼が好むと言われている。そのために、被捕食者を性的に陵辱する鬼もいるぐらいなのだ。
それ以外にも、嬉しい時や楽しい時など、陽の感情が精気の質を高める。逆に、陰の感情に捕われれば精気の質は落ちる。
精気の質が陽の方向に変化しにくいということは、鈴也が感情の変化に乏しいということだ。御堂の家に引き取られてから、意識的に感情を殺してきたのだから、当然といえば当然なのかもしれない。
「…つまり、期待外れってことか？　今の俺の精気じゃ、まずくて吸えないと？」
鈴也の声は、知らないうちに硬くなっていった。卑屈な考えだとは思ったが、紫炎も特に否定はしない。
「それでも、私には鈴也が必要だ」
「まずくても食料……だもんな」
紫炎の言葉は、鈴也にとって絶望をもたらすものでしかなかった。

代わりが見つからない限り、彼女は他者から精気を吸うことはしない。だから、自分をキープして命をつなごうというのだろう、と鈴也は思った。
幼い頃から、自分に対して何かを求められる事のなかった鈴也には、そういう発想しかできなかった。
「口に合えば誰でもよかった…」
鈴也はどこか、遠くを見るような目でつぶやいた。
(やっぱり…いや、それが当たり前だったんだ…)
鈴也は思う。自分が必要だと言われた事で、舞い上がってしまったのだと。紫炎が興味を示したのは鈴也の人間性でも何でもなく、ただ精気の質が好みに合っただけなのに。
「バカだな…俺…貴子の言う通りだ」
両親以外と初めて交わしたキスは、食事のため。鈴也に執着したのも、守ってくれるのも、すべては上質の食糧として。2人で出かけた公園で、黙って手を握ってくれたのも、精気の質を落とさないためだったのだろう。
(それなのに、絆とか言って…ほんとバカだ)
御堂の家では、決して味わえない感覚だった。精気が目的だったとはいえ、紫炎は鈴也でないと駄目だと言った……いや、そうだと思っていた。
「精気の質が高いとか低いとか、そんなの俺は知らない…お前が鬼だってことも、関係ないと思っちまった…」
「…精気の質が落ちていく…なぜだ？」
「やっぱり…それだけなんだな。お前にとっての、俺の価値は」
あえて目を向けないようにしていただけで、本当は最初からわかっていた。それでも、誰かがそばにいる状態が嬉しくて、他愛無いやりとりが楽しくて。
だが、どうやら自分は、食糧としての価値すらなくなりかけているらしい。
「私が近くにいることが、精気の質を下げているのか？」

問い詰めるような気配はない。ただ、自分の知らないことをたずねているだけ、という雰囲気で、紫炎が問いかけてくる。

誰かのせいにしたいわけじゃない。でも、我慢ができない。否定する事ができない。

「……了解した」

その一言を最後に、紫炎は鈴也の前から姿を消した。

そしてリビングには、鈴也を除いて誰もいなくなった。

貴子を遠ざけ、紫炎に去られ、鈴也は１人になった。

(…いや、元通りになっただけだ…俺は最初から１人だった。両親が死んだ、あの日から)

自分に言い聞かせるように心の中でつぶやき、鈴也は枕元の刀を握った。

１７（後書き）

しゃきっとしない鈴也にイライラするでしょうが、
もう少し付き合いください。

18

(静かだな…)
夜道を1人歩きながら、鈴也は思った。
思えばこの1週間は、鈴也の人生においてもっとも賑やかな日々だった。紫炎がいて、貴子がいて、くだらないやりとりをして、言い争って。
誰かと協力して伏鬼をしたのも、初めての経験だった。力のない鈴也と協力しようなどという、奇特な伏鬼衆が他にいるはずもなかったのだ。
(ああ…そうか…)
不意に、鈴也は今、自分がおかれている状況に気がついた。
(寂しいんだ、俺…)
そういえば、修行に明け暮れるようになった貴子が離れに来なくなった時に、同じような感情を抱いたような気がする。
寂しいと感じるという事は、それまでの状況が楽しかったという事。そんな当たり前の事に、鈴也は今頃になって気がついた。それほどまでに、鈴也は「楽しい」という状況から遠ざかっていたのだろう。

「やぁ…ぼうや」

突然、背後から聞こえた声にも、鈴也の反応は鈍かった。ゆっくりと振り向いた先には、憎い憎い仇であるはずの、忌野童子の姿がある。
だが、鈴也の心には、恐怖も怒りもわいてこなかった。貴子も紫炎もいない今、万に一つとして鈴也に勝ち目がないにも関わらず。
「おやおやぁ？　今日はあのべっぴんさんはいないのかい？」
鬼の言葉に鈴也の奥歯が、きり、と音をたてる。忌野童子の持って回ったような言い方が、妙に勘に障った。

「うるせぇな…関係ねえだろ」
「けひひひひ！　ずいぶんやさぐれたもんだぁ…いい感じに腐ってきてるねぇ…」
陰の感情に包まれた今の鈴也の精気など、この鬼にとっては大好物に違いない。だが、そんなことも、もはや鈴也にはどうでもよかった。
「でもなぁ…まだもうちょっと、上があると思うんだよぉ…」
忌野童子の汚らしい笑顔が、さらに歪にゆがんだ。
「どういう事だ…」
「両親を失い…不当な扱いを受け…幼なじみとの実力と立場の違いを見せ付けられ…」
忌野童子は指を折りながら、鈴也のこれまでの境遇を数えていく。
「憎い仇には遠く及ばず…幼なじみを遠ざけ…頼みの綱にも去られ…」
どうやら、忌野童子はなんらかの方法で、ずっと鈴也の様子を伺っていたらしい。ついさきほどの、紫炎とのやりとりまで把握されている。
「寂しぃねぇ…やっと必要としてくれる人が現れたと思ったら、ただの餌だったんだから」
鈴也の傷をあえて抉るような、なぶるような口調。
「うるせえな…どうだっていいんだよ、そんな事」
「つれないねぇ…せっかく坊やに、お土産を持ってきたのにぃ…」
「お土産だと？」
「そうだよぉ…喜んでくれるといいんだけどねぇ…」
その時初めて、鈴也は忌野童子のトレンチコートが、以前より膨らんでいる事に気がついた。何か、大きな荷物をコートの中に隠しているように。
「ま…まさかてめぇ…」
「はい、どうぞぉ！」
トレンチコートが開いた。

「お土産だよぉ！」
どさり、と地面に落ちたのは。
「貴子えぇぇぇっ！！」
巫女装束に身を包んだ、鈴也の従兄妹だった。
「けひひひひひ！　い～い顔だぁ…坊やは最高だねぇ…」
忌野童子の声など聞こえないかのように、鈴也は貴子に駆け寄った。ぐったりとした体を抱き上げる。
巫女装束は土埃にまみれているものの、外傷はない。ただ、顔色だけが異様に青ざめていた。
「てめぇ…貴子に何を…」
「けひゃひゃひゃ！　だ～いじょうぶ、殺しちゃいないよぉ？　ただ、ギリギリまで精気を吸ってやっただけさぁ…なかなかだったよぉ、坊やに捨てられた絶望で、綺麗だった精気が俺好みに澱んじゃってさぁ…」
鈴也の顔から、血の気が引いて行く。
「健気だよねぇ…『あんたがいるから、鈴也がいつまでも幸せになれないの！』なんつって、必死で挑んできてさぁ…」
貴子は鈴也と別れた後、強敵である事をわかった上で、自分から忌野童子に戦いを挑んだ。八つ当たりともいえる感情をぶつけた、鈴也のために。鈴也のことになると感情を抑えきれない貴子の心は、怒りに満ち溢れていたに違いない。
『感情を昂ぶらせて鬼と闘うことは、悲惨な結果を生むことになるのよ』
そんな、貴子の言葉を思い出す。
「おまえ……何やってんだよ……」
こうならないために、貴子を遠ざけたというのに。

「なんで…俺なんかのために…」
「いひひひ！　坊やに一つ忠告しておいてやろう。鈍さは罪だよぉ？　必ず誰かを不幸にするもんさぁ」
にやにやと下卑た笑いを浮かべたまま、忌野童子が言った。
「不幸になるのが坊やなら、よかったんだけどねぇ、俺としては…」
「…なんで…貴子を…どうして俺を狙わない…」
「もちろん、その方が坊やが美味しくなるからさぁ」
さらり、と忌野童子は言ってのけた。
鈴也は確信した。忌野童子は、とことんまで鈴也の心を壊そうとしている。鈴也の心の拠り所となるものを全て奪いつくし、絶望に打ちひしがれた精気を吸う。目的はただそれだけだ。そのために鈴也の両親を殺し、いたずらに鈴也の前をうろつき、貴子を傷つけたのだ。
「もう…いいだろ…十分だろ？」
貴子の体を抱きしめたまま、鈴也が力なくつぶやいた。
「んん？」
「もう…そんな手間をかけなくても…俺は絶望感でいっぱいだよ…」
虚ろな声だった。
「俺は…いらない存在だとずっと思ってた…」
からん、と鈴也の手から刀が零れ落ちた。
「でも…いらないどころじゃない…いちゃいけないない存在だったんだ…」
鈴也の存在は、鬼を引き付ける。それだけの精気を持っている。それゆえに忌野童子に目をつけられ、両親は死んだ。そして今、貴子が危機に瀕しているのも、鈴也という存在があるためだ。
「鬼の餌としてしか役に立たないなら…もういい…さっさとやってくれ…」
（もういやだ。自分のせいで、大事な人間が傷つくなんて、耐えられない）

「あひゃひゃひゃひゃ！　堕ちた！　ついに堕ちたね坊やぁ！」
感極まったかのような、忌野童子の笑い声が夜空に響き渡った。
「そうだぁ、その言葉を１０年待ったんだ！　長かったよぉ…長かった！　ついに坊やの精気が、最高に俺好みの味になったんだぁ…」
忌野童子の陶然とした表情を見て、鈴也は気持ちが悪いと思った。こんな気持ちの悪い奴に吸われるぐらいなら、紫炎にありったけの精気を吸わせてやればよかった。味が落ちてしまう前に。
「じゃあ…３０分後に町外れの廃ビルまで来てもらおうかなぁ…」
「何を…言ってる…？」
「ちょっと野暮用があってねぇ…それを片付けてから、ゆっくり頂くよ…その前に、お嬢ちゃんを御堂本家に届けてやりな？　御堂と事を構える気はないからねぇ…」
忌野童子はそれだけ言い残すと、鈴也と貴子を置いてかき消すようにいなくなった。

辺りが突然、静寂に包まれた。
貴子を抱えたまま呆然とする鈴也。もはや、思考能力はない。貴子を御堂本家に届け、廃ビルに向かう。自分のやるべき事はそれだけだと思っていた。
「だ…め…」
静寂を破ったのは、鈴也の腕に抱えられた貴子の声だった。
「た…貴子…？」
貴子の顔色は依然蒼白だが、うっすらとその切れ長の目を開いていた。
「ご…ごめんね、鈴也…私…倒せなかった……」
鈴也はこれまで、貴子の口からこんなか細い声を聞いた事がなかった。
「貴子…お前…何で…」
「何…言ってるの……」

貴子はちょっと困ったように、眉を下げた。
「あいつが…鈴也を狙うから…でしょ…あいつがいる限り…鈴也が苦しむ…」
「な…」
鈴也の頭が、かくん、と下がった。
「そんなの…ほっとけばよかったんだ…」
鈴也の言葉に、弱々しく伸びてきた貴子の手が、鈴也のジャケットの襟を掴んだ。
「もう……ないって…決めたの…」
「何？」
「私は…もう…鈴也を見捨てないって…決めたの…」
鈴也には、貴子の言っている意味がわからなかった。誰も自分に関わろうとしなかった御堂本家において、唯一自分に話しかけてきたのが貴子だ。見捨てられた事などないはずだった。
「違う…修行を始めた時…私は鈴也を見捨てたの…」
「それは…」
「鈴也が寂しがってるのは知ってた…それでも…修行が楽しくて…」
話すうちに、貴子の目が潤み始めた事に、鈴也は気がついた。
「才能があるって…おだてられて…いい気になって…1人で泣いてる鈴也を見捨てたのよ…」
「貴子のせいじゃないだろ…」
鈴也は、ジャケットの襟を掴む貴子の手を握る。
「鈴也が出て行って…ずっと後悔してた…」
弱々しくではあるが、貴子が鈴也の手を握り返してきた。
「こうやって…握っておけばよかったって…」
鈴也が望んだのは、伸ばした手を掴んでくれる存在。だが、貴子は自らその手を離してしまった。無論、本人には完全に手放したつもりはなかった。ただ、少し手を離している隙に、鈴也が御堂本家を出て行ってしまったのだ。
「…鈴也にそうさせたのは…本家の人間…と、私…」

貴子の双眸から、ぽろぽろと雫が零れ落ちていく。
鈴也は思う。貴子が後悔する必要など、何もないと。貴子が自分を見てくれている事にも気づかず、自分が勝手に拗ねていただけなのだと。
「もういいから…帰って休め…精気が尽きかけてる…」
そう促すが、貴子は静かに首を振った。
「…鈴也…あいつの…言う事に…従っちゃだめ…」
鈴也はこの後、忌野童子の指示通り、廃ビルに向かおうとしている。戦うためなのか、己の身を差し出し、忌野童子の凶行を止めるためなのか、それとも…
「どうしても…行くなら…あの鬼を…悔しいけど…あの鬼の女を…」
息も絶え絶えの状態ながら、貴子は歯噛みするように言った。紫炎の力さえあれば、忌野童子と渡り合う事も不可能ではない。どうしても行くのなら彼女を連れて行けと、貴子は言っているのだ。
「ああ…わかった。わかったから、貴子は帰って休め…」
この一週間、常に背後に付き従っていた鬼の姿を思い浮かべながら、鈴也は虚ろな瞳でそう応えていた。

18（後書き）

死んでませんよ？

19

貴子を御堂本家に送り届けた時、伯父である錦三は驚くほど冷静だった。ひったくるように貴子の身体を受け取り、屋敷の奥に運ばせると、鈴也に向かって一瞥もせずに告げた。
「…消えろ」
立ち去れ、という意味でない事は、声の響きでわかった。伯父は自分を追い払いたいのではない。自分の存在そのものを消し去りたいのだ。
家名に泥を塗る存在である鈴也も、貴子が傷ついたという事実も。いくら次期当主として期待されるだけの素質を持っているとはいえ、貴子はまだ経験も浅い、新米伏鬼衆に過ぎない。彼女が簡単に伏滅できるような相手ならば、鈴也の両親が殺される事もなかっただろう。さらに言えば、鈴也の両親が死んだ時に、御堂の力を結集してその場で伏滅しているはずだ。
つまるところ、伏鬼の名門たる御堂家にとって、忌野童子は手を出すにはリスクの高い相手だった。だから錦三は忌野童子の追跡をせず、鈴也ら親子の存在を隠した。そんな鬼に貴子が敗れた事は、必然である。
錦三が問題にしているのは、貴子が忌野童子に敗れた事ではなく、貴子が鈴也の巻き添えを食ってしまった事だけなのだ。
「……わかりました…消えればいいんですね」
鈴也は錦三にそれだけを告げると、足早に御堂本家の屋敷から遠ざかって行った。

「もう…なんにもない…」
夜道を歩く鈴也の口から、ぽつりと言葉が漏れた。
自分のやっている事は、ちぐはぐで的外れなのだろう。
妄執に取り憑かれるように忌野童子を追い掛け回しておきながら、

実際には手も足も出ない。自分の事を気にかけてくれた貴子を邪険に追い払った挙句、結局傷つけてしまった。忌野童子に対抗する唯一の力であった紫炎まで、下らない意地で遠ざけている。

何がしたいのか、自分でもまったくわけがわからない。

「これじゃ駄々っ子だ…」

あれが欲しい、これが欲しいとわめき散らして、本当はそれを持っていた事にも気づかずに、かんしゃくを起こして大事なものを投げ捨ててしまった。自分だけが不幸のような顔をして、貴子の思いにも気づかずに。

「もういい……全部……終わらせよう……」

全てを諦めきったような表情だった。今の自分の命が、両親の犠牲によって成り立っている事も、貴子が何とか守ろうとしたものだという事も、鈴也の頭の中にはなかった。ただこれ以上、忌野童子の呪縛の中で生きて行く事が、できそうにないと思った。

鈴也の足は、力なく進む。忌野童子が指定してきた廃ビルに向かって。

そのビルは、感知能力の低い鈴也から見ても、異様な雰囲気に包まれていた。ガラスのない窓からは絶えず、どす黒い瘴気が漏れ出していて、気分が悪くなりそうだ。

忌野童子に指定された廃ビル——恐らくは彼の根城。

ガラス張りの扉を抜けると、中はさらにひどい瘴気が立ち込めている。ガラスの破片や、抉れた壁がゴロゴロと転がって、取り壊されていないのが不思議なくらいだ。もともとオフィスとして使われていた部屋なのだろう。よく見ると、デスクや電話の残骸なども落ちている。

思わず足を踏み入れるのをためらう鈴也に、聞き覚えのある粘ついた声が飛ぶ。

「やぁ…わが城へようこそ、ぼうやぁ…」
忌野童子はフロアの奥にある、粗末な椅子に座っていた。
トレンチコートの襟を立て、その奥から空洞のような、感情のない目がじっと鈴也を見つめていた。

目の前に、憎い仇がいる。ニヤニヤと、嫌な笑いを浮かべて。
「…これが、お前の望んだ結末ってわけだ…」
鈴也は、自分の声がひどくかすれている事に気がついた。今の鈴也に、怒りの感情はない。ただ虚無感があるだけだ。
「いやいやぁ…予定外さぁ……」
肩をすくめ、首を振る鬼。
「御堂に追い払われて、坊やを見失ってから１０年もかかったねぇ……それで見つけてみたらどうだ、妙な鬼がくっついてる上に、清々しい精気になってやがる。おかげで、また面倒な計画が必要になっちまったぜぇ…」
妙な鬼、というのは紫炎のことだろう。
「計画だと…？」
「そうさぁ…わざわざ危険を犯してまで坊やの前に姿を見せて…精気の味を落としてやったのさ…あの鬼の口に、合わなくなるようにねぇ…」
確かに、忌野童子と出会ってから、紫炎は鈴也の精気の質の低下を気にし始めた。それさえも、この鬼の仕組んだ事だったというのか。さらに、貴子を狙うつもりがあると匂わせる事で、鈴也に自ら貴子を遠ざけさせた。
「毎晩悪夢を見せて…少しずつ腐らせていった…ほんと、面倒かけてくれたよぉ…」
なるほど、と鈴也は思う。彼女と仲たがいさせることで、確かに鈴也の精気はさらに質が落ちたに違いない。何せ、再び孤独の淵に叩き込まれることになったのだから。
「後は、俺に挑んできたお嬢ちゃんの惨めな姿を見せてやった…い

やぁ、色々面倒だったぁ…」

忌野童子は天を仰ぐように、大きく息を吐いた。

「でもその甲斐あって…やっと美味そうな精気になったよ…嬉しいねぇ」

「一応言っておくが、大人しく吸わせてやる気はねえぞ？」

鈴也が口にしたのは、精一杯の強がりだった。鈴也の力が及ぶ相手ではないし、頼みの綱の紫炎もここにはいない。

「わかってるよぉ…待ってるんだろ、あいつをさぁ？」

にぃ、と耳まで裂けた忌野童子の口が、半月形にゆがむ。笑っているのだろう。

(こいつ…紫炎が来ると思ってるのか…？　来るわけないのに…)

鈴也は首をひねった。そもそも2人を仲たがいさせたのも、忌野童子本人のはずだ。

「ぼうやぁ、これが何かわかるかぁ？」

忌野童子はコンクリートの床の上に、無造作に何かを放り投げた。黒い布にくるまれた、棒状のものだ。黒布から、白い液体が染み出している。

それが何かはわからない。だが、黒い布には見覚えがあった。今日の夕方まで、何かというと自分の体に巻きついていた布だ。正確に言えば、巻きついていたのはこの布に包まれた「腕」だ。

「ま…まさか…」

ふらつく足取りで、鈴也は床の上のものに近づく。

「紫炎の……！？」

布の端からはみ出していたのは、白く細い指だ。間違いなく、それは二の腕あたりで切断された紫炎の右腕だった。

「くふふふぅ…あれほどの強力な鬼が、それはそれは惨めな姿だったぞぉ」

何が起こっているのか、鈴也には理解できなかった。先ほど別れ

た紫炎の腕が、なぜここにある？　なぜ忌野童子が、あんなに強い紫炎の腕を持っている？

「…紫炎がお前ごときに…」

慌てた鈴也だが、絶望感を抱くほどでもない。相手に気づかれないように、ゆっくりと呼吸を整える。

確かに切断された腕は痛々しいものの、それぐらい紫炎にとってはどうということはないはずだ。なぜなら、紫炎は鬼なのだから。鈴也は漠然とそう思った。それは予想などではなく、単なる希望的観測に過ぎなかった。

「まあねぇ…万全であったら…なぁ？」

「なに…？」

「いやね？　お前の精を思うがままに吸っておれば、俺ごときにやられる奴ではなかろうねぇ…」

忌野童子の言葉に、鈴也の眉がぴくりと跳ね上がる。もしかすると自分は、取り返しのつかない過ちを犯してしまったのではないか、と。

「どういう意味だ…？」

「ぼうやはさぁ、鬼がこの現世で力を保つのに、どれほどの精を要するか知ってるかぁ？　人間１人の精で、どれだけの力が保てるか？」

「知らないね。知りたくもないぜ、そんなこと」

嫌な胸騒ぎが、ぞわぞわと全身に広がっていく。ちらりと頭をよぎった疑念が、明確な形を取りつつあった。

「いひひひひ、鬼と契っておきながら、残酷なことを言うものだなぁ！」

おかしくてたまらない、といった表情で、忌野童子が哄笑する。

「教えてやろう……３日さぁ」

ぐらり、と世界が揺れたような気がした。

「人間１人の精を廃人になるまで吸い尽くして、ようやく３日よ」

鈴也の疑念は確信に変わった。

「奴はどれだけお前の精気を吸うたかねぇ？　…あれだけの鬼だ、必要な精気も多かろうなぁ？」
　目の前の鬼が、いびつな笑顔を見せている。鈴也は言葉を失っていた。
　紫炎が本気で精気を吸ったのは、最初の1回を含めて3回ほどだっただろうか。身の危険を感じた鈴也の提案により、それ以降はわずかずつしか吸っていないはずだ。鈴也は、紫炎がそれで満足していると思い込んでいたのだ。
　いったい、あの鬼の美女はどれだけ己の欲求を抑えていたというのか。一体自分は、どれだけ彼女を苦しめ、その力を殺いでいたというのか。
　鈴也の頭はぐらぐらと揺れ、絶望に膝が折れた。その場に崩れ落ちるように座り込んだ鈴也に、鬼はゆっくりと近づいてくる。
「勝手なものよなぁ、ぼうや。死なない程度に餌を与え、鬼の力を利用するかよ。奴にとって伏鬼に助力するのは、同族殺しに他ならぬというのになぁ…」
(なんてことしちまったんだ、俺は…『契約』だって、俺から言い出したのに…)
「鬼を人間の社会に縛りつけ、人間の都合を押し付け、用が済めば放り出す…我ら鬼よりよほど外道ではないかねぇ？」
「あ……ああ……」
　鈴也はいまや両手で顔を覆い、うずくまっていた。
「ほうほう、またしても美味そうな匂いだぁ。よほどの絶望を味わったのだな…どうだ、そろそろ死ぬ気になったかねぇ？」
　忌野童子は楽しくてたまらない、といった声で言いながら、ゆっくりと近づいて来るが、鈴也はうつむいたまま動かない。甲高く耳障りな声が、不思議なほど遠く聞こえた。
(紫炎……紫炎……俺が……俺のせいで……)
「へひっ…壊れたか？」
「し……え……ん……」

乾いた声が、虚ろに響く。

「呼んだか、鈴也」

絶望に彩られた鈴也のつぶやきに、鈴のような声が応えた。

２０

「呼んだか、鈴也」
凛とした声が、ガラスのない窓から響く。
そこには、月光を背に世にも美しい鬼が立っていた。白い髪が月の光を受けてキラキラと輝き、その神々しさは月の女神のようだ。
「し…紫炎っ！」
物音も気配も、まったく感じさせずに、紫炎はビルの中に入ってきた。
「お前…無事だったのか！？」
「大事無い」
事も無げに言ってのける紫炎。だが、その右腕は二の腕から先がなかった。
「お前…なぜここに…」
呆然と鈴也が問うと、紫炎はきょとん、とした表情を浮かべた。
以前と同じ、鈴也のお気に入りの表情だった。
「私が鈴也の守護者だからだが」
「え？」
言われてみれば、紫炎は鈴也の前から姿を消したものの、『契約』自体を破棄した覚えはない。
「お前…今までどこにいた？」
「すぐそばにいた。鈴也の視界の外に」
「ずっと俺の近くに隠れてたのか？」
紫炎は、さも当然というように、黙ってうなづいた。
「チッ……」
いまいましげに、忌野童子が舌打ちする。
「しつこいねぇ……さっき、実力差を見せてやったろうに……」
キュ、とタイル貼りの床が音を立てた。忌野童子が、両足に力を込めた音だ。それに対して紫炎の方は、すぅ、と音もなく鈴也の傍

らに移動する。
「紫……」
「動くな」
静かな命令は、忌野童子の口から発せられていた。それだけで、しゃがみこんでいた鈴也の全身が硬直する。
「ぐっ……！？」
「もう我慢の限界なんだよぉ…どれだけ俺を苛立たせたら気が済むんだぁ…？」
気がつけば、忌野童子の両目が金色に光っていた。鈴也が指１本すら動かせないのは、何らかの妖術を使っているせいらしい。
「すぐに片付けるからじっとしてなぁ、お前は俺の餌なんだからさぁ…」
忌野童子の視線は、紫炎に向いている。だが、鈴也にかかった術は解けない。
「違うな」
紫炎が言った。やはり精気が足りないのか、その声には張りがない。
「鈴也はお前の餌ではない」
紫炎が鈴也の前に立ちふさがり、警戒するかのように忌野童子が一歩後退する。
「私の『契約者』だ」
ずしり、と紫炎の言葉が鈴也の胸にのしかかる。必要最低限の精気すら与えられなかった自分を、それでも紫炎は『契約者』と呼んだのだ。
「……餌もろくにくれないのにかぁ？」
その問いには答えず、紫炎は床に落ちていた自分の右腕を拾い上げる。切断面をくっつけてみるが、繋がる気配はなかった。
「ほぉら見ろ…治癒力が落ちてるんだよぉ…精気が足りなくてなぁ…へひひ、今のこいつの精気じゃ、吸う気にもなれないだろぉ？」
今の鈴也の精気は、自らの短慮と忌野童子の策略によって、腐り

きっている。たとえからだが動いたとしても、紫炎の力になれるとは思えなかった。
「自分で汚しておいてよく言う…下手物食いが」
「へへぇ、言うねぇ……今度は右腕一本じゃ済まさねぇよぉ？」
しゃきん、と音を立てて、忌野童子の爪が一瞬にして伸びた。単なる爪ではない。太く、それでいて鋭い、立派な武器だ。
「しゃあぁっ！」
鋭い掛け声と共に、忌野童子が爪を振るう。以前の紫炎なら、軽々と受け止められた攻撃だ。だが、紫炎の身体は微動だにしなかった。

ざくり。

紫炎の左の肩口に、爪が深々と突き刺さっていた。しぶきのように、白い液体が宙を舞う。鈴也は、その白い液体が紫炎の血だという事に気がついていた。
「紫炎っ！　なんで…！？」
鈴也の前に立ちふさがった紫炎は、まさに棒立ち状態だ。敵の攻撃を防ぐ素振りも、避けようとする気配すらない。
「……無理だ」
「無理…？」
「今の私の力では、この下手物食いに抗うべくもない」
手も足も出ないから、何もしない。紫炎はそう言っていた。
ここ一週間、まともに精気を吸っていない。そんな状態では、立っている事すら困難なのではないか。
「ひゃあははははは！　ぶざまだなぁ！」

ざくり。
一度引き抜かれた爪が、再び突き刺さる。

「お前…そんな状態でなんで来たんだよ！」
泣きそうな顔で叫ぶ鈴也。
「……？」
「力も出ないのに…何で俺を助けに来るんだよ！　逃げろって！」

ざくり。

「…守護者だからだと言ったが」
平然と応える紫炎。
「やめろっ！！」
いつの間にか、鈴也の頬を涙が流れていた。

ざくり。

「俺は…俺はただ消えればよかったんだ！」
伯父の言うとおりに。

ざくり。

「俺にはお前に守ってもらう価値なんかない！」
自分を守るために、両親が死んだ。貴子が傷ついた。自分はただ存在するだけで、周りの人間を傷つける。紫炎が今傷ついているのも、自分が精気を与えなかったからだ。『契約者』であるにも関わらず。
だが、この美しき鬼は鈴也の叫びに、静かに首を振った。
「私にとっての鈴也の価値は…私が決める」
「しぶといねぇ…ああ…うっとおしぃ！」
ざくり。

気がつけば、紫炎の黒衣からは、とめどなく白い液体が流れていた。これ以上攻撃を暗い続ければ、いかな鬼とて無事ではすまないはずだ。
「もういい、やめろ紫炎！　俺のことはいいから、逃げるんだ！！」
鈴也の悲痛な叫びが聞こえないのか、紫炎は忌野童子の前をどこうとはしない。千切れた左腕を口にくわえ、無防備にただ、鬼の攻撃の前に身を晒している。
忌野童子の爪が紫炎の肉をえぐり、白い異形の血を撒き散らせ、白磁のようだった肌はもはや白い血でぬらぬらと光り、血液を失ったことで透き通るようになっていた。もしかすると、もう逃げることすらできないのではないだろうか。

——死ぬ……紫炎が死んじまう……！

いかな屈強な鬼といえど、力の大半を封じられた以上、紫炎が力尽きるのも時間の問題だった。
「同じ事だ……」
血にまみれた口元が、かすかに動いた。
「鈴也なくして…人の世になど留まれん……」
紫炎の肩口の肉が勢いよく弾け飛び、白い血煙が靄のように室内を埋め尽くしていく。
「鈴也を失うも、ここで死ぬも……私には同義」
「なんで……なんでそこまで……」
凄惨な姿をさらす紫炎を何とかしようと、立たぬ足腰を叱咤する。だが、鬼の術にかかった体は思うように動かない。
「……食えぬのだ……鈴也以外の精を体が受けつけない……」
「え……？」
鈴也は、紫炎が単にえり好みをしているだけだと思っていた。質

の低い精気など口に合わない、ただそれだけの事だと。
だが違った。紫炎は、鈴也の精気しか取り込めなくなっていたのだ。鈴也がいなければ、この美しい鬼は生きていけないのだ。
「う〜ん…しぶといねぇ…面倒だよ…そろそろ死なんかねぇ？」
忌野童子の爪が、どす、という音と共に紫炎の背中にめり込んだ。ごふ、と苦しげにうめき、紫炎の口から白い液体があふれ出て、鈴也の頭を濡らす。
（血…母さん……）
自分を抱きしめたまま、背中を貫かれた母の姿が、鈴也の脳にフラッシュバックする。
「あ……ああああああああ！！！！！」
鈴也の口から絶叫がもれた。
（また、また死んでしまう。俺を守るために、また大事な人が…）
がたがたと震えながら、ゆっくりと、本当にゆっくりと鈴也の右手が持ち上がる。握った刀は、今にも取り落としそうだ。
だが、落とさなかった。闘う力を持たない自分が、たった一つできることを為すために。
「くっ…こ、この……」
「おやおやぁ…ぼうや、どうしたのかねぇ…？」
忌野童子の口調は変わらない。自分の絶対有利が動かないと信じているからだろう。だが、鈴也は聞き取った。自分の呪縛を打ち破ろうとする鈴也の姿を見て、鬼の声にわずかな動揺が混じったのを。

２１

「この……っ！」
　ぴくり、と鈴也の指が動いた。明らかに、自らの意思で。
　動かせる——鈴也の全身を、安堵と歓喜が駆け抜ける。まだ、自分達にはこの窮地を脱する方法が、残されている。
「このっ…………！」
　鈴也は自らの意思を全て右腕に込め、刀の柄を逆手に握り直す。
「……この、食道楽があぁぁ！！！！」
　鈴也は震える体にあらん限りの力を込めて、刀を自分の腿に突き立てた。足に激痛が走る。だが、それと同時に鈴也は、自分の足が感覚を取り戻していることを確信した。
「いってええええ！！！！」
「なぁんだぁ…？」
　自らの声に弾かれるように、鈴也は立ち上がっていた。何が忌野童子の呪縛を打ち破ったのかはわからない。そんなことはどうでもいい。重要なのは、鈴也が自分の意思で立ち上がっていることだ。あとは、もう少しその足を動かせばいい。
「…何をしている」
　忌野童子の攻撃から鈴也をかばいながら、呆然と紫炎がつぶやく。その声を無視して、鈴也を足を引きずり、ゆっくりと歩み寄る。いまだ自由にならない腕を必死に持ち上げ、手のひらで紫炎の頬を包んだ。
「すず……んむっ！？」

　言葉をさえぎるように、紫炎と鈴也の唇が重なった。

（殺させない…俺も死ねない…好きなだけ持ってけ！！）

欲情した人間の精気がその質を増すのは、種としての生存本能が高まるからだ。ならば、死に瀕した状態なら？　種ではなく、個としての自分の生存本能に、鈴也は賭けた。
「なんだとぉ！？」
忌野童子の顔が、驚愕に彩られていく。
みるみるうちに、鈴也の体から力が抜けていく。崩れそうになった鈴也の体を支えたのは、紫炎の腕だ。ちぎれていたはずの右腕もいつの間にか再生し、両腕で鈴也を抱きしめている。もちろん、それ以外の傷もすべて、綺麗にふさがっていた。
紫炎はゆっくりと唇を離すと、ほう…と悩ましげな息を吐く。
「ま…満足した…かよ…」
「ああ……たまらない……たまらないな、鈴也は」
うっとりと閉じられていた紫炎の目が、すぅ、と開いた。その双眸は鬼の力を示すように、真っ赤に輝いていた。抱き合う2人を包むのは、ゆらゆらと立ち上る紫の炎。
鈴也は、賭けに勝った。それはもう、大勝――いや、むしろ勝ちすぎと言っていい勝ちっぷりだった。

「気に入らないねぇ…せっかく腐らせた、ぼうやの精気がさぁ…」
忌野童子の目が、殺意に満ちていく。これまでのような遊び半分ではない、本物の殺意、そしてどす黒い鬼気。
だが、鈴也の守護者はその強烈な鬼気を、平然と受け流した。赤い輝きが漏れる眼をすぅ、と細め、ぺろり、と舌で唇をなめる。
「礼を言おう、忌野童子とやら」
「あぁ？」
「貴様の策がもたらした、極上の精…ああ、私はここに、最上の伴侶を得た」
鉄面皮をかくや、という無表情な紫炎の頬が、ほんのりと紅く染まっている。陶然とした表情と口調で、自らの体内を巡るものを味わっているかのよう……鈴也の精気を。

「人の獲物を横取りしておいて、言ってくれるねぇ…あぁ！？」
忌野童子の爪——鈴也の母を貫いた爪が、紫炎を襲う。スピード、タイミングともに、完璧な一撃。さきほどまでの、なぶるような攻撃とは勢いが違っていた。
「くふっ」
微笑のような、小さな吐息を漏らした紫炎の繊手が、軽々と忌野童子の手首を掴んでいた。間近で見ていた鈴也にさえ、何が起こったのか判らない速さだ。
「くふふふふ、あぁ…愉快だ」
今度の声は明らかに、笑いだった。紫炎の唇から、笑い声が漏れている。明らかに、これまでの紫炎と様子が違っていた。
（なんか…酔ってねえか？）
へたりこんでいた鈴也が、そんな感想を抱いた次の瞬間、ぶちん、と奇妙な音がした。
「ぎゃがぁっ！？」
それは、悲鳴だった。忌野童子の手首から先がなくなっていた。いや、手首は紫炎の手の中にあった。力任せに、引きちぎったのだ。
「感謝はしているが…許せぬ事もある」
口元だけは笑みにゆがめたまま、紫炎は同族を睨む。
「なんだぁ…てめぇ…何者だぁ…？」
忌野童子の口調に、明確な動揺が走る。これまでの永い生涯において、自分をこれほどまでに圧倒した存在を、彼は見た事がなかった。
「ありえねぇ…ありえねぇよぉ…！！」
驚愕を覚えながらも、忌野童子は攻撃態勢を整えようとしていた。自らの角を掴み、ずるずると引き抜いていく。どういう仕組みなのか、引き抜いたそれは巨大な刀だった。
「てめぇみたいな鬼はぁ…知らなねえぞぉ！！」
口調は間延びしているが、斬撃は鋭かった。おそらく、かつて紫

炎の腕を斬り落としたのはこの武器だろう。直感的に、鈴也はそう思った。
「くふっ…あほう」
あの時と、極上の精気がみなぎる今とでは、状況が違う。絶対の自信をもって振り下ろされた忌野童子の角刀は、紫炎の細い指２本で受け止められていた。
「な…ぁ？」
「我が名を知らぬは無知が故。私の知った事か」
ぱきん、という甲高い音とともに、忌野童子の刀――鬼の象徴たる角は、飴のように、ぽっきりと折れた。
「もういい…去ね」
折れた刃をつまむ左手はそのままに、残った右手が忌野童子の頭部を掴んだ。バスケット選手が、ボールを片手で掴むような、無造作な仕草だった。
「あぎっ…！！」
奇怪なうめき声。恐らく紫炎の細い五指には、想像を絶する力が込められている。なぜなら、その指先はメリメリと嫌な音を立てながら、忌野童子の頭に食い込んでいたから。
「おまえは…おまえはいったい…何もの……」
「去ねと言った」
びしゃっ。
「ぶぎゃあっ！！！」
濡れた音が響き渡り、黒い液体が飛び散った。紫炎が、忌野童子の頭を握りつぶしたのだということに、鈴也は遅まきながら気がついた。気がつくのに時間がかかったのは、そんな倒し方が存在すること自体、鈴也――ひいては伏鬼衆の想定外だからだ。
(我ながら、とんでもない奴と契約しちまったもんだ…)
精気を限界近くまで吸われ、朦朧とした意識の中で鈴也は思った。勘違いから自分と契約してしまったこの美しい鬼は、どうやら規格外の力を持っているようだ。同じ鬼である、忌野童子が恐怖を感じ

るほどに。
「鈴也」
気がつくと、紫炎が鈴也に向かって、右手を差し伸べていた。つかまれというのだろう。
「できれば…逆の手にしてほしい」
差し出された手は、鬼の頭を握りつぶし、返り血で真っ黒に染まっていた。それを見ながら、鈴也は「鬼って個体によって血の色が違うんだなぁ」などと、場違いなことを考えていた。
紫炎は気にした風もなく、つまんでいた刃をポイ、と放り出し、左手を改めて差し出してくる。その手を掴み、ようよう立ち上がる鈴也。
「ところで紫炎さ…さっき言ってた『許せないこと』って何だ？」
一瞬、鈴也の問いの意味がわからず、きょとんとした表情を見せる紫炎。凄絶な美貌に似合わぬこの表情を、鈴也は何となく気に入っている。噂に聞く、“ギャップ萌え”というやつだろうか。
「感謝してるけど許せない、って言ってたじゃん」
「無論、許せん。彼奴は鈴也の体に傷をつけた」
紫炎は鈴也が自らの刃を突き立てた足を指差した。
「いや…これ、俺が自分でやったんだけど？」
「彼奴のせいで傷ついたことに変わりない」
心なしか、鈴也にしかわからないほどわずかに、ムスッとした表情だった。
「あの雌との約定ごとき果たせないとは、私の『ぷらいど』が許さない」
『約定』というのは、恐らく貴子と交わした「鈴也をちゃんと守るんでしょうね」という言葉の事だろう。
「また、変な言葉覚えたなぁ…」
苦笑いしつつ、鈴也は紫炎と共に帰路につく。紫炎に肩を借りて、というのがいささか格好がつかないが、落ちこぼれの自分としてはこんなもんだろう、とも思った。

とにかく、両親の仇討ちは果たされた。自分の手による結果ではないけれど、そんな事はどうでもいい。これで両親の魂が救われるとも思わないし、御堂本家が自分に対する態度を改めるとも思えない。

ただ、妄執だけを胸に生きてきた、空っぽの自分に対するけじめにはなるだろう。これからは一人じゃない。空っぽなら、今日から埋めていけばいいだけのことだ。

少なくとも、自分に肩を貸してくれている美しい鬼は、自分の心を満たす存在たりえるのだと思う。そして恐らくは、貴子も。

今はそれでいい。これからのことは、これから考えればいい。

足は痛み、精気の欠乏によりふらふら…満身創痍の様相ではあるが、鈴也の心は不思議と晴れやかだった。

落ちこぼれの自分のそばには、いつも最強の美鬼がいる。

それだけは、間違いないのだから。

21（後書き）

あっけなすぎたか…

22

「ちょっとあんた、いい加減にしなさいよ！！」
鈴也のマンションのリビングで金切り声を上げるのは、御堂貴子。
その声を涼しい顔で受け流し、鈴也を抱え込むのは最強の鬼、紫炎。
貴子はしばらく休んだだけで、回復したようだ。復調するなり、
鈴也の部屋に押しかけて紫炎と一戦を開始してしまった。
「鬼のくせに、伏鬼衆を相手になれなれしくしてんじゃないわよ！
！」
鈴也に対する後ろめたさを告白したからなのか、その執着心は以前に増して大きくなっているようだった。そして、それは紫炎も同じだった。
「うるさい、人間の雌」
「誰が雌よ！！　鈴也を離せって言ってんでしょ！！」
恒例となりつつある、貴子と紫炎の諍いを前に、鈴也はなすがままを決め込んでいる。自分よりはるかに強い2人のケンカに割り込むなど、自殺行為もいいところだ。
「断る。鈴也は私のだ」
「勝手なこと言ってんじゃないわよ！！　鈴也は御堂の人間なんだから、御堂家次期当主の、わ、わ…わたしのよ！！」
「…ちゅ」
「人が話してるそばから何キスとかしてんのよ！！　離れろっ！！」
「…おやつ」
(うーん、どうでもいいけど、俺の意思はどこにあるんだろうか…
…まぁでも、御堂家の駒になるぐらいなら、おやつの方がマシかなぁ…どっちもどっちとも言えるけど)
2人ののしりあいを聞きながら、鈴也はぼんやりとそんな事を考えていた。

鈴也の両親を殺した鬼は滅んだ。結局、鈴也自身が手を下すことはなく、したがって御堂本家からの評価が上がるようなこともなく、鈴也の立場はこれまでと何一つ変わらなかった。もちろん、貴子の計らいによって、紫炎の存在は徹底的に隠匿された。どこまで隠し通せるかはわからないが、少なくとも現時点で御堂本家は、これまで通り鈴也の存在を黙殺することに決めたようだ。

ただ一人の例外を除いて。

その頃――

「長らくお世話になりました、っと！」

一人の女性が御堂本家の門扉を開き、踊るような足取りで飛び出していた。

歳の頃は２０代の半ばといったところだろうか。顔立ちは怜悧な雰囲気を持っているのだが、満面に浮かべた笑顔がその印象をぶち壊している。その表情を言葉にすれば「嬉しくて仕方がない」とでも言った雰囲気だった。

手には大きな旅行カバンを持っている。服装は、御堂本家では珍しい洋装。丈の長い紺のワンピースに、白いエプロンドレス。いわゆるメイド服というやつだ。もちろん、ちまたのメイド喫茶に溢れているような、安っぽい仕立てのものではない。

「ふう…やっと出て来れた！」

彼女の名は桐原早紀。誰あろう、御堂本家の家政婦である。正確には、３０分前までは、だが。

「長かったわぁ…あれから3年、お金も十分たまったし、円満退職もできたし…」

聞く者とてないまま、彼女は楽しげにつぶやいている。つまり独り言である。

「こんな長い間…あなたを独りにしてしまった早紀を、どうかお許しくださいね…」

祈るようなポーズを決め、さらにはグッと拳を握りしめる。

「今行きますから、待っててくださいね、鈴也坊ちゃま♪」

彼女はまるでスキップするかのように、軽やかに歩き出した。向かうのは、鈴也の住むマンションの方角だった。

鈴也を無視しない、ただ一人の例外――それは、貴子のことではない。

新たななる波乱の予兆を含みながら、本章の幕とする……。

22（後書き）

これにて第1部完結でございます。
お付き合いいただいた方に多大なる感謝を。
第2部に関しては…まあ反響があれば考えるという事で。今は空っぽです。
お疲れ様でした。

第2部開始にあたって（前書き）

特に読まなくてもいい事なんですが
ちょっとお伺いをたててみたいな…と
思って。

活動報告でもいいんですが、あんまり見る人
いないかな、と思いまして。

第2部開始にあたって

拙作「落ちこぼれと美鬼」をご覧頂いている皆様。

今更ではありますが、この作品は私にとって
「俺ってライトノベルとか書けるのかな？」という
習作のような意識で書き始めたものです。

なので、自分的にかなり実験的な試みも
おりまぜていくことになります。

結局何が言いたいのか、というと、
ちょっと書き始めてみた第2部が、第1部とずいぶん
ノリが違ってきている、という事ですね。

書いているうちに変わってきたんじゃなくて、
「ライトノベルってもっとライトなんじゃ…？」という
意識に基づく路線変更といいますか。
「どっちの方向が、より受け入れられるのか」という
実験といいますか。

読んでみて「これはないわ～」とかご意見がありましたら
感想等でご一報いただけると助かります。
反応がなければ…このまま行く…と、思います。

それでは、今後も拙作をよろしくおねがいします。

第2部開始にあたって（後書き）

というわけで、次から第2部をはじめます。

といっても、第1部の直後からスタートなので、そこから読んでもわからないかもしれませんが…

第2部　1（前書き）

それでは、第2部スタートです。

第2部　1

「これは一体、どういう事でしょうか、鈴也坊ちゃま？」
　ある晴れた日の昼下がり。
　とは言っても、鈴也が紫炎の力を借りて、仇敵である忌野童子を倒してからまだ1日しか経過していないのではあるが。
「いや…だから、あのね…」
　鈴也は紫炎と『契約』を交わした翌日を遥かに越える、多大なる当惑の最中にいた。

　場所は慣れ親しんだ、鈴也自身の部屋。そこにいるのは、鈴也と、彼と『契約』を交わした鬼の美女、紫炎。そして彼の従兄妹にあたる御堂貴子。
「質問に答えてください、ね？」
　自宅リビングに仁王立ちし、鈴也の部屋のドアノブを握っているのは、エプロンドレスを着た怜悧な美貌を持つ女性。その名を、桐原早紀という。
　早紀が鈴也の寝室のドアを開け放ち、その中で展開していた光景を見たのが今から2分前だ。その瞬間から姿勢は1ミリたりとも動いていない。まるで硬直したかのように立ち尽くしながらも、視線と口だけが動いている。
「え～と、その…だから…」
「『だから』はもう伺いました。私が聞いているのは、そんな事ではありませんよ？」
　早紀が首を少しだけ傾げながら、にっこりと微笑んだ。

　ベッドの上に座っている鈴也は、トランクス1枚の上にTシャツを着た、寝巻き姿。その首に両腕を回し、しなだれかかるように抱きついているのは、白髪赤瞳を持つ絶世の美女、紫炎。紫炎の腕を

鈴也から引き剥がそうとして、勢い余って鈴也に身体を押し付けてしまっているのは、早紀の元雇用者である御堂錦三の1人娘、貴子。
紫炎を覗く2人の表情は、死刑台に上った囚人よりも青ざめていた。
「おかしいですね…私は鈴也坊ちゃまを、このようにお育てした覚えは、ありませんのに」
どうやったらこの笑顔から、こんな冷たい声が出るのだろうか、と思わず鈴也が現実逃避してしまいそうな、そんな声音だった。
「このように…って？」
現在の自分の状況を省みることも忘れ、鈴也は訊ねる。
「こんな昼日中から、ベッドに2人も女を引っ張り込むような、そんな爛れた男性に育てた覚えはない、という意味ですが？」
「誤解だよっ！！」
鈴也の叫びには、何の説得力もなかった。現状、下着姿で女性2人に抱きかかえられているのだから、言い訳のしようもない。
「あの…早紀さん…なんでここに？」
ようよう訊ねたのは、貴子だ。彼女の知るところによれば、早紀は自分の家の家政婦である。父・錦三の命もなく、この部屋を訪れるはずはない。そして、錦三がそんな命を下すはずもない。なぜなら、錦三にとって鈴也という存在は、いない事になっているのだから。
「愚問ですよ、貴子さん」
早紀の声は相変わらず冷たいままだ。
「え？」
貴子が疑問を持ったのは、早紀の自分に対する呼称。これまで早紀は、貴子の事を「貴子お嬢様」と呼んでいたはずなのだ。それが変化したという事はつまり、貴子と早紀の関係性が変化したという事を意味している。
「私は本日を以って、御堂家の家政婦を辞して参りましたので」
「それはまた…どうして？」

今度の質問は、鈴也からだ。紫炎は、鈴也の首にすがりついたまま、目を閉じている。恐らく、現状起こっている出来事について、まったく興味がないのだろう。
「どうして…ですって…？」
くい、と早紀の細い眉が跳ね上がった。
「決まってるじゃありませんか！　以前のように、付きっ切りで鈴也坊ちゃまのお世話をするためです！！」
「はぁ！？」
今度は、鈴也と貴子の声が綺麗なハーモニーを奏でた。
桐原早紀は、１２歳の頃から伏鬼の才能を見込まれ、伏鬼衆の名門、御堂家の本家邸宅で住み込みで修行をしていた女性である。彼女が１４歳の時に鈴也が御堂家に連れ戻され、それ以降は鈴也専属の家政婦として面倒を見てきた。６歳から１４歳までの8年間寝食を共にし、鈴也に一般的な教育と、わずかばかりの伏鬼の教育を施した人物でもある。

「それにしても、ひ…久しぶりだね、早紀さん…」
何とか話をそらそうと、そう告げる鈴也。早紀は鈴也にとって、育ての親とも言える存在であり、まったく頭が上がらない。
早紀と一緒にいた頃の鈴也はとにかく無気力だったので、悪戯をして叱られた、というようなトラウマがあるわけではないのだが——とにかく早紀には迫力がある。その怜悧な目でじっと睨まれると、抗う力が根こそぎ奪われてしまうのだ。
「そうですね…坊ちゃまが早紀を捨てて出て行ってから、３年になりますか」
「いや…捨てるとかそういうんじゃ…」
「坊ちゃまの世話をする事だけが生きがいだった私を捨てて、坊ちゃまが出て行かれてから3年になりますすね？」
「そう…だねぇ…」

鈴也は抗弁をやめた。何を言っても無駄だと思ったから…あるいは、８年間の生活の中で染み付いた、早紀への対処法が反射的に出たと言ってもいい。

「ご立派になられて…」

ちらり、と早紀が鈴也の下半身に目を向ける。美女と美少女に密着されて、何の反応も示さない17歳男性がいるはずもなく。

「どこを見て言ってるのかは、聞かないでおくよ…」

もそもそと、ベッドわきに放ってあったスウェットを手繰り寄せ、身に付ける鈴也。

「ところで…先ほどから坊ちゃまの首にかじりついている、そちらのクソアマはどこのどちら様でしょう？」

ついに来た、と鈴也が身構える。

貴子がこの部屋にたびたび来ている事は、恐らくは早紀も知っている事だろう。貴子自身が隠しているわけでもないし、御堂家現当主も周知の事なのだから。

だが、紫炎の事は別だ。その正体もここにいる経緯も、全て御堂家には隠している。

そして、自主引退状態とはいえ、早紀自身も優秀な伏鬼衆である以上、事情を明かす事はできそうもない。

「えーと…彼女はその…」

「彼女……？」

ぎらり、と早紀の眼光がさらに鋭くなる。恐らくは何か勘違いをしている。そう直感した鈴也が素早く首を振る。

「…いや、そういう意味の『彼女』じゃなくて…」

ある意味では、恋人以上の存在とも言えるのだが、そんな事はもちろん言えない。

その時、ぱちり、と紫炎の片目が開いた。

「鈴也……私は空腹だ」

いかにも空気を読まない一言が、紫炎の口からこぼれる。

紫炎からすれば、不満もあるだろう。今日はまだ、一度もまとも

に精気を吸わせてもらっていないのだ。吸おうと思ったところに貴子が乱入してきて、そのままうやむやになっていたかと思ったら、第2の闖入者まで現れてしまった。

「もう待てないぞ」

返事をする間もなく、紫炎の唇が鈴也の唇に重なった。

その瞬間、鈴也は室内の温度が下がるのを体感した。

第2部　1（後書き）

「ライトノベル」を目指してみます…

「覚悟はよろしいですか、そこのクソアマ」
早紀の一言とともに、彼女のスカートが翻ったかと思うと、次の瞬間には、びしり、と紫炎の前に刃が突きつけられていた。早紀の手に握られた薙刀の刃が。彼女は常に、そのふわっとしたスカートの中に、折り畳み式の薙刀を隠し持っているのである。
「ひっ！」
思わず貴子が飛びのいていたが、鈴也には反応すらできない速度だった。だが、しばらく遅れてようやく状況を把握する。
「ちょ、ちょっと待って、早紀さん！」
鈴也が刃を押しのけようとするものの、ぴくりとも動かない。ちなみに、刃を突きつけられている張本人は、涼しい顔で鈴也の口元をぺろぺろとなめている。精気の残りかすでもついているのだろうか。
「いいえ、待てません。まったくもって度し難い行為ですよ、このクソアマ。この私でさえ、寝ている坊ちゃまにしかできなかった事を平然となさるなんて」
「ちょっと待って、それ初耳なんだけど！？」
「坊ちゃまが6歳の頃から毎日、深夜1時の日課でしたが何か？」
さらり、と鈴也の幼少期における、比較的重大な事実が明らかになる。もっとも、反応したのは鈴也本人と貴子だけだが。
「……早紀さんずるい……」
「何か言ったか貴子？」
「…べ、別にっ！」
それはそれで気になる発言ではあったが、ここはあえて気にしない事にして、鈴也は改めて早紀を向き直る。同じように早紀を見た貴子が「ひっ」と息を呑んだ。
「ちょ…ちょっと鈴也！　早紀さんマジよ？」

慌てて貴子が、鈴也の耳元に囁いてくる。
「いや、見りゃわかるけど…」
「そうじゃなくて、武器に霊力込めてるって言ってんの！」
「え？　霊力って…」
伏鬼衆同士の戦いでもないかぎり、武器に霊力を流す事にはあまり意味がない。伏鬼衆が武器に霊力を流すのは、あくまで鬼と戦うための手段でしかないのだ。
「つまり…早紀さんは…」

「覚悟なさい、このメス鬼が！！」
「わあ！　やっぱバレてる！！」

風を切る音と共に、刃が振り下ろされる。正確に、紫炎の首を狙った必殺の一撃だ。
「…む？」
一瞬、手を伸ばしかけた紫炎だったが、とっさに状態をのけぞらせる。間一髪のところで、刃は空を切った。
貴子や忌野童子の攻撃すら、軽々と手で止めて見せた紫炎が、避けるのが精一杯だったのだ。その攻撃がいかに鋭かったか、わかろうというものだ。
「待って、待ってよ早紀さん！」
鈴也としては、紫炎を伏滅されても困るし、早紀が返り討ちにあってほしくもない。自分とは別次元の力を持った2人よる争いが、どういう結果を生むかなど、鈴也には見当もつかないが……部屋の中で暴れられてもまた、困るのだ。
紫炎が自分から攻撃するとは思えないので、ここは早紀に踏みとどまってもらうのが先決といえた。
「いえ、待ちません。早紀は、これ以上ないほど怒りに満ちているのです」
「そのようで…えーと…理由は…？」

「お心当たりはございますか？」
問われて鈴也は、首を傾げるしかなかった。思い当たらないのではない。心当たりが多すぎて、どれの事だかわからないのだ。
「貴子がうちに来てる事？」
「そんな事はどうでもいいです。何をしているかにもよりますが」
「何もしてないわよっ！　しかもどうでもいいって…」
顔を真っ赤にしながら、慌てて口を挟んでくる貴子だったが、当然のように早紀はそれを無視した。３人で過ごした時間が長い事もあってか、貴子も早紀にはあまり強くは出られない。
「紫炎がうちにいる事…？」
「紫炎というのですか、このメス鬼は。それはそれで大事な事ですし、お２人の関係性についても問いただしたい事はございますが…」
「えーと…じゃあ、紫鬼が…キスした事とか…」
それは2番目ですね」
「それも大変由々しき問題です…が、恐らくは食事の一環であろうという事で今は置いておきます。早紀の怒りはそんな事ではないのです」
さすがに早紀は伏鬼衆の一員だけあって、理解が早い。これまでのやりとりで、鈴也と紫炎が『契約』関係にある事を見抜いているようだった。
だとしたら、なおさら怒りの理由がわからない。
「え…じゃあ…何？」
だんっ、と早紀は薙刀の柄を床に叩きつけた。かなり苛立っているようだ。だが鈴也には、下の階の住人に対する迷惑を顧みている余裕はない。
「3年ぶりの再会だというのに、坊ちゃまはなぜ私の胸に飛び込んで来ないのですかっ！？」
早紀が怒っている理由は、鈴也が予想していたより遥かに低次元

のものだった。
「……はい？」
「昔は何かと言うと、泣きながら私の胸にすがってくれたのに…」
「何年前の話をしてるんだよ！」
「私が買い物から戻ると、『早紀さあああん！』と駆け寄ってきて、そのまま私の胸にすりすりと…」
「やめてくれえっ！」
真っ赤になって叫ぶ鈴也。確かに、そういう時期もあったので、明確に否定できないのも事実ではあるのだが。両親を失い、御堂に引き取られたばかりのあの頃——毎日が寂しくて、誰かのそばにいたくて仕方がなかった。
「ちょっと鈴也…どういう事？」
隣の貴子からも、不穏な声が。もちろん鈴也としては、それどころではない。このままでは、自分の恥ずかしい過去赤裸々に暴きつくされてしまう。
「早紀さん、俺もう17なんだけど！」
「ええ、早いものですね。早紀ももう25になりました」
「いやいや、そういう話じゃなくて…」
「あの頃より、胸もずいぶんサイズアップいたしましたよ」
「聞いてねえよ、そんな事！！」
「わ、私だってねえ…！！」
「張り合うな、貴子っ！」
話は光の速度でわき道へ逸れていく。
ふと気がつくと、黙っていた紫炎までもが鈴也の手を掴み、自分の胸に引き寄せようとしていた。
「お前もやめろっつーの！」
「鈴也は女の大きな胸が好き…これも研究の成果」
ちくしょう、こいつまた俺のエロ本チェックしやがったな！！
鈴也は心の中で叫ぶ。
「判ってます坊ちゃま、2人の前で恥ずかしがっているんですね。

早紀は気にしません、さあどうぞ、９０センチに到達した私の胸へ」
「もうホント勘弁してください！！」
思わず鈴也は、３人に向かって土下座して叫んでいた。

「坊ちゃま、お茶が入りました」
ぐったりとダイニングテーブルについた鈴也の前に、紅茶のポットとクッキーが出てきた。どうやらティーセットから持参したらしく、見覚えのないカップとポットだ。
ちなみに、鈴也の向かいに座った貴子と、鈴也の隣を陣取っている紫炎の前には、水道水の入ったグラスが置かれている。紫炎はまったく気にした様子もないが、さすがに貴子は口元を引きつらせていた。仮にも元雇用主の娘に、この対応はないだろう、とでも言いたげに。
「でさ…早紀さん…」
結局、あの後鈴也は１５分もの間、頭を早紀にかき抱かれ続ける羽目に陥った。自称するとおり、１０年前よりはるかにサイズアップした胸の感触をいやおうなく味わった鈴也は、続けて質の高まった精気（なぜ高まったかは割愛する）を紫炎に吸われ、最後になぜか貴子に殴られかけた。さすがに、そこまで食らう道理はないので、必死で避けたが。
「何でしょうか、坊ちゃま？」
「できればその『坊ちゃま』ってのは、止めてほしいんだけど…」
「お断りいたします。『坊ちゃま』と呼ばれて恥ずかしそうな、坊ちゃまの顔がたまらないので」
「くっ…！」
相変わらず強敵だ、と鈴也は歯噛みする。
早紀と貴子を除く人間にことごとく存在を無視されて過ごした８年間。もちろん、自分の面倒を見てくれた早紀は鈴也にとって、大事な存在だ。ここまで自分を素直に愛してくれた人物は、他にない

のだから。鈴也としても、早紀に対してある種の愛情と愛着を持っているのは間違いない。だが、同時に天敵でもあるのだ。
それ以前に、彼女の愛情表現がもっと一般的なものならば、鈴也もここまで悩む必要はなかったのだが…。

第2部　2（後書き）

早紀の携帯用薙刀（笑）の仕様を「折り畳み式」に統一しました。

そんなものが実際に存在するかどうかは知りませんが……まあ、ないでしょうね。

強度的にも問題ありそうですし。

話の内容には変更ありません。

第2部　3（前書き）

ちょっと楽しくなってきたので、
もうちょいこのやりとり続けていいですか…？

第2部　3

鈴也は思う。早紀の注ぐ愛情は、過剰を通り越して異常であった、と。

たとえばまだ幼い頃の話だが、早紀に添い寝を頼んだ事があった。いや、厳密に言うと添い寝ではなく、「できればでいいんだけど、眠るまで傍にいてくれませんか…」と、かなり控えめにお願いしただけだ。両親を失い、早紀以外の誰からも相手にされない生活の中、どうしようもなく寂しくなった夜の事だった。すると早紀はにっこり笑って、いそいそとエプロンドレスを脱ぎ始め、全裸で鈴也の布団に潜り込んできたのである。その時は違和感を感じるよりも、人肌の温もりに安堵感を覚えたものだったが、今から考えれば常軌を逸している。

またある時、たまには早紀の手伝いがしたくて皿洗いに挑戦した事があった。だが、うっかり欠けた皿で手を切ってしまい、わずかながら血を流してしまった鈴也が驚いて泣いていると、背後に音もなく早紀が現れた。早紀は黙って、出血した鈴也の指を口に含んだ。ここまではよくある話（「音もなく」はよくある話ではないが）だ。だが、早紀は口に含んだ鈴也の指を、翌朝まで離してくれなかった。それこそ、風呂やトイレに入っている間もずっと、である。

他にも、早紀の異常な行動は枚挙に暇がないほどに見られた。鈴也が離れの庭に迷い込んだ野良猫に引っかかれた、と言っては薙刀を振り回したり…

朝、目を覚ますと吐息が触れるほど近くに早紀の顔があったり…勉強中、鈴也が問題を解くたびに「ご褒美」と称してキスしてきたり…

普段の怜悧な美貌と冷静な口調からは考えられないほど、早紀の

愛情は苛烈を極めていたのである。もちろん、その愛情を受けていたのはこの世で鈴也１人であり、彼女の名誉のために言うならば、早紀はいわゆる「ショタコン」ではない。あえて言うなら「鈴コン」であった。それも病的な。

「あぁ…またこうして坊ちゃまのお世話ができる日が来るなんて…坊ちゃまに捨てられたあの日、世をはかなんで自殺しなくてよかった…」

さらり、と恐ろしい独白を聞かされ、思わずカップを口に運ぼうとしていた手を止める鈴也。事の真偽を確かめるべく、ゆっくり貴子の方を見る。

静かにうなづく貴子。

「マジすか」

「マジよ…半分は」

貴子は世にも恐ろしい事を思い出しているかのように、青い顔で言った。

「早紀さんは、あんたがうちを飛び出した日の夜、薙刀で切腹を図ったの…」

「お恥ずかしい…坊ちゃまを失って、気が動転しておりまして」

自分の知らないところで、なにやら物騒な事が起こっていたようだ。しかも、自分のせいで。早紀が無事であった事を安堵しつつも、鈴也は首を傾げる。

「半分は…って、どういう事だ？」

「だから、それだけじゃないの…止めに入った手だれの伏鬼衆５人が巻き添えに…っていうか、一方的に叩きのめされて…あれはまさに『惨劇』と呼ぶに相応しい…」

「貴子さん、よく回るお口ですね」

すぅ、と早紀の目が細まり（その間も笑顔は崩れない）、その手が自らのスカートの裾に伸びる。くどいようだが、その中には折りたたみ式の薙刀が隠されている。

「ごめんなさいっ！」

反射的に頭を下げ、言葉を止める貴子。鈴也にはトラウマがなくても、貴子にはあるのだ。うっかり早紀の前で鈴也をバカにしたり、暴力（あくまで子供の）を振るってしまった後の、恐ろしい罰の数々というトラウマが。実際にはその罰そのものよりも、罰を与えながら浮かべていた、早紀の冷たい笑顔がトラウマなのだが。

「ま、まあ…何はともあれ、早紀さんが無事でよかったよ…」

「ぼ…坊ちゃま……坊ちゃまが私の心配をしてくださるなんて…」

「いや、そりゃするでしょ。一応そこまで冷たくないつもりなんだけど」

早紀は鈴也の言葉に両手を口に当てて、ふるふると小さく震えていた。

「それはつまり、私をここに置いて下さるという事ですね？」

「何をどう解釈すればそんな結論に！？」

とは一応言ってみるものの、早紀を説得、あるいは論破できた事など、鈴也にはただの一度もない。母親であり姉であり、教師であり師匠でもある彼女に逆らうという発想自体、鈴也の中にはほぼないと言っていい。

「鈴也…」

突然、これまで黙っていた紫炎が口を挟んだ。鈴也にだけわかるほど、わずかに苛立ちの色が混じった声音だった。

「あ、紫炎…どうした？」

黙っているのをいい事に、放置しすぎたか、と少し焦る鈴也。かと言って、早紀の前で何度も紫炎にキスするのも、またはばかられる行為ではあるのだが。

「ん……」

きゅ、と柳眉をひそめたまま、ぽすん、と紫炎の上半身が倒れこんだ。椅子に座ったままの、鈴也の太股に向かって。そのままもぞもぞと頭を動かし、しばらくすると満足そうに目を閉じた。

「あ〜…紫炎？」

まるで眠る体勢を探す犬のようだ、と思いながらも、戸惑いの声が隠せない鈴也。
「ちょっとあんたね……」
「待ちなさいそこのメス鬼」
抗議しようとした貴子をさえぎるように、早紀の低い声が響く。
「そこは10年前から私が予約しているのです」
「初耳だよ！　いつそんな予約を！？」
「坊ちゃまのアレがポークビッツだった頃からですが」
「ありえないセクハラだ！　あと早紀さんは狙いどころが違う！　さらに承った覚えもない！」
「ポ、ポークビッツ…？　予約…？」
ようやく話が飲み込めたのか、みるみるうちに貴子の顔がかーっと真っ赤に染まっていく。さすがに、12歳から修行漬けの日々を送ってきた貴子は、こんな話題にはついていけないのだろう。
「よ、予約の電話を……」
「落ち着け貴子！　ただの戯言だ！」
収集のつかない状況の中、すっ、と紫炎の片目が開く。
「鈴也…頭…」
「え？　ああ…」
状況整理が追いつかない鈴也は、条件反射的に紫炎の頭を撫でる。
その瞬間。
「……ふっ」
紫炎の口から、小さな息が漏れた。いや、ただの吐息だと思っていたのは、鈴也1人だけだ。明らかに紫炎は、早紀と貴子に対して笑って見せたのだ。
勝ち誇るような笑みを。

第2部　3（後書き）

そろそろ話を進めますかね…
あと、ちょっと誤変換が多いので今後もう少し注意します…

第2部　4

「まぁ…このメス鬼ったら、良い度胸ですこと…うふふふ」
早紀さんが暴れだす！　一瞬背筋を冷たい物が走り抜けたが、鈴也の予想に反して早紀は薙刀を取り出すような事はしなかった。スカートの裾を握りしめているあたり、寸前で思い留まったに過ぎないのだろうが。
「ふぅ…」
安堵のあまり、思わずため息をつく鈴也。
「嫌ですね、坊ちゃま…ため息なんかついて。早紀のスカートの中が見たいのなら、いつでもめくって差し上げますのに」
「言ってない！　…って、うわぁ、もうめくってる！！」
「何やってんのよ、鈴也！」
「何もしとらんわ！」
嫌でも（嫌なわけではないが）視界に飛び込んでくる、早紀の下着と白い太股に、一瞬視線を釘付けにされつつも、鈴也は必死で目を逸らす。ここでまじまじと見入っては、早紀の思う壺な上に貴子からの理不尽な弾劾も避けられない。
「む…それは…！」
紫炎が、突然鈴也の太股に預けていた上半身を起こす。意外な人物からのリアクションだった。紫炎の視線は、露わになった早紀の下半身に注がれていた。黒い下着と、ストッキングを止めているベルトに。
「メス鬼に注目されても仕方がないのですが…」
予想外の反応に、さすがの早紀も戸惑いを隠せないようだった。
「それは…がーたーべると…というやつ…鈴也の性癖研究資料にあった」
「紫炎！　頼むから人の嗜好をバラすのはやめてくれ！」
必死の嘆願。だが、それが聞き入れられる事がないのもまた、鈴

也にはわかっていた。わかっていたが、言わずにはいられないのだ。

「早紀さん！　いい加減にしましょう！」

その時、たまりかねた貴子の叫びが、場の流れを強引に断ち切った。本当ならば、その『鈴也の性癖研究資料』とやらに多大な興味があったのだが、あまりにも混沌とした状況に耐え切れなくなったのだ。

「仕方ありません…本題に入りましょう」

早紀が手を離した事で、はらり、とスカートが元の状態に戻る。

「鈴也坊ちゃま…これから、どうなさるおつもりですか？」

「へ？」

唐突な質問に、鈴也は間抜けな声を上げる。隣ではまだ紫炎が早紀の腰の辺りを注視しているが、相手にはしない事にした。

「坊ちゃまはご両親の仇を追っていたのでしょう？」

「ま、まあ、そうだけど…」

「そして、お見事、かつ華麗にその目標を達せられたわけですよね？」

正直、あれを見事だ華麗だと言われると、鈴也としては非常に居心地が悪い。完全に、紫炎の力に頼りきった結果なのだから。ただ、早紀の言いたい事は理解できた。

「ああ、そういう事か…」

両親を殺し、自分を御堂家という監獄へ送り込む要因となった鬼・忌野童子。その鬼への復讐心のみで、鈴也は適性のない伏鬼という仕事を続けたきた。大した業績を上げる事もないまま、そして勝てる見込みもないまま、盲目的に、である。

紫炎の手でとはいえ、その復讐が果たされた今、鈴也が危険な伏鬼を続ける必要はないと、早紀は言っているのだった。

「そ…そうよ！　もともと私は今日、それを言いに来たんだから！」

貴子も同調する。

「お前、今まで忘れてただろう、その目的…」

「う、うるさいわね！　それより、どうするのよ？」

「うーん…」
　鈴也は思案する。これからどうするか、という事ではなく、今の自分の考えを、２人に伝えていいものかどうかを。それは、忌野童子を倒して帰宅した、昨晩から考えていた事だった。

「俺さ、このまま伏鬼の仕事、続けようかと思って」

　さらり、と言ってのけた鈴也の言葉に、貴子は言葉を詰まらせた。その様子をよそに、鈴也は言葉を続ける。
「確かに…もう父さん達の仇はいないんだけど…何て言うのかな…ちゃんとやってみたくなった、っていうか…」
　自分の中で明確な形になっていない気持ちを言葉にするのは難しい。鈴也はぽりぽりと頬をかきながら、言葉を捜すように視線をさまよわせる。
「まあ、貴子がいつも言ってるように、俺に才能なんかないんだけど…」
「わ、私は別に…そんな…」
　貴子は才能がないから鈴也に伏鬼をやめてほしかったわけではない。慌てて言い募ろうとするが、鈴也はそれを手で制した。それは、「判ってるから」とでも言うような、やんわりとした制止だった。
「確かに才能はないんだけど…何か、俺が御堂の家に産まれた事にも、意味があるんじゃないか、って思えるようになったんだよな」
　鈴也は、妙にすっきりしたような表情で言った。
「忌野童子と紫炎が戦ってる時、思った…ああ…俺は本当に、みんなに守られてきたんだなぁ、ってさ…」
　自分の名前が出てきたせいか、紫炎はようやく早紀の腰から目を離し、ちらり、と鈴也の顔を見た。視線が合った瞬間、鈴也はふわっと微笑んだ。
　その微笑に、貴子と早紀が思わず見惚れてしまった事に、鈴也は気づいていない。

「早紀さんも貴子も…それに紫炎も…みんな俺を守ってくれてた。1人じゃなかった…って、今頃になって気がついた…馬鹿だったよ」
自嘲的に笑う鈴也を、3人の女性がじっと見つめている。
「俺も…みんなを守れるように、強くなりたいって…思ってさ…逃げるのはやめようって、決めたんだ。過去からも、伏鬼からも…」
そう言って鈴也は、少し恥ずかしそうに笑った。

本音を言えば、貴子は鈴也に手を引いて欲しい。
鈴也はどうやら先天的に霊力が乏しいらしく、修行したところであまり強くはなれない、と聞いている。産まれた時からそれが判っていたからこそ、鈴也の両親は御堂家から彼を連れ出したのだ。霊力のない者が、伏鬼の名門一族の中でどういう扱いを受けるかがわかっていたから。実力もなく、知識も乏しく、心構えもできていない鈴也が伏鬼を続けるのは危険――それが貴子の理性的な判断である。
その反面、鈴也の決意を応援したい気持ちも、また貴子にはあった。何事においても気力が希薄な鈴也が、自分から『続けたい』というのだ。そこに何かしらの意義を見つけたのであれば、それは貴子にとっても喜ばしい事――今の、憑き物が落ちたかのような鈴也を見ていると、素直にそう思えた。
加えて言えば、悔しい事に紫炎という存在がいる以上、そう危険な目には合わないだろう、とも思っていた。

「……」
複雑な表情を浮かべる貴子に対し、早紀は無表情とも言える鋭利な眼差しで鈴也を見ていた。何を考えているのかまったく読めない表情だが、恐らく自分と同じような事を考えているのだろう、と貴子は思っていた。
「坊ちゃま……」
声を詰まらせる早紀。そして、何かを決意するかのように言った。
「坊ちゃまのはにかみ笑顔に、早紀は自分の感情が抑えられそうに

ありません」
(全然違う事だった！)
愕然とする貴子に、たじろぐように身を引く鈴也。
「そこは抑えて欲しいんだけど…」
鈴也の口元は、わずかにひくついていた。早紀は以前からちょっと変わったところがあったが、ここまでだっただろうか…というのが鈴也の正直な感想だ。
その時、くいくい、と鈴也の袖を引く手があった。紫炎である。
「ん？　何だ、紫炎」
「この雌は…危険だ」
「え？　早紀さんが危険って…何言ってんだ？」
鈴也にとって、早紀は無条件に自分の味方でいてくれる、唯一の存在だ。貴子も基本的に味方ではあるが、御堂家の次期当主という立場上どうしても衝突してしまう事もある。
鈴也は、早紀が自分に敵対する事など、考えもしていない。だが、紫炎の表情はわずかに鋭いものになっていた。忌野童子との戦いでも見せなかったほどに。
そして紫炎は、冷たい声で告げる。
「先刻より、あの雌の精気の質が異常に上がっている」
「は？」
「あの雌は、鈴也の精気を狙っている」
きっぱりと言い放つ紫炎。だが、そんな発言に対し、早紀は薄い笑いを浮かべて首を振った。
「違いますよ、メス鬼さん。私が狙っているのは坊ちゃまの精気ではなく、精…」
「早紀さんストップ！！」
間一髪、決定的な言葉を聞く前に、鈴也は早紀の言葉を制する事に成功した。早紀の隣では、いろいろと想像してしまった貴子が、真っ赤な顔で目を回しかけているが、これぐらいの犠牲はやむを得まい。

こほん、と早紀が小さく咳払い。
「そうですね…坊ちゃまの決意はよく判りました。坊ちゃまの成長を実感して、早紀の身体が思わず疼いてしまうほどに」
「そういう事を言わなければ、早紀さんて最高の保護者なんだけどね」
「坊ちゃまの望みであれば、早紀はそれを全力がサポートする所存です」
「そう…ありがとう…」
発言を恐ろしいほどナチュラルにスルーされた鈴也だが、無視されるのは御堂家での生活で慣れている。さしたるダメージも受けず、素直に頭を下げた。
(ちょっと困った人だけど…味方にすればこれほど心強い人はいないもんな…)
鈴也は、呑気にそんな事を考えていた。だから、それに続く早紀の言葉に、驚きを隠す事ができなかった。
早紀は静かにこう告げたのだ。
「では、さっそくその鬼を伏滅いたしましょうか」と。

早紀は自分を注視している紫炎の目を正面から睨み返し、抑揚のない声でさらりと宣言する。同時に、いつの間にか手にしていた薙刀を、素早く組み立てる。
「坊ちゃま、危険ですのでお下がりください」
一瞬、鈴也は早紀が何を言っているのか、まったく理解できなかった。紫炎が鬼だという事を看破していながら、今まで何も言ってこなかったのだから、その存在も含めて容認してくれたのだと、勝手に思っていたのだ。
「さ…早紀さん、どういう事？」
本来なら早紀に同意するべき立場にあるはずの貴子さえ、その突然の宣言に戸惑いを見せている。
「どうもこうもありませんよ？　そもそもその鬼を坊ちゃまの傍に置いておく事に、何のメリットがあるというのですか」
「え？　いや、紫炎は俺の守護者で『契約者』で…」
「不要です」
鈴也の言葉を、早紀はぴしゃり、とはねつける。
「私が坊ちゃまをお守りする以上、精気を提供してまで鬼に守ってもらう必要などありません」
「ほう…」
今まで黙って成り行きを見守っていた（かどうかは定かではないが）紫炎が、ゆらり、と立ち上がった。
「私より貴様の方が、守護者に相応しいと言うか」
普段、めったな事では感情を動かす事のない紫炎が、どこか怒りにも似た感情を漂わせている。その事に、何より鈴也が驚いていた。が、呑気に驚いている場合でもなかった。
「おい、紫炎も落ち着けって！　早紀さんもそういう意味で言ったじゃ…」

「いいえ、そういう意味で言いましたが？」
しれっと告げる早紀に、鈴也は頭を抱えたくなった。
「面白い戯言をぬかす雌だ…」
「坊ちゃまに害をなす者を見逃すほど、私の心は広くありません…覚悟を」
「待ってくれよ、早紀さん！！　紫炎は俺に害なんか…」
鈴也の言い分を、早紀は一顧だにしない。
「坊ちゃまがお優しい方なのは、早紀が一番よく存じております。が、精気を吸われ尽くした人間がどうなるか…貴子さんならご存知ですね？」
先日、忌野童子によって限界ギリギリまで精気を座れた貴子。忌野童子に彼女を殺す意思がなかったとはいえ、危険な状態であった事には変わりない。対応が遅ければ、命を落としていた可能性も低くはないのだ。
「それは…そうね。でも…この鬼は鈴也の味方よ？　それは間違いないと思う…」
貴子とて、鈴也の傍に紫炎がべったり張り付いているのは面白くない。かといって、早紀のように伏滅するまで考えた事はなかった。心のどこかで、「紫炎に任せておけば鈴也は安心」と思っていた部分もある。
だが、そんな貴子の言い分を、早紀は鼻で笑い飛ばした。
「鬼が味方なわけないでしょう。あるのは利害関係…それだけです」
きっぱりと言い捨てる。それは、一度は鈴也自身も考えた事だった。それに絶望し、自ら紫炎を遠ざけてしまったのは、つい先日だ。
「早紀さん…」
「それに、利害で言うなら坊ちゃま…坊ちゃまにとってこの鬼を傍に置く事は、害の方が多い事をご理解なさってますか？」
「え？」
早紀は紫炎に向けていた薙刀を下げ、鈴也を見やる。その目には先ほどまでの過保護の色はなく、厳しい指導者の目になっていた。

「傍らに絶対的守護者をおいて臨む戦いなど、何の修行にもなりません。協力な媚薬を用いて睦言に臨むようなものです」
「そのたとえじゃ、かえって判りづらいような…」
釈然としないながらも、それについては貴子も概ね同意見のようだった。
「その鬼を連れて伏鬼をいくら重ねても、坊ちゃまが望む強さなど手に入らない、と申しているのです」
「どういう……事だよ……」
「後ろにその鬼がいる限り、あんたは命を賭けてまで戦う必要がない…そう思っちゃうんじゃないかって、早紀さんは言ってるのよ」
確かに、紫炎が来てからの伏鬼は、すべて彼女が決着をつけている。鈴也自身がそれを望んだわけではないが。これまでの「敵わないから逃げる」という方針が、「敵わなければ紫炎がいる」という意識に変わるだけで、鈴也が「何が何でも自分で倒す」と思わない限り、強くなることなどできはしないのだ。
「その鬼は、坊ちゃまが伏鬼衆として成長を遂げる上で、障害にしかならない、と早紀は考えているのです」
再び、ぴしり、と紫炎に刃を向ける早紀。
「そうしていくら鬼を倒したところで、御堂が坊ちゃまを認める事などありえません」
びくり、と鈴也の全身が硬直した。
「先ほど坊ちゃまは言いました…伏鬼からも逃げない、と。それは『御堂家』からも逃げない、という意味も含めての事ですね？」
伏鬼という仕事をする上で、御堂という家柄を切り離す事はできない。鈴也自身がいくら「どうでもいい」と言っても、周囲はそういう目で鈴也を見るし、鈴也の行動は御堂という家名に大きな影響を与える事になる。
「坊ちゃまが仰る『どうでもいい』が、本当はどうでもよくないという事…早紀が見通せないとでもお思いですか？」
鈴也には、返す言葉がない。

なぜなら、鈴也はこの期に及んでも、まだ御堂家から認められたいと、心のどこかで思っていたからだ。それには、紫炎の力に頼った戦いではいけない。鈴也自身の力で実績を積まないことには、御堂家の者が納得するはずもない。

「ここにいる貴子さんも、ただ才能だけで強くなったわけではありません。坊ちゃまが膝を抱えて寂しがっている間に、血を吐くほどの修練を重ねた結果なのですよ」

「早紀さん、それは…！」

それは、鈴也の古傷であると同時に、貴子にとっても後悔すべき過去だ。だが、早紀は一切の容赦をしなかった。

「坊ちゃまを泣かせてまで貴子さんが成したかった事を、坊ちゃまは鬼の手を借りて成そうというのですか？　それは甘えというものです」

まさにぐうの音も出ない…といった状況で、押し黙る鈴也。

「坊ちゃまが選ぼうとしているのは、そういう道です。今少し、お考えを整理されてはいかがでしょう」

早紀はそう言って、手早く薙刀をスカートの中に収納する。

「では、早紀はこれで一旦失礼いたします。近い内に、坊ちゃまのお答えを伺いに上がります」

「さ、早紀さん？」

荷物を手に、すたすたと玄関へ向かう早紀を、慌てて貴子が追いかける。だが、鈴也はその場を動けなかった。

バタン、という気配を最後に、早紀と貴子の気配が部屋から消えた。

「早紀さん！　いくら何でも、あんな言い方しなくても…」

足早に歩く早紀の後を追って鈴也の家を出た貴子は、早紀の背中に向かって非難の言葉をかける。その声に振り向きもせず、早紀は

黙って歩き続けていた。
早紀の言い分は、まったくもって正しいと貴子は思う。忌野童子というトラウマを乗り越えた事で、鈴也はいくぶん前向きになったようだが、貴子から見れば心構えはまだまだだ。本当ならば伏鬼というのは、「敵わないから逃げる」という選択すら許されないものなのだ。依頼を受けて行う以上、途中で投げ出す事などできない。碌な修行もしないで、「続けてみたい」などという甘い考えでは、とても勤まらない。
だから、早紀が言った事に間違いはないのだが、今の鈴也にいきなりそれを伝えるのは酷ではないか、とも思う。鈴也は修行をしなかったのではない。貴子の父、錦三の厳命により、させてもらえなかったのだ。本来なら、伏鬼に関する情報を与える事さえ禁じられていたのを、早紀がこっそり教えていたにすぎないし、それも十分とはいえないものだ。
だから、心構えに関しても、これからおいおい学んでいけばいい。早紀ならそう言うだろうと、貴子は予想していたのだが、早紀が口にしたのは、厳しい現実を突きつけるような、あるいは突き放すような言葉だった。
貴子の知る限り、早紀が鈴也にそんな物言いをした事は一度もなかった。
「……」
公園に差し掛かったところで、ぴたり、と突然、早紀の足が止まった。２人は知らない事だが、この公園は紫炎と鈴也が並んでベンチに腰かけた、あの公園だ。
「早紀さんってば！」
早紀が立ち止まった事で、ようやく追いついた貴子が、早紀の顔を覗き込む。表情はあいかわらず無表情だが、その顔色はまさに、蒼白といっていい。

「どうしましょう……」

「え？」

「あんなキツイ事を言って…絶対坊ちゃまに嫌われたあああ！！！」

はらはらと涙を流して絶叫する早紀を、貴子は呆然と見つめる事しかできなかった。

第2部　6

１2歳で伏鬼の才能を見込まれた早紀は、親の伝手を頼って御堂家に預けられた。産まれ持った高い霊力と資質は、鬼にとって格好の餌となる。それならば、鬼に対して抗う術を身に付けた方が安全だと、両親に半ば強制的に決められた事だった。そこには金銭のやり取りがあったとも伝え聞いた事がある。

早紀本人はそんな才能にも、伏鬼にも興味はなかったが、流されるままに御堂家での修行を始め、瞬く間に頭角を現す事になる。周りから押し付けられる、将来への期待に辟易していた１４歳の頃、早紀は運命の出会いを果たす事になった。

御堂家の離れで初めて見た時、早紀はその少年がもはや生きていないのではないか、と錯覚してしまった。目はどこか虚ろで、焦点が合っていないかのよう。顔色は青ざめ、一言もしゃべらない。慣れない環境に怯えているのだろう、と早紀は判断した。

(可愛い顔してるのに、これじゃ台無しね)

早紀の鈴也に対する最初の印象は、そんなものだった。

伏鬼の修行に飽き飽きしていた早紀は、雇い主であり師匠でもある御堂錦三から「御堂家の恥を引き取る事になった。死なない程度に世話する者を用意しろ」と言われた時、真っ先に自ら志願した。自分で親に売られた事は理解していたが、素直に伏鬼衆になるつもりもない。適当に世話をしていれば、修行から離れられると思ったのだ。

「今日から坊ちゃまのお世話をさせていただきます、桐原早紀と申します」

早紀が儀礼的な挨拶をすると、少年は静かに頭を下げた。

「ごめんなさい…」

早紀には少年の謝罪の意味がわからなかった。
「坊ちゃま…？」
「伯父さんが言ってました。僕に関わるとみんな不幸になるって。僕はこの家の恥なんだって。だからごめんなさい」
鈴也は虚ろな表情のまま、抑揚のない口調でそう言った。これが、6歳の少年の口から出る言葉だろうか。早紀は思わず、その場に膝をついてしまった。
早紀が聞いた話によると、鈴也はこの御堂家の次男を父に持ちながら、生まれつき霊力が非常に低かったという。それを理由に両親ともども出奔していたが、先日両親を鬼に殺された——それで、やむを得ず引き取ったのだ、と錦三は言っていた。
元当主である錦三の意見は、この御堂家では絶対だ。住み込みの修行者から家政婦に至るまで、一環して彼の意見に倣う。この離れに押し込まれたこの少年は、これまで周囲に何を言われてきたのか。両親を失った悲しみよりも、自分の存在を恥じ入るというのは、一体どういう事なのか。
泣けばいいのに。悲しめばいいのに。
(なんでこんな子供が…そんな目に遭わなきゃならないの…？)
気がつくと、早紀は鈴也の小さな身体を抱きしめていた。涙が出そうになるのを、必死でこらえながら。
「離して…早紀さんが不幸になる…」
この期に及んで、他人の心配をする鈴也が、あまりにも切なかった。早紀は決意した。自分が、この少年を守ろうと。たかだか14歳の小娘に何ができるかはわからないが、自分だけはこの少年の味方でいようと、心に誓ったのだ。

そして2人だけの生活が始まった。

最初の頃の鈴也は、夜中になると必ず悲鳴を上げた。泣いたのではなく、悲鳴だ。鬼に襲われ、両親を失った事で、鈴也の心に根付

いたのは悲しみではなく恐怖だったのだ。早紀はそんな鈴也を、落ち着くまで抱きしめ続けた。「大丈夫です、早紀がいます」と、聞こえているかどうかもわからないまま、鈴也の耳に囁きながら。
最初はガタガタと震えるだけだった鈴也が、いつしか早紀に抱きつくようになった。早紀は自分が鈴也に「守ってくれる存在」として認識された事に、小さな幸せを感じた。
またある時。「晩御飯は何がよろしいですか？」と聞くと、「何でもいいです」としか言わなかった鈴也が、「グラタン…作れる？」と言った時、早紀は嬉しさのあまり、あらゆる手段でグラタンのレシピをかき集めた。
鈴也は早紀と過ごす内に、少しずつ変わっていった。虚ろだった目は輝きを取り戻し、わずかながら表情も豊かになっていった。
そして1ヶ月が過ぎた頃、早紀にとって記念すべき出来事が起こった。
鈴也が、笑ったのだ。
それまで、鈴也が眠ってから食事をとっていた早紀に、鈴也は「一緒に食べよう」と言ってきた。使用人として遠慮しようとした早紀だったが、それを伝えた時の鈴也の悲しそうな表情に負け、同席することにした。それだけの事だったのだが。
「おいしいね、早紀さん」
そう言って、鈴也は笑った。御堂の屋敷に引き取られて、初めての笑顔。
（かっ……可愛いぃぃぃぃいっ！！）
それは記念すべき、早紀が「鈴コン」を患った瞬間であった。

早紀にとっての蜜月生活は、それから8年間続いた。

「でも…坊ちゃまにとって私は、それほど大事な存在ではなかったという事ですね」
シルクのハンカチで涙を拭い、早紀は上ずった声で言う。

早紀と貴子は、公園のベンチに腰かけていた。メイド服と巫女装束が並んで腰かけるベンチは、一種異様な光景であり、道行く人がじろじろと無遠慮な視線を投げかけて行く。
「そ…そんな事ないんじゃないかな…？」
貴子の必死のフォローも、効果はない。というより、あまりにも説得力に欠けると言わざるを得なかった。
実際に鈴也は早紀の元を去り、紫炎と共にいるのだから。
「いいのです…それならば私は、せめて坊ちゃまが一人前の伏鬼衆になれるよう、お支えするまで…たとえ、坊ちゃまに恨まれる事になっても…」
「早紀さん…それでいいの？」
貴子にも、早紀の覚悟のほどは痛いほどわかる。貴子自身も、鈴也のためとはいえ、かつては敵対に近い状態にあったのだ。
「良い悪いの問題ではありません。坊ちゃまの為に私ができる事を、私は為すだけです」
「でも…鈴也の意識改革が目的なんだったら、他にも方法はあるんじゃないの？」
早紀の言う事はもっともだと思う。だが、貴子にはそこまでする必要があるとは思えなかった。
紫炎に頼る限り、鈴也は強くなれない。それは間違いないだろう。それならば、鈴也が紫炎に頼りきりにならないよう言い含めればいいだけの話であって、無理に紫炎を伏滅する必要はない。紫炎の方も鈴也の精気を求めてはいるが、害意はないと言える。
「それはそうでしょう。これは、単なる私の意地ですから」
貴子の疑問に、早紀は簡潔に答えた。
「意地？」
「そうです…8年間、坊ちゃまを守ってきた者として、そうやすやすと守護者の座を明け渡すつもりはありません」
ぎゅ、と早紀は両手を握りしめてつぶやいた。
「3年前…坊ちゃまが独り立ちを望むのであれば、と涙を呑んでお

傍を離れたのに…今更どこの馬の骨とも知れないメス鬼に取られるなど、見逃すわけには参りません。ましてや、私の大事な坊ちゃまを、あの鬼がただ『精気供給者』としか見ていないのであれば…」
ギラリ、と早紀の鋭い眼差しが、獰猛な光を帯び始める。
「私は全てを賭けて、あの鬼を排除するのみです」
そう言う早紀の口元に浮かんだ酷薄な笑みを見て、貴子の背筋に悪寒が走りぬけ、思わず自身を両腕で抱きしめた。

鈴也は早紀と貴子が出て行ったドアをしばらく眺めていたが、やがて大きくため息をついて目を閉じた。
「甘い…か…」
早紀に言われた事を反芻してみても、やはり彼女の言い分は筋が通っているような気がした。全てに納得ができるわけではないが、どこかに紫炎を頼る気持ちがあった。それは、早紀にきっちり見抜かれていたのだろう、と鈴也は思う。
実際には早紀の言い分には、彼女自身の私情も多分に含まれているのだが、鈴也はそこに気がつくほど敏感な人間ではなかった。
「鈴也…あの雌が邪魔か？」
「へ？」
「あの雌が邪魔なら、私が排除しよう」
恐ろしいほど平坦な声で、紫炎が言った。彼女が言う排除とは、即ち殺害であろう。
「冗談はよせよ！」
「冗談ではないが」
「なお悪いよ！　早紀さんは俺にとって、大事な人なんだ」
鈴也はそう言って、紫炎の手をそっと握った。
「…？」
「前に紫炎が、こうやって俺の手を握ってくれたよな…」

鈴也が忌野童子に出会い、感情のバランスを崩していた時の事だ。紫炎は鈴也の感情を読み取り、黙って手を握り続けた事があった。紫炎の意図はともかく、その行為は乱れた鈴也の感情を落ち着かせたものだ。
「それを8年間ずっと…続けてくれたのが早紀さんなんだ」
鈴也は、穏やかに笑う。だが、その笑顔を見た紫炎の表情が、ほんのわずか――鈴也にしかわからないほどに、曇った。うっすらと、眉間に皺が寄っている。
鈴也には、今のやりとりのどこに紫炎の機嫌を損ねる要素があったのか、皆目検討がつかない。
「な…なんだよ？」
ぎゅ、と鈴也が握っていた手が、握り返される。
「ならば、私は9年握り続けよう」
「はあ？」
「8年握ったからぁの雌が大事なのだろう。なら、私は9年握る」
「…言ってる事が、よくわからんのだが…」
紫炎は鈴也の感情や頭の中が見えるというのに、逆はできない。
鈴也はそれを不条理だと思った。
「鈴也は……馬鹿だ」
ぷい、と鈴也から顔を背ける紫炎だったが、握ったその手を離す事はなかった。
「何だかよくわからないけど…困った事になったのは確かだな…」
「私には関係ない」
「関係なくねーよ、当事者だろ？」
「私があんな雌に負けるものか」
紫炎は口調にわずかな苛立ちを滲ませて言うと、話を切り上げるかのように鈴也の膝に上半身を預けた。
「なんだよ、他人事みたいに…」
興味なさげに目を閉じた紫炎に文句は言いつつも、彼女が鈴也の手を握りこんだままであったため、鈴也の表情はせいぜい苦笑にし

かならなかった。

「結局…悩んでても仕方ないんだよな」
早紀の言葉に動揺し、迷いもした。だが、だからといって立ち止まっているわけにもいかない。鈴也は自らの頬を軽く叩き、壁に立てかけてあった刀を手にする。
今は夜の11時。鬼を怖れる人々は、家に閉じこもっている時間である。決して鬼が夜にしか出ないわけではないが、ほとんどの鬼は夜行性——そんな鬼が跋扈する時間帯に出かけるとなると、その目的は1つしかない。
「行くのか」
「ま…やれるだけやってみるさ。どうせ、俺は落ちこぼれなんだし」
そもそも、自分が伏鬼の仕事を続けるといったところで、多大な成果を期待する者などいない。御堂の家の者は、鈴也ごときに何ができる、という意味で放置しているのだ。なら、好きなようにやらせてもらおう。それが、とりあえず鈴也の出した結論だ。
「…紫炎、無理に一緒に来なくていいんだぞ？」
早紀の言葉を意識しなかったわけでもない。ただそれよりも、紫炎にとって同族殺しとも言える伏鬼の仕事を強制する気も、鈴也にはなかった。そのつもりで言ったのだが。
「……」
かぷ、と紫炎が、鈴也の右腕に噛み付いていた。犬で言えば、甘噛み程度のものなのと、眉間にうっすら皺が寄っているので、どうやら抗議の意を示しているらしい。
「なぜ噛む……っていうか、お前やっぱちゃんと牙あるんだな？」
腕に軽く食い込む、人間より遥かに長い犬歯の痛みに、鈴也は場違いだと思いながらも感心する。本気で噛まれたら、自分の腕など勘単に引きちぎられるだろう。

「そういえば…前から聞こうと思ってたんだが…」
「…？」
腕に噛み付いたまま、小首を傾げる紫炎。
「紫炎って、なんで角がないんだ？」
何度か紫炎の頭を撫でたことがあるが、角の感触はなかった。
「はふ」
「…え？　何て？」
そこで初めて紫炎は鈴也の腕を解放し、牙の跡がついた皮膚をぺろりと舐めた。
「ある、と言ったのだ」
「え？　どこに？　…ないじゃん」
鈴也は確かめるように、紫炎の頭をぺたぺたと触ってみるが、やはり角らしきものはなかった。頭全体を撫で回してみても、引っかかりは感じられない。
「普段はない。怒ると出て来る…らしい」
「らしいって何だよ…」
「はっきり出て来た事がないからわからん」
「へえ…鬼の角にもいろいろあるんだな…」
改めて感心する鈴也。
今まで鈴也が戦ってきた鬼は、みなその頭に角を備えていた。形は様々だったが。さらに忌野童子などは、その角を引き抜いて武器として使っていた。
考えてみれば、自分が鬼についてあまりにも無知であることに、鈴也は今更ながら気がついたのだった。
「まあ…せいぜい紫炎の角を見ないで済むようにしないとな」
今まで紫炎は、機嫌を損ねる事はあっても、怒る、というほど感情を露わにした事はない。もし鈴也がきっかけでそんな事が起これば、無事ではすまないだろう。
最後にポンポン、と軽く紫炎の頭を撫でて鈴也はこの話題を切り上げた。

「んじゃ、お仕事に行きますか」
ジャケットを羽織り、玄関に向かおうとした鈴也。だがその手を、紫炎はぐい、と引っ張って引き止めた。ちなみに、紫炎はさっきからずっと、鈴也の手を握ったままだ。
「なんだ？　やっぱ行きたくないのか？」
ふるふる、と首を振る美鬼。返事のかわりに、ずい、と頭を突き出してくる。
「もっと撫でれば、角は出ない」
「お前な…それは、撫でないと怒るっていう脅迫だぞ」
そう言いながら、鈴也は少し強引に手を引いて、何とか紫炎を連れ出すのだった。

自宅マンションを出て5分ほど歩いた所で、鈴也は大事な事に気がついた。貴子が来たり、早紀が乱入したりで、今日はまだ紫炎に精気を吸わせていない。早紀と貴子の前でいきなり唇を奪われたが、大した量を吸われたわけでもなかったのだ。万が一、戦闘に紫炎を巻き込むような事態に陥った場合、あまり好ましくない状況ではないだろうか。
とはいえ、吸わせるなら家で済ませておくべきだった、とも思う。紫炎の精気吸収手段が口付けである以上、あまり外ではしたくない。もっとも、こんな時間では誰かに見られる心配など必要ないのだが。
「鈴也…」
そんな事を考えていた鈴也に、紫炎が突然声をかけた。
「な、なんだ？　精気か？」
胸中を読まれた気分になって、鈴也の声が思わず上ずってしまう。もっとも、紫炎は実際に鈴也の胸中を読む事ができるので、本当なら驚く必要もないのだが。
「そうではな……いや、そうだ」
「待て、お前それ嘘だろ！？　別の事を言おうとしてたはず…」

言い募る鈴也の顔を、がっちりと掴む紫炎の手。こうなれば、鈴也に逃れる方法はない。
「ん……」
抗う術もない鈴也に唇を重ね、目を閉じる紫炎。
（くそ…またこいつのペースじゃねえか…）
なすがままの自分に、わずかな苛立ちがよぎる。
その時だった。鈴也の胸に、ちょっとした悪戯心がよぎったのは。
（ちょっとぐらい反撃したって、罰は当たらねえだろ）
重なり合う唇の隙間から、鈴也は舌を差し込んでみた。紫炎の唇、そして歯の間をすり抜けるようにして、その奥にある紫炎の舌を目指す。
「……！？」
予想外の鈴也の反応に、びくり、と紫炎の全身が固まった。さらに、鈴也の舌の先が、紫炎の舌を捉える。
「んっ……」
もぞり、と紫炎が身をよじったが、明確な拒絶の反応ではなかった。調子に乗って、鈴也は舌先で紫炎の舌を撫でる。一瞬、紫炎の舌がたじろぐように逃げようと動いた。追いかけるように舌を伸ばすと、諦めたかのように紫炎の舌から力が抜けた。そこをすかさず、鈴也の舌が絡めとる。
鈴也の舌の動きに合わせるように、紫炎がびくん、と身体を震わせた。
「ん……！　んぅ……！？」
鼻にかかったような、言葉にならない声が紫炎から漏れた。その瞬間、鈴也は自分が夢中になりすぎていた事に気がついた。
慌てて唇を離すと、紫炎がゆっくりと、その切れ長の目を見開いた。
「わ、悪い！　ちょっとやりすぎた……！」
慌てて謝る鈴也だったが、その声は紫炎に届いていたのかどうか。彼女はとろん、とした目つきで、呆然と鈴也を見ている。思わず、

その額に角が出ていないかどうかを確認してしまう鈴也。
「なんだ……今のは……？」
ようやく、紫炎はそれだけを口にする。
「いや、悪い…つい調子に乗っちまって……」
「今のは何だ？　何をしたんだ？」
鈴也の弁解をさえぎるように、重ねて問いかける紫炎。自分で舌を出して、指で触ってみては、不可解そうに首を傾げている。
「何って言われても…嫌だったなら謝る…」
「……嫌？」
小首を傾げたまま、じっと鈴也の目を見る。その赤い目は、どこか潤んでいるようにも見えた。一瞬、泣くほど嫌なのか、と不安になる鈴也だったが。
「嫌では……ないな。ただ……」
「ただ？」
「精気を吸うゆとりがなかった」
「はぁ？」
「…だが、悪くない。悪くないな…」
頭の中に疑問符が飛び交う鈴也をよそに、紫炎は1人、納得するようにうなづいていた。

その時だった。

「私の前でディープキスとは、大胆になられましたね、坊ちゃま…」
涼やかな般若の声が、聞こえてきたのは。

見なくても鈴也にはわかった。そこに、薙刀を構えた早紀が立っているであろう事は。それどころか、どんな表情で立っているのかさえ想像がつく。
わからないのは、なぜ早紀が今、こんな所にいるのか、という事だけだ。
「御堂の家に戻ったのかと思ってたけど…」
つぶやきながら、鈴也は恐る恐る振り返る。予想通り、早紀はまったくの無表情だ。いや、厳密に言うとうっすら口元に笑みが浮かんでいるが、その目は全く笑っていない。
「先ほど申し上げました通り、私は御堂の家を辞して来たのです。おいそれと戻るわけには参りません」
「帰る場所がないなら、さっき言ってくれよ……じゃあ、今日はどこで寝るつもりだったの？」
些細ながら気になっていた点を鈴也が指摘すると、さも当然、というように早紀は言う。
「もちろん、野宿でございます」
「さらっと怖い事言わないでよ！　何かあったらどうすんの？」
「坊ちゃまにお慰めいただく他ないかと」
そう言ってのける早紀に、鈴也は溜息をつく。早紀に手を出せる男や鬼など、そうはいないのだが。
「私の事はどうでもいいのです」
「いや、どうでもよくないからね？」
「坊ちゃま、どちらへお出かけですか？」
「いや、いいんだ、無視されるのは慣れてるんだ…一応答えるけど、伏鬼だよ」
鈴也の答えが予想通りだったのか、早紀は小さくうなづいた。
「では…昼間の件に答えが出たという事ですね？　坊ちゃまのお答

えを聞かせていただきましょうか」
　そう言われて、鈴也は思い悩む。答えなど、出ていないのだから。というより、鈴也には早紀の考えがいまいち理解できていない。
「う～ん…早紀さんが言うように、俺の考えは甘いっていうのは事実だと思うよ？」
　前置き代わりに、早紀の意見自体は肯定しておく。
「そうですね。坊ちゃまの考えは、坊ちゃまのキスと同じくらい甘いです」
「…話、続けていいかな？」
　思わず脱力する鈴也に、早紀はどうぞ、と続きを促す。
「うん…でさ、逆に聞きたいんだけど、甘えるのって…何かまずいのかな？」
「え？」
「いや、努力はこれからもちろんするつもりだよ？　でも、才能のない俺が別の力に頼るのって、そんなに悪い事なのかな、って」
　早紀は答えない。なぜなら彼女は『持たざる者』ではないからだ。むしろ、持ちたくもない力を持ったせいで、かつて彼女には伏鬼の道しか選べなかった。そこから鈴也の保護という生きがいを見つけ出せたのは、単なる運と言ってもいい。
　そんな早紀に、才能がないというだけで蔑まれた鈴也の気持ちはわからない。
「まあ、他の伏鬼衆からしたら、俺は恥知らずな卑怯者なのかもしれないけどさ」
　早紀は真剣な表情で、まっすぐ鈴也を見つめる。その言葉から、鈴也の真意を見逃すまいとして。
「俺は俺にできる事を精一杯やる。それでもできない事は、紫炎の力を借りる場合もあるかもしれない…でも、それは他の伏鬼衆でも同じじゃないの？　１人で駄目なら、２人で協力して戦うとか…そういう事もあるんでしょ？」
「それは…詭弁というものでしょう。その女は鬼なのですよ？」

早紀が指差すが、当の紫炎はどこ吹く風、とばかりに鈴也の肩に顎を乗せた姿勢のまま、ぼんやりとあらぬ方向を見ている。鈴也がちらり、とその横顔を見て、すぐに早紀に向き直った。そんな様子が、妙に早紀を苛立たせる。

「鬼だけど……それが何か関係あるの？」

さらり、と言ってのける鈴也。

「坊ちゃま…ご自分が何を言っているのか判っているのですか？」

「…判ってるって。でも、鬼にだって人格はあるんだよ」

貴子ほど染み付いているわけではないが、早紀も伏鬼衆としての教えが身についているし、考え方の基本もそこにある。鬼とは伏滅すべき敵であり、そこに情が絡む余地はない、と思っている。そうでなければ、伏鬼衆の仕事など務まらないのだ。

一瞬、早紀は鈴也が鬼の恐ろしさを理解していないのではないか、と思った。だが、忌野童子という、鬼の中でも特にたちの悪い存在と関わってきた鈴也に限って、そんな事はありえない。

「…つまり坊ちゃまは、鬼とでも理解し合い、手を取り合える…そう仰るのですね？」

「ん…まあ、人間同士と同じくらいにになら、できると思ってるけど」

ありえない——そう早紀は思うが、それ自体が伏鬼衆としての考え方だ。実際のところ、伏鬼衆でない一般人の中には、『契約者』として鬼と共存する者もいる。中には鬼の力におぼれ、悪行に走る者もいるだろう。だが、人間と鬼の共存が不可能という証明にはならない。

「鬼の危険性を理解した上で、坊ちゃまはその鬼を受け入れる覚悟がおありなのですね？」

「改めて言われると大袈裟な気もするけど…まあ、そういう事かな」

「……わかりました。その件に関しては、早紀はもう何も申しません」

深い深い溜息の後ではあったが、早紀はようやくその言葉を口にした。目に見えて安堵する鈴也の呑気さが、早紀には少しうらやま

しくもあったが。
「では、御堂の家についてでは、いかがなさるおつもりですか？」
あくまで鈴也が鬼と組んで仕事をするというのなら、それはそれで構わない、と早紀は納得した。だが、御堂本家はそうはいかない。御堂の名を持つ者が鬼と契約を結んだ、などという話が広まれば、伏鬼衆の名家としてのプライドにかけて決して許さないだろう。それが、ただでさえ疎まれている鈴也となれば、刺客を放つぐらいは平然とやってくる。その場合、狙われるのは恐らく、紫炎ではなく鈴也だ。
「問題はそこなんだよなぁ…」
鈴也はそれほど困った風でもなく、コリコリと頭をかきながらつぶやく。
「この件が知れれば、錦三氏は決して坊ちゃまを許しませんよ？　貴子さんでも、止めるのは無理でしょう」
と、早紀は鈴也が置かれている状況を伝える。紫炎の存在も、いつまでも隠し通せるものではないはずだ。
「まあね…1つ考えてる事があるんだけど……その前に、確認しておきたいんだ」
「確認……早紀にですか？」
「そうだよ」
怪訝な顔をする早紀に、鈴也は悪戯っぽく笑って言った。
「早紀さんて、御堂と俺、どっちの味方？」
「は？」
質問の意図が、早紀にはまったく理解できなかった。
「坊ちゃま…どういう意味でしょうか？　私はこれまで、坊ちゃまの敵に回った事など1度もないと自負しておりますが」
早紀の細い眉が、きゅっ、と吊り上がる。鈴也の質問が言葉通りの意図だとすれば、自他共に認める重度の「鈴コン」である早紀にとって、この上ない侮辱だと思った。同時に、まだ信用されていないのかと思うと、悲しくもあった。

「あ…いや、うん、それはそうなんだけど…なんて言えばいいかな…」

「坊ちゃま…はっきり仰ってください」

鈴也はしばらく迷った挙句、頭をがりがりとかきながら、早紀の予想を遥かに上回る言葉を口にした。

「えーと…俺がもし御堂家にケンカを売ったら、早紀さんはどっちにつく？」

「……は？」

早紀は今度こそ、開けた口をふさぐ事ができないまま、間の抜けた声を上げた。

自らの計画を具体的に話すにあたって、鈴也は早紀と紫炎を伴い、自宅に戻っていた。早紀に関しては、野宿などせられない、という理由もあったのだが。

早紀は部屋に入るなり、鈴也に説明を求めた。

鈴也が言った「御堂家にケンカを売る」というのは、鈴也の口調ほど軽々しい事ではない。彼が何を考え、企んでいるかを確認しなければ、早紀としても落ち着いてはいられなかった。本来、今夜のうちに鈴也に接触した事には、別の用があったのだが、今はそれどころではなかった。

「いろいろ考えたんだけどさ…御堂家の地位と名誉ってのが、面倒の元なのかな、と思って…」

鈴也が虐げられたのは、産まれたのが御堂家だったからだ。日本を代表する伏鬼の名門一族から、素養を持たない男子が産まれた事こそ、問題の始まりだった。鈴也の精気が鬼にとって極上の質を持っていたのは、たまたまとしか言いようがないのだから。

そして当主である錦三が鈴也とその両親を疎んじたのも、身寄りを失った鈴也を軟禁し、その存在を秘匿したのも、全ては御堂家が名家であり、体裁を重んじるがゆえだ。そこまでは、早紀も理解できた。

かく言う早紀が内弟子として御堂家に入ったのも、強力な伏鬼衆を輩出しなければならなかったからなのだ。
「だから、御堂家の名声を傷だらけにしてやろうかな、と考えてるわけ」
何でもない事のように、鈴也は言った。
「具体的には、どのように…？」
「だからさ…御堂家に舞い込む仕事を、片っ端から片付けるんだ。俺と紫炎で」
早紀は思わず息を呑んだ。
そんな事をすれば、間違いなく鈴也と紫炎の存在が、伏鬼衆の間に知れ渡るだろう。そして、「出来損ない」に仕事を奪われ続ければ、御堂の名も地に落ちる。本当にそんな事ができれば、の話だが。
「……その前に、御堂の手の者に殺されます」
厄介者である鈴也が鬼と手を組んでいる事だけでも、御堂が鈴也の抹殺を図るに十分な理由足りえる。そこへ、仕事の横取りなどが加われば、錦三の決断が下るのも時間の問題と言えた。
「殺されないよ」
鈴也はそう言って、紫炎の頭にポン、と手を置いた。この鬼がいるから大丈夫、とでも言いたいのだろう。その言葉の真偽はわからないが、少なくとも鈴也はそう思っている。
気に入らない——本来自分が収まるつもりだったポジションに、のうのうと居座る紫炎を睨みつける早紀。だが、紫炎は涼しい顔で、小さくうなづいている。
「当然だ。私が守護する鈴也が死ぬものか」
「そうですか…」
「うん。だから、この計画を実行するにあたって、俺の心配は２つだけだよ。１つは貴子の事…」
貴子は御堂家の次期当主と目される存在だ。錦三もそれを期待しているし、貴子自身もそれを目標としている。子供の頃からずっと、本人がそう口にし続けているのだから、その決意の程も知れるとい

うもの。
実際は、貴子の動機は御堂家における鈴也の待遇改善にあるのだが、それは鈴也自身の預かり知らぬ事だ。
「貴子なら失った名声を取り戻す事もできると、俺は思ってるけどね。だから、やるなら伯父さんが当主のうちにやらないといけないんだ」
「錦三氏が落とした名声を、貴子さんが取り戻す…という筋書きですか」
「まあね。で、もう1つの心配が…早紀さんだったんだよ」
「私…ですか？」
こくり、と鈴也がうなづいた。その顔は、本気で困っている顔だ。
「早紀さんに御堂の人間として動かれたら…打つ手がないんだ」
どういう意味だろう、と早紀は首を傾げる。早紀は確かに実力ある伏鬼衆だが、御堂本家に彼女以上に力のある者がいないわけではない。さらに言えば、紫炎はどう贔屓目に見ても、自分より遥かに高い力を持っているように見える。たとえ敵対したとしても、自分がそれほどの障害になるとは思えなかった。
だが、鈴也の口から出たのは、思いがけない言葉だった。
「さすがに、家族を傷つけるとか無理だし、俺……」

第2部　8（後書き）

何だか悪巧みをしております。

第2部　9

「あの……家族、と仰いましたか？」
耳から飛び込んできた言葉が信じられず、早紀は呆然と問い返す。
すると、問われた方の鈴也は、呆気にとられたような表情を浮かべた。
「あれ…ち、違った？　もしかして、そう思ってたのって、俺だけ…？」
次の瞬間、鈴也の顔は夜目でもわかるほどに真っ赤に染まった。
「いや、その…俺としては、8年も面倒を見てくれたわけだし、家族みたいなもんかなぁ…って、勝手に思い込んでたんだけど……迷惑だったかな？」
自分より背の低い相手なのに、なんとなく上目遣いになってしまったのは、鈴也の腰がひけているからだ。だが、その意図しない仕草が、早紀の精神に小さくない影響を与えたのは間違いなかった。
その瞬間、早紀の目の色が変わったからだ。
「か、かかか家族ですっ！！　母ですっ！　妻ですっ！　義姉ですっ！　奴隷ですっ！」
「最後のはちょっと違う気がするけど…」
「と、とにかく家族です！！」
鈴也の言葉をさえぎるように、早紀は叫んだ。その声がわずかに震えてしまったのは、致し方のない事だと、自分でも思う。
8年間の絆は、決して薄いとは思っていない。だが、鈴也がどこまで自分の事を大事に思っているかまでは、早紀にはわからなかった。だから、「1人立ちしたい」と言って立ち去る鈴也を追う事はしなかったのだ。もっとも、そこを我慢したせいで、ちょっとした騒動を起こしてしまったのは問題があったが。
それが、3年間離れている間も、鈴也は自分を家族だと思ってくれていた。

「良いのですね…早紀は、坊ちゃまの家族だと思っていて…」
感動に打ち震える早紀。だが、その歓喜の心を打ち破ったのは、紫炎だった。
「鈴也…あの雌との話は終わったのだろう。さっきのを、もう1度やってくれ」
苛立ったように、ぐいぐいと鈴也の袖を引く紫炎に、早紀のこめかみがひくついた。さっきの、というのは、あの濃厚なディープキスの事だろう。
「お、おいおい、今はそれどころじゃ…」
「あの雌が敵に回っても問題ない。私が排除する。だから早く」
「だから、排除すんなって言ってんだろ！！」
どう言えば紫炎は理解してくれるのだろう、と鈴也が頭を抱える。鈴也はとにかく、紫炎と早紀が傷つけあう展開だけは避けたいと思っていたのだが。
「待ちなさい、メス鬼。勝負しましょう」
早紀は火に油を注ぐつもり満々だった。
「さ、早紀さん？」
「私と貴女、どちらが坊ちゃまの役に立てるか…それを証明するためにも、貴女との決闘を申し込みます」
ぴしり、と薙刀の刃を紫炎に突きつける早紀。
「坊ちゃまが御堂を敵に回すというのなら、私はそれに従うまで。貴女もそのつもりであるならば、その実力を私に証明してください」
そもそも、早紀の中に鈴也と敵対する、などという選択肢はない。今回はタイミングよく、御堂の家を辞してきたので、何の問題もなく鈴也側につけるが、仮に早紀がまだ御堂の家に勤めていたとしても、結果は変わらなかっただろう。
だが、それと紫炎の存在を無条件に認めるのとは話が別――早紀はそう考えていた。
「い、いやいや早紀さん、落ち着いて！！　何も今そんな…」
「止めないでください、坊ちゃま！　これは坊ちゃまの家族として、

どうしても退けない戦いなのです！！」
「家族同士に退けない戦いなんてないよ！！」
「……家族同士？」
早紀と紫炎が、揃ってきょとん、とした表情を浮かべる。２人ともどちらかといえばクールビューティ系の顔立ちだけに、その表情は何とも見ごたえがあった。
「ん？　俺また変な事、言ったか？」
「家族…家族とは、鈴也が大事にする存在の事だな？」
鈴也のジャケットの袖を掴んだまま、確認してくる紫炎。その様子に、文字通り鬼気迫るものを感じた鈴也が、黙ってコクコクとうなづく。
「ふむ…あの雌と同格というのは気に入らんが…」
「それはこちらのセリフですよ、メス鬼」
紫炎と早紀の視線の間で、バチバチと火花が散ったように見えたのは、決して鈴也の気のせいではないだろう。
「とにかく！　２人とも落ち着いて！！」
剣呑な雰囲気をかもし出す早紀と紫炎を、鈴也はまとめて腕の中に抱き込む。このままにらみ合いを続けていると、本当に決闘が始まってしまいそうだった。そのままぎゅっと腕に力を込めると、強張っていた早紀の身体から力が抜ける。ちなみに、紫炎は元から自然体で、力む事なくなすがままになっている。
「あぁ…坊ちゃま…いつの間にか、こんな力強くなられて…」
早紀が何やら頬を染めて、腕の中でくねくねとしているが、今は気にしない事にした。
「鈴也、さっきの口吸いをもう一度…という件はどうなったのだ」
紫炎の戯言も、今はさらりと受け流す。
「とにかく。今日はこれから伏鬼に向かいます！」
２人の言い分を完全にスルーしつつ、鈴也は鬼の探索を再開するのだった。

深夜の裏通りを、黒衣の美女とメイド服の美女を連れ立って歩く鈴也。あまりにも場違いな光景ではあるが、それを見咎める者はいない。もちろん、美女に挟まれて居心地悪そうな鈴也を気遣う存在も。

「坊ちゃま…この辺りに、複数体の鬼の気配が致します」

警戒を促すような早紀の声に、鈴也は慌てて刀の柄を握り直す。

3人でブラブラと歩き始めてから20分ほど。ちょうど、張っていた気が抜ける頃合だった。

「…芥のようなのが2、3いるだけだ。その路地を曲がった先にな」

より詳しい情報を、詰まらなそうに告げる紫炎。今回は、早紀と探知能力を競うような素振りもない。鈴也としては、願ったりである。

「よし、じゃあ行ってみようか」

「お待ち下さい！」

紫炎が示した路地に、大股で向かおうとした鈴也を、早紀が制する。紫炎が「芥」と称する鬼とはいえ、無造作にすぎたか、と鈴也が足を止めた、次の瞬間。

「何者だ！！」

鋭い誰何の声が、路地の向こうから飛んできた。さらに、草履で地を駆ける音が続く。

「げ…いやな予感……撤退だ！」

鈴也が反転するよりも早く、声の主は路地から現れた。

白い着物に浅葱色の袴を履き、手には白木作りの刀を持っている。こんな時間に、そんな格好で町をうろつく存在を、鈴也は伏鬼衆以外に知らなかった。

(あちゃ～…もう目についちまったか…)

己の迂闊さを呪うように、鈴也は手で顔を覆ったが、それも遅かったようだ。

「何だお前ら……？」

年齢は３０歳前後だろうか。精悍な顔つきの男が、鈴也達３人を無遠慮に眺めていた。
「……ん？　お前、早紀ではないか。なぜここに…？」
男は早紀を見咎め、訝しげな顔をする。早紀は黙って一礼したものの、男の質問に答えるつもりはないようだ。もちろん鈴也としても、答えられては困るわけだが。
最悪だ、と鈴也は思った。早紀の顔見知りで伏鬼衆――つまりこの男は、御堂の手の者という事になる。
「御堂を抜けたお前が……あっ！！」
男はさらに、鈴也を見て声を上げる。どうやら、この男は鈴也の事も知っているようだ。鈴也自身には、まったく覚えがないのだが。
「……御堂の恥さらしが、こんな所で何をしている…？」
心底忌々しそうに、男の目が鈴也を睨みつける。６歳の頃から晒され続けた、自分を嘲るような視線。だが、御堂への反逆を密かに企む鈴也としては、この程度の視線にひるんでいるわけにはいかない。
そう、こんな視線など、忌野童子の粘ついた視線に比べれば、何という事もない。鈴也は真っ向から男の視線を受け止め、睨み返した。
「何だその目は…？　霊力もまともに扱えん者が、誰に向かってそんな目をしているか、わかっているのか!？」
男の態度には、露骨な怒りが溢れていた。主にして師匠である錦三が蔑み、同じように自分も蔑み続けた存在に睨み返され、感情を隠す事もできなくなったみたいだ。
「さあ……知らない。あんた誰？」
鈴也のとぼけた口調に、男の顔が真っ赤に染まった。
恐らくその男は、御堂家でもある程度実力を認められ、地位を獲得している伏鬼衆なのだろう。だが、鈴也の耳に聞こえてくるほどの存在ではなかった。顔を見た覚えもない。「誰に向かって」と言われても、知らないものは知らないのだ。鈴也にとって、早紀と貴

子以外の御堂家の人間など、全て同じようにしか見えない。
「坊ちゃま…この男は御堂伏鬼衆の副長、佐倉と申す者です」
「ふーん…」
「貴様……っ！　わかっているのか、貴様ら親子のせいで、御堂の名が不当に貶められかけているのだぞ！！」
男の苛立ち紛れの叫びに、鈴也の眉がピクン、と跳ね上がった。
「へえ……そうなんだ？」
それは、早紀ですら初めて聞くほどに、冷たい鈴也の声だった。
「何を、とぼけおって！！　貴様らが御堂家に着せた汚名をを雪ぐために、我ら御堂の者がどれだけ苦労してると思ってる！！」
「………」
激昂する男の言葉に静かに耳を傾けていた鈴也は、そのままゆっくり早紀の方へと向き直った。視界の端にいる紫炎は手で制し、早紀に向かってつぶやくように言う。
「もうちょっと後で動こうと思ってたんだけど……もう、いいよね？」
その表情を見た瞬間、早紀は黙ってうなづいていた。

「佐倉さんって言ったたっけ？　あんた…貴子とどっちが強いの？」
鞘に入ったままの刀を肩に乗せ、鈴也はのんびりとした口調で訊ねる。伏鬼の実力者を前に、なぜ鈴也がそんな態度でいられるのか。その理由に、早紀は心あたりがあった。もちろん、早紀や紫炎の力を宛てにしているのではない。
「貴様…霊力もない凡夫の分際で、貴子様を呼び捨てにするなど、図に乗りおって！！　貴子様は御堂の次期当主たるお方だぞ！！」
「つまり、あんたより貴子の方が強いって事？　それを聞いて安心したよ」
鈴也の口角が、くい、と上がった。笑っている。
「んで…そっちの路地にいた鬼は、あんたが倒したの？」
「当然だ。あの程度の鬼、物の数ではない。貴様と違ってな！」
「そっか…じゃあ、早紀さんと紫炎は、後ろで見てていいよ」
鈴也は佐倉の方を見たままそう言って、無造作に佐倉に歩み寄った。早紀が止める暇もないほど、自然でなめらかな動きだった。
「なめるのもいい加減にしろ！！」
佐倉は鞘のままの刀を、鈴也の肩口あたり目掛けていきなり振り下ろしてきた。ひゅん、という風を切る音が、夜道に響き渡る。
「その言葉、そのまま返すよ、おっさん」
脅しのつもりではあったが、手を抜いたつもりはなかった。佐倉は鈴也の刀を払い落とし、身の程を教えてやろう、という程度の心積もりだったのだ。
だが、佐倉の刀は鈴也にかすりもしなかった。
「おっさん……何か勘違いしてないか？」
鈴也は刀でポンポンと自分の肩を叩きながら言った。
「俺が伏鬼衆として落ちこぼれなのは、霊力がないから……相手が人間なら、関係ねえんだぞ？」

佐倉の打ち込みは、確かに鋭かったのだろう。だが、8年もの間、敵の攻撃を避ける訓練を続けてきた鈴也にとっては、かわす事など造作もない、その程度の腕だった。小回りの効く貴子の小太刀でさえ避けるのだ。

その一瞬の攻防を見て、早紀の手から力が抜けた。万一の時には割って入るのも辞さない覚悟だったが、どうやらその必要もなさそうだ。

「くっ……この、恥さらしめが！！」

すぐさま体勢を立て直し、胸元を狙った突きを繰り出す佐倉。さすがに喉を突くわけにはいかない、と思ったのだろう。

しかしそれも、鈴也はわずかに上体を反らすだけであっさりとかわしてみせる。

「さっきからそればっかだな……んじゃ、その恥さらしに刀を当てられないあんたは何なんだよ？」

佐倉は刀を下段に構え、じりじりと間を詰める。ここまできたら、佐倉も認識を改めざるを得ないのだろう。鈴也の身のこなしが、自分の想像を遥かに越えているのだと。

「逃げ回るしか能のない小猿が、ほざくな！」

鈴也の挑発に言葉だけを返しながらも、佐倉は慎重に相手の動きを観察する。

「判らない人だな…俺は逃げ回ってるんじゃ……おおっと！！」

鈴也の言葉の途中で、下段に構えていた佐倉の刀が跳ね上がった。発言の隙をついたつもりだったのだろうが、鈴也はひらりと身をかわす。まるで、そこに攻撃が来るのがわかっていたかのように。

「いやぁ……やっぱむかつくわ、あんたら……」

鈴也は大きく溜息をつきながら、ようやく刀を構えた。鞘こそついたままながら、その全身からは殺気に近い気配を漂わせている。

「ご大層なお題目を掲げながら、手段を選ばないやり方……あんた、骨の髄まで伯父さんの性根が染み付いてるね」

「負け犬根性が染み付いたガキに言われても、痛くも痒くもないわ

！！」」

佐倉はそう叫ぶなり、身体ごと鈴也に突進してくる。刀は下段に構えたままなので、攻撃の出所が見極めにくい動きだった。鈴也が刀を紙一重でかわすなら、体ごと突っ込んでしまえ、という粗い戦法だ。佐倉はこの期に及んで、まだ鈴也を舐めているのだ。

「見え見えだっつうの」

鈴也はひらり、と身体を回転させつつ、刀を握った佐倉の手を押さえ、同時にその足を払う。佐倉の身体は突進の勢いを殺しきれないまま、抑えられた手を中心に一回転して、背中から地面に落ちた。

「がふっ！」

息を詰まらせ、苦しげに呻く佐倉を、鈴也は冷たい目で見下ろしている。

「鬼は倒せても、落ちこぼれの人間は倒せないんだねえ」

「きっ…貴様、わかってるのか！？　御堂を敵に回して、ただですむと…」

「おいおい、馬鹿言うなよ…」

倒れたままの佐倉の頭を、鈴也はからかうように刀の鞘でコンコンと小突く。

「一度でも、御堂が俺の味方だった事があるか？」

そのまま、刀の鞘で佐倉の喉元を押さえ込む鈴也。

「御堂は最初からずっと、俺の敵だっただろ？」

刀を握る手に、思わず力がこもる。その手を脇からそっと抑えたのは、早紀だ。

「坊ちゃま…それ以上は過剰防衛になります」

妙に落ち着いた早紀の指摘に、鈴也の表情が緩んだ。それと同時に、鈴也を取り巻いていた殺気が薄れていく。

「ま、今日はこれぐらいにしとこうか」

スッ、と佐倉の喉元から刀を引くと、鈴也はくるりと背を向けた。待ってました、とばかりに、紫炎が鈴也の首にしがみつき、早紀もその後を追う。

「貴様！　このままで済むと思うなよ！！」
　ようよう起き上がった佐倉のセリフに振り向きもせず、鈴也はひらひらと手を振ってその場を立ち去るのだった。

「ふぅ……焦った……」
　佐倉を置いて立ち去った鈴也は、自宅リビングに戻っていた。狙っていた鬼が佐倉に倒されていた以上、鈴也の計画実行は先延ばしにするしかない。
「焦る必要などない、お見事な戦いぶりだったかと思いますが。いずれにせよ、これで坊ちゃまは御堂に喧嘩を売った事になるわけですし。表ざたになるかどうかはともかく…」
　早紀に言われ、黙ってうなづく鈴也。確かに、戦い自体は自分でも驚くほどうまくいったと思うし、いずれはこうなる予定でもあった。さらに言えば、すぐに御堂からの刺客が来るとは思っていない。佐倉が御堂に戻ってどんな報告をするかにもよるだろうが、あのプライドの高い男が、ありのままを報告するとは思えない。鈴也はそう考えていた。
「あんなとこで、いきなり御堂のヤツと鉢合わせするとは思わなかったからさ……それにしても、紫炎がとっさに鬼気を隠してくれて助かったよ」
　苦笑しながら、鈴也が紫炎の頭を撫でる。
　あそこで鈴也と鬼が組んだ事が御堂に知られれば、佐倉のプライドに関係なく御堂は動かざるを得なくなる。御堂を名乗る者が、鬼と『契約』しているなど、見逃されるはずのない不祥事なのだ。だが、今回は紫炎が気配を消してくれたおかげで、まだしばらくは時間が稼げそうだ。
「特に気配を消したわけではないのだがな」
　撫でられるのが心地よいのか、紫炎が目を細めて応じる。
「あの程度の術者では、私の脅威たりえぬ。だから無視していたま

でだ」
「俺からすれば結構、思い切って喧嘩を売った相手なんだが…『あの程度』…ね」
紫炎の尺度で考えると惨めになるので、鈴也は気にしない事にした。しかし、無視していたからって、一線級の伏鬼衆の視界から逃れおおせるものなのだろうか？
「まあいいか。それはそれとして……問題は貴子だよなぁ……」
佐倉次第でどうなるかはわからないが、鈴也は遅かれ早かれ正面から御堂家に敵対する事になるつもりでいた。その時に、貴子が鈴也サイドに立ってくれる、というのはあまりにも虫の良い話だ。最近、態度が軟化しているとはいえ、貴子は御堂家の次期当主であり、鈴也はその御堂家の権威を汚そうとしているのだから。
「まさかとは思いますが……貴子さんが敵対する事を、想定してなかったんですか？」
図星を突かれた鈴也の表情が固まった。
厳密に言えば、想定していなかったわけではない。ただ、対策を考える前に行動に出てしまっただけだ。もちろん、その軽挙が導く結果は同じ事だが。
「へへへ…」
鈴也は、幼い頃によくやったように、笑ってごまかしてみた。投じは鈴也がにっこりと笑って見せると、いつも早紀は膝をへなへなとついて何でも許してくれたものだ。さて、１０年たった現在での効果はいかに。
「そそそそのような笑顔でごごごごごまかされる早紀だとおおおお思いますか？」
力なく床にへたり込んで、どもりながら言い張る早紀。言葉の内容とは裏腹に、未だもって鈴也の笑顔は早紀に効果覿面のようだった。何がどのように効果を及ぼしているのかは、鈴也には知る由もないが。
そんな様子を、鈴也の膝の上に頭を乗せて見ていた紫炎が、その

ままの姿勢で鈴也の顔を見上げた。
「何を困る事がある？　あのうるさい方の雌は、家族ではないのだろう？」
『うるさい方の雌』が指しているのは、貴子の事だ。鈴也としては、早紀も貴子も静かではないと思うのだが、紫炎は単純に声の大きさで判断しているのだろう。
「う〜ん……俺にとって大事な人を家族、って言うのなら、貴子も含まれるんだよな」
やや逡巡しながらも、鈴也はそう答えた。鈴也が御堂家に対する反逆を企てた時、敵に回したくないと思ったのは早紀と貴子の２人だ。貴子は早紀のように全面的に自分の味方でいてくれたわけではないが、それは立場の違いというものだ。決して貴子は、本気で鈴也を蔑んでいるわけではない。
「あれも家族だというのか？」
下から白く細い指が伸びてきたかと思うと、がし、と鈴也の顎を掴んだ。親指と中指だけで掴んでいるとは思えない力で。
「なんだよ紫炎……ずいぶん家族にこだわるな。まぁ、そんなもんだよ。貴子の事も傷つけたくはない」
「むぅ……」
鈴也の言葉に、紫炎の唇がわずかに尖った。どうやら、またしても何か機嫌を損ねる事を言ってしまったようだ、と鈴也は頭をかく。
「ですが坊ちゃま。坊ちゃまが御堂と敵対した事を知れば、いずれにせよ貴子さんは傷つきますよ。精神的に……でしょうが」
いつの間にか立ち直っていた早紀が、きっぱりと告げる。
「やっぱそうだよね。怒るだろうなぁ……」
その鈴也の反応に、早紀は思わず溜息をついた。
(さすがに、貴子さんが気の毒になってきますね……)
貴子が御堂家の次期当主を目指す理由――それは、御堂家での鈴也の不当な扱いを改善させるためだ。自分が当主となり、霊力がないだけで人を虐げるような悪しき慣習を御堂家からなくす。そして

そんな彼女の努力も知らないまま、鈴也は御堂家に対するささやかな、だが大胆な復讐を始めようとしている。
鈴也が御堂家に敵対した事を知った時、貴子は確かに怒るだろう。だが、それ以上に悲しみ、傷つくだろう。彼女の、鈴也への思いゆえに。その事に鈴也は気づいていない。
(……とはいえ、素直に自分の思惑を坊ちゃまに告げない貴子さんにも、原因はあるわけですしね)
全てわかっていながら、早紀は鈴也に何も告げない。教えてあげない。
「まあ…ここはあえて、敵に塩を贈る事もないでしょう…今はまだ」
そう言って早紀は、怪訝な顔をする鈴也に笑いかけた。

第2部　11

ガシャン！！　と、けたたましい音を立てて、投げ付けた灰皿が壁に激突し、派手に砕け散った。大理石でできた、なかなかの高級品ではあったが、そんな事はまったく気にならなかった。和風建築である御堂本家の邸宅において、唯一の洋室である応接間に、御堂錦三はいた。ゆったりとしたソファに浅く腰かけ、眉間の皺を隠そうともしない。

伏鬼衆の名門、御堂家を取り仕切る現当主・錦三を苛立たせているのは、厄介払いが済んだと思っていた、目障りな人物が健在であった事だ。

当主の剣幕を恐れながらも、素早く使用人がやってきて、灰皿の欠片を拾い集めていく。そんな様子さえも、錦三には腹立たしく映った。

「あの糞餓鬼め……忌野童子との戦いで、くたばると思っていたのに……」

使用人がいる事も構わず、憎々しげに錦三はつぶやく。

御堂家の恥である鈴也が、今もはぐれ伏鬼として活動している事。さらには昨夜、御堂の仕事を妨害しかけた事――御堂家伏鬼衆の副長、佐倉からもたらされた情報に、錦三は奥歯を噛み締めた。

鈴也の存在は錦三にとって、邪魔以外の何者でもなかった。御堂家の男子として生まれながら、霊力をほとんど持っていなかったというのは、存在そのものが許されないという事だ。だからこそ家の恥を徹底的に隠すべく、屋敷の離れに閉じ込めておいたのに、勝手に出て行ってしまった。錦三がそれを見逃したのは、忌野童子の存在を察知していたからだ。放っておいても、すぐに襲われて死亡するだろうと思っていた。だが、忌野童子はなかなか行動を起こさなかったばかりか、愛娘の貴子にまで牙を剥いた。それも、鈴也を陥

れるためだけに。貴子は、鈴也を釣るための餌にされたのだ。
どれほど殺してやろうと思ったかわからない。だが、憎くとも身内は身内。そして鈴也に対する攻撃は、貴子が断固として認めない。錦三は目障りな甥の存在を、忸怩たる思いで見逃すしかなかったのだ。

そもそも、鈴也の父……つまりは自分の弟からして目障りだった。若い頃から長男である自分を差し置いて、その実力を高く評価されていた弟。気さくな性格で人望も厚く、次期当主には錦三ではなく弟を、という声も少なくなかった。さらに、彼が妻に迎えたのは、錦三が密かに思いを寄せていた女性だった。家柄、立場を考えると、彼女は自分の妻になるのが当然の流れだったにも関わらず、彼女は弟を選んだ。
だが、息子が生まれた瞬間から弟の評価は下落していった。息子が、霊力のない出来損ないだったからだ。錦三はこれまでの逆恨みを晴らすように、弟とその妻をなじった。弟は妻子と共に御堂家を出て行き、そして数年の後に忌野童子に殺された。
本来なら御堂家の者が鬼に殺されたのだから、討伐隊を差し向けるのが筋だった。そうしてけじめをつけなくては、面目が立たない。が、弟が御堂の家を黙って抜けたのをいい事に、錦三は忌野童子の追跡を止め、すべてを『なかった事』として処理した。それほどまでに、弟の存在は疎ましかった。
そして、今度はその息子が、佐倉の伏鬼を妨害しようとしたという。

(……だが、考えようによっては、これは好機とも言えるか)
錦三は、大きく息を吐いて苛立ちを抑える。
これまで鈴也は、可能な限り御堂と関わらないようにしていたし、自分もそうするよう鈴也に命じていた。娘の貴子は度々彼の様子を伺いに行っていたが、鈴也から接触や連絡をしてくるような事は一

度もなかった。それが、正面から御堂の妨害をしたという事は、鈴也を責める大義名分ができた、という事を意味している。
（私に楯突く事の意味を教えてやるわ……だが、その前に……）
錦三には、クリアしなければならない重要なミッションが残っていた。
「おい、お前！」
ようやく灰皿の欠片を全て拾い、細かい破片を掃除機で吸い取り終えた使用人に、錦三は声をかける。やや腰が引け気味なのは、これから遂行するミッションに対して、気が重いからに他ならない。
「貴子を呼んで来てくれ。急いで私のところへ来るようにな」
それだけを使用人に告げると、自らを落ち着かせるべく、錦三は椅子に深く腰を沈めた。

御堂錦三の大事なものに順位をつけると、1位は娘で2位が御堂家、およびそれに付随する自らの富と栄誉、3位に自分そのもの、となる。そして、錦三が恐れるものに順位をつけると、1位が怒れる娘、2位が娘の喪失、そして3位が地位の失脚となる。
愛娘の貴子が大事で、かつ怒らせる事を恐れているのは、単純に彼が親馬鹿という理由だけではない。もちろん、それも大きな理由ではあるのだが、最大の要因としては、貴子が次期当主と目される存在である事が挙げられる。
御堂家において、当主の権限は絶大だ。使用人はもちろんの事、大勢抱える配下の伏鬼衆全員が、当主の指示に従う。さらに御堂家は伏鬼衆の名門一族であり、他の伏鬼衆に対しても影響力を持つ一族。末端まで含めると100を越える伏鬼衆を取り仕切るのだから、単なる家長というだけでは収まらない権力を持っているのだ。
錦三は当主の座を他の血筋の者に譲る気はないので、貴子には当主の座を継いでもらわなければならない。貴子の実力は、既に錦三を超えていると言ってもいいレベルなので、そこには何の問題もない。むしろ、貴子の機嫌を損ねて当主の座を放棄されてしまう事の

方が、錦三にとってはよほど困る事態だ。
問題は、何かというと貴子が鈴也を擁護する事にある。つまり、鈴也を巡るスタンスにおいて、貴子と錦三は正反対の立場にあるのだ。錦三は何とかして鈴也を排斥したいが、貴子は何とかして御堂家内に鈴也の居場所を作ろうとしている。そんな貴子が当主になれば家の者達も、感情はどうあれ彼女の方針に従わざるを得なくなる。それは、元当主となるであろう錦三も例外ではないのだ。
貴子には当主になって欲しいが、鈴也の存在を容認する事は絶対にできない。近頃の錦三は、そんなジレンマに悩まされる時間が増えていた。

「お父様、お呼びでしょうか？」
凛とした佇まいを崩さないまま、貴子が応接間に現れた。一分の隙もなく巫女装束を着こなしたその姿は、親の欲目を抜きにしても美しい、と錦三は思う。それだけに、鈴也などと親しくしている事が余計に腹立たしい。
「うむ……あ～、その、なんだ……あの男の事なんだがな……」
先ほどまでの立腹はどこへやら、貴子を前にするとどうも言葉にしづらくなる。だが、いつもの事なので貴子の方は慣れたものだ。
錦三がこんな風に言いよどむのは、いつも特定の人物について、貴子と話す時だった。
「鈴也の事ですね」
「ああ、うむ、まあ……そうだ。最近は、あの男に近づいておらんだろうな？」
「はい。たまに監視の目は向けておりますが、近づく…というほどの事は特に」
貴子は、さらりと嘘をつく。鈴也の前ではあたふとしたり、感情を露わにする事も多いが、錦三が相手ではそんな必要もない。実際には、しょっちゅう押しかけては世話を焼いたり、紫炎と一戦交え

たり、紫炎に対抗して鈴也にしがみついてみたり、近づくどころの騒ぎではないのだが。
「そうか……で、その、監視の事だがな……」
「お任せを。決して御堂の名を辱めるような事はさせませんから」
ぴしゃり、と錦三の言葉を断ち切るように宣言する貴子。どうせ、もう監視はしなくていいから、とか、放っておけばいい、とか言われるのだろうと思い、出鼻をくじいたつもりだった。だが、錦三から返ってきたのは、思いもよらぬ言葉だった。
「ん、ああ……だがな、その監視……少し手が緩いのではないか？」
「……は？」
貴子は、父の前では出さないような、間の抜けた声を出してしまい、慌てて口をつぐんだ。
普段、父は「鈴也に関わるな」としつこいくらいに言ってくる。貴子の言う「監視」というのもあくまで鈴也に会いに行く口実に過ぎないのだ。つまるところ、錦三の言う「監視の手が緩い」というのは、貴子からすれば「もっと鈴也に会いに行け」と言われているようなものだ。それこそ願ったり、というところだろう。
「それは、もっと頻繁に鈴也を監視しろ、という事でしょうか？」
湧き上がる気持ちを必死で押さえ込みながら、貴子は努めて冷静に訊ねた。だが、錦三は不敵に笑った。その笑顔に嫌な気配を感じた貴子が、思わず身を硬くする。
「いや……そうではない。お前の監視は、奴にとって抑止力になっていないのではないか、と言っているのだ」
「どういう……意味でしょう？」
どくん、どくん、と自らの鼓動を感じ、それを抑え付けるかのように貴子は、自らの胸に手を当てた。
「鈴也が……何か？」
「ふん……奴め、昨晩は早紀と共謀して、佐倉の仕事を邪魔したそうだぞ」
「！？」

錦三は、自分の耳に入っている忌々しい事実を、貴子に告げた。一瞬にして、貴子の顔が蒼ざめる。まさか、堂々と御堂に対して反旗を翻すなんて。

「……たまたま標的が同じになっただけではありませんか？」

「いいや、私の聞いたところによると、伏鬼を終えた佐倉を、いきなり襲撃してきた、という事だが？」

事実が捻じ曲がって伝わっているのは、佐倉が自らのプライドを守ろうとしたためだろう。だが、錦三にとって細かい事はどうでもよかった。

「あの小僧がこんな手に出て来る以上、お前の『監視』とやらは、あまり効果がなかった、という事になるな」

これが、錦三の狙いだった。貴子が鈴也と接触する事を禁じきれなかったのは、貴子が「御堂家の名を守るため」だと言い張っていたからだ。鈴也が御堂家に仇なす事のないよう監視する、という大義名分が成立している以上は、錦三もあまり強く出られなかった。

だが今回の件で、貴子の監視があった上でも鈴也が行動を起こした、という事実を盾にすれば、貴子の『監視』をやめさせる事ができる。

鈴也に堂々と制裁を加える理由ができ、さらに大事な娘と鈴也を引き離す事もできる。全てが錦三の思い通りに動こうとしている。

「根拠は佐倉さんの証言だけなんですね？」

錦三が内心でほくそ笑んでいると、そこに冷静さを取り戻した貴子の声。

「な、何が言いたい？」

「例によって、鈴也の言い分は確認していないんですね、と訊ねているのです」

娘の視線が、見る間に冷たくなっていく様子に、思わず錦三は唾を飲み込んだ。何に対してかはよくわからないが、貴子はどうやら大変に立腹しているようだ。錦三の恐れていた状況が、目の前で現実になっていく。

だが、今度ばかりは錦三も退くわけにはいかない。
「あ、あの男の言い分など、聞く必要はない！　奴は、この御堂家に対して、弓を引いたのだ、事情など関係あるまい！」
必要以上に声を張ったのは、自分を鼓舞するためだ。
「では……私が確認して参ります」
冷たくそう告げて、貴子は錦三に背を向けた。
「ま、待たないか、貴子！　お前、どこへ……」
「鈴也の意思を聞きに行く場所が、鈴也の家以外にありますか？」
歩き出そうとした足をぴたり、と止めて、振り向きもしないまま言った。錦三は娘の言葉に、バネ仕掛けのように勢いよく立ち上がる。
「い、いかん！　いかんぞ！！　あの男には金輪際、近づいてはならん！！」
「うるさいのよっ！！」
「ひっ！」
怒りが臨界点を越えたらしい貴子の一喝を受け、錦三は思わず竦み上がってしまう。錦三が怯んだ隙に、貴子はさっさと応接間を出て行った。
その背中に声をかけようとした錦三だったが、彼の本能が「止めておけ」と強く告げている。結局、錦三は何も言えないまま、貴子の背を見送るしかできなかった。

第2部　12（前書き）

ちょっと短め。

第2部　12

少し時を遡り、鈴也が佐倉を叩きのめした晩の事。貴子はまだその事実を知らず、佐倉が錦三に、鈴也に惨敗した事実をどう報告したものか悩んでいた、深夜1時頃。
戦闘による疲労か、それとも御堂を敵に回した心労なのか、鈴也はベッドに潜るなり、すぐさま小さな寝息をたて始めていた。いつものように、その脇に寄り添うように腰かけているのは紫炎。だが、いつもと違う点が1つあった。紫炎の向かい側に、鈴也をはさむようにして座る早紀の姿があった。
「坊ちゃまの寝顔を心ゆくまで堪能するのは、私の特権でしたのに……」
恨みがましい表情で紫炎を睨むが、もちろん鬼の美女に堪えた様子はない。まるで早紀がいないかのように、ただ黙って鈴也の寝顔を見つめている。暗い部屋の中でも輝くような、その肌の白さに、女性である早紀までもが、思わずドキリとさせられてしまう。
「貴女に1つ、聞きたい事があります、紫炎とやら」
自らに対する問いかけに、紫炎の視線がわずかに上がった。これまで鈴也以外の誰に声を掛けられても、まったく意に介さなかった紫炎が反応したのは、話題が鈴也に関する事だと踏んだからか、それとも早紀の真剣な雰囲気を汲んだからか。
「貴女にとって、御堂鈴也とはどんな存在ですか？」
早紀は正面から紫炎の赤い瞳を見据え、わずかな嘘も見逃すまいとする。
鈴也はこの紫炎とも理解し合える、と言っていたが、早紀からすればやはり認識が甘い、と考えざるを得ない。仮に紫炎自身に害意がなくとも、鬼と人間ではあまりに価値観が違うのだ。紫炎が何かにつけて、「邪魔なら排除する」と言っているのが、いい例だ。
鈴也が望むなら、紫炎との共棲関係を続けるのもいいと思う。ただ、

紫炎が鈴也を食糧としてしか興味を持っていないのなら、話は別だった。
「質問の意味がわからない」
紫炎は早紀の質問に、首を傾げてみせる。妖艶な美貌に、蠱惑的な仕草――これでは、鈴也がいいように扱われてしまってもおかしくない。
「貴女にとって鈴也様は、ただの食糧なのですか、と聞いているのです」
「……たわけた事を」
吐き捨てるようにそう言うと、紫炎はもそもそと鈴也の眠るベッドの上に移動し、自らの膝の上に鈴也の頭を乗せる。
「……何をしているのです？　質問に答えなさい」
早紀の声に苛立ちの響きが混じる。
「幼い頃……鈴也にこうしていた女がいた」
紫炎は膝枕した鈴也の頭を、ゆっくりと撫でている。これが、質問に対する答えなのかどうかわからないまま、早紀はその行動をじっと見守る。
「あれは……貴様だったのだな」
『契約者』としての能力で、鈴也の記憶を覗いた時に見た、穏やかな鈴也の様子――それが、紫炎の脳裏に焼きついていた。その過去の光景を見た時、膝枕していた女は、おくぶん幼さが残るものの、目の前にいる早紀に相違ない。
「それが……どうしたというのです」
しばらく黙ってその行為を続けていた紫炎が、再び視線を鈴也の寝顔に落とした。
「やり方を教えろ」
「……やり方？」
今度は、早紀が首を傾げる番だった。目の前の鬼のいう事が、まったく理解できない。膝枕にやり方も何もないだろうし、それなら紫炎は実際にもう既にやっている。

「私がこうしても、鈴也には効果がないらしい」
そんなはずはない、と早紀は思う。幼い頃から鈴也は、膝枕されるのが大好きだったはずだ。口では恥ずかしがっていても、態度を見ればわかった。恥ずかしそうにモジモジしながらも嬉しそうな鈴也に、膝枕しながら悶絶していた早紀が言うのだから間違いない。
「鈴也が何を以って安寧を得ているのか、私にはわからない」
紫炎はそうつぶやきながら、鈴也の頬をそっと撫でた。その様子は早紀の目にも、愛おしいものに触れている雰囲気を感じさせる。
「……そんな事をしても、殿方は欲情しませんよ」
どうせ、鈴也の精気の質でも上げようというのだろう。早紀は諦めの混じったような声でそう告げた。だが、紫炎は早紀の返答に対し、静かに首を振る。
「違うな……欲情ではない。苦しみから、解き放つ」
「苦しみから……？」
こくり、と紫炎がうなづいた。
「貴女は、鈴也様が苦しんでいる事を、知っているのですね？」
再び、こくり。
鈴也が寝ている間も、ずっと起きて傍らにいる紫炎である。鈴也が過去の悪夢にうなされるところを見たのも、1度や2度ではない。そしてそれは、『契約』によって感覚を共有する紫炎に、ダイレクトに伝わってくるのだ。
「鈴也の心から、もたらされる苦しみ……だが私には。理解ができない」
早紀は紫炎の言い分を、即座に理解した。鬼に、人間の感情を理解しろと言う方が無理がある。共有はするけど、理解はできない。それが『契約者』同士の感覚なのだろう
「自分も苦しくなるから、鈴也様の苦しみを取り除くと？」
「苦しいのは鈴也だ」
鈴也の苦しみはあくまで鈴也のもの。紫炎には「鈴也が苦しんでいる事」しかわからない。なぜ苦しいのか、どうすればいいのかは

わからない。
「それと膝枕に、何の関係があるのです？」
「貴様がこうしていた時の鈴也は、苦しんでいなかった」
「……もしかして貴女、悔しいのですか？」
早紀は少なからず驚いていた。紫炎が鈴也の苦しみを取り除こうとしている事、そのための手段を自分に尋ねている事。そして何より、紫炎自身が鈴也を癒せない事に、忸怩たる思いを抱いている事に。
そう、目の前の鬼は、悔しがっているのだ。その証拠に、その形のよい眉がきゅっとしかめられ、赤い瞳が自分を睨んでくるではないか。少なくとも紫炎は、食糧として以外の何らかの執着を、鈴也に大して抱いている。早紀はそう確信した。
「悔しいのですね？　貴女の膝枕ではダメだと認める事が」
追い討ちをかけるように言ってやると、しばらくは睨みつけていた紫炎だったが。
「………ふん」
ぷい、と目を反らしたかと思うと、膝に乗せていた鈴也の頭をそっと枕に下ろした。そのまますると鈴也の眠る布団に潜りこんだ。
「貴女、何をしているのです？」
「悔しくなど……ない」
そう言って、眠る鈴也を胸にかき抱く紫炎。
「この……メス鬼が」
早紀の燃えるような視線を平然と受け流し、紫炎は鈴也にぴったりと寄り添う。鈴也の身体を両腕で包みこみ、ちらりと早紀の方を見ると…
「ふっ……」
小さく笑いをもらした。
「やはり……貴女は私の敵のようですね」
思わずスカートの中の薙刀に手を伸ばし、早紀は憎々しげにつぶ

やいた。

そんな静かな争いが行われてるとも知らず、鈴也は朝までぐっすりと眠るのだった。

ピンポーン。

チャイムの音がリビングに響き渡った瞬間、鈴也は思わず身をすくませた。早紀が同じ室内にいる以上、来訪者は見なくても誰かわかる。ある意味では、今一番会いたくない存在が、ドアの向こうに来ているのだろう。

「あ～あ…もう来たか…」

鈴也が佐倉を襲撃、という形で御堂家に弓引いたのは、昨晩の事である。思っていた以上に、貴子の耳に入るのが早かったようだ。まだ彼女に対する有効な対処法が見つかっていないせいか、げんなりとする鈴也。

そんな鈴也を尻目に、インターフォンの受話器をとろうとしたのは早紀だったが、それよりも早くするりと手を伸ばし、受話器を手に取った者がいた。紫炎である。

「帰れ」

鈴也が止める間もなく、紫炎は受話器に向かって告げていた。

「こら紫炎！　いきなり何を言ってんだ！？」

にべもない紫炎の対応に、焦ったのは鈴也。ドアの向こうで貴子のわめき散らすような声が聞こえる……と思ったら、なぜかずいぶん静かだった。

「邪魔なのだろう？」

平然と問い返してくる紫炎だが、鈴也としてはせめて、受話器を置いてからその言葉は言って欲しかった、と思う。恐らく、今の問いかけは貴子にも届いているだろう。確かに今、貴子と顔を合わせ

るのは気まずいが、邪魔、という言い草はあんまりだ。
「一度触ってみたかった。力の加減を覚えたのだ」
以前、力の加減を間違えてテレビのリモコンを握りつぶしてしまった紫炎が、同じ失敗はしない、とばかりに胸を張る。褒めろ、というアピールなのだろう、とは思いつつ、鈴也は今はそれどころではない、と思い直す。
「いいから、ちょっと代われ！　あ〜、貴子か？」
一変して不満そうな紫炎の手から、受話器をひったくる鈴也。紫炎のフライングにより、機嫌が悪くなっているであろう貴子に、できるだけ穏やかな声を掛けてみる。
『あんた、鬼の躾がなってないわよ。いいから、早く開けて』
予想に反して、貴子の声は落ち着いたものだった。いつもなら、ドアの前でわめき散らすぐらいは、してもおかしくない状況なのに。いつもと違う雰囲気に、ただならぬ気配を感じた鈴也は、のそのそと玄関のドアを開けに向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2761w/

落ちこぼれと美鬼

2011年11月17日03時23分発行